赤松中学

緋弾のアリア XVII

Aria the Scarlet Ammo

緋弾の叙唱（レチタティーヴォ）

MF文庫J

緋弾のアリア XVI

Aria the Scarlet Ammo

緋弾の叙唱（レチタティーヴォ）

赤松中学

LISA
リサ

YAMI
闇
SARAH
セーラ
KATZE
カツェ

ＭＦ文庫Ｊ

緋弾のアリアＸⅦ

緋弾の叙唱（レチタティーヴォ）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 ジェヴォーダン(Gévaudan)とエネイブル(Enable)
2弾 武偵戦友会(カメラータ)
3弾 忍者の暇はあれど
4弾 富嶽の女帝
5弾 乃木坂事件(ディスクロージャー)

1弾　ジェヴォーダンとエネイブル
Gévaudan & Enable

渡り蝶の群れ――

それはシャーロックが条理予知した、リサと俺が運命の時に見る光景。

「洒落た推理じゃないか、シャーロック」

かつてあの強敵が消えた空へと、俺は賛辞を送る。

この光景をリサと俺が見るのは、2度目。

1度目はあの逃避行の果て、ブータンジェの風車小屋の前で。

『ジェヴォーダンの獣』の姿を見せていなかったリサと、ヒステリアモードの姿を見せていなかった俺の主従契約がなされた日に――俺たちは、この渡り蝶の群れを見ている。

そして今、俺たちは再びそれを見た。

お互いに、本当の姿を見せ合った上で。

攻勢へと反転する、この運命の瞬間に。

巨大な金狼に姿を変え、犬かきで大西洋を泳ぐリサの背に跨がり――

「『竜の港』だ。見えたぞ、リサ、カツェ」

死の淵で覚醒させたヒステリア・アゴニザンテの視力でオランダの海岸を捉えた俺が、荒天の下で敵陣を指さす。

リサに鼻先で押されつつ、V－2の脱出カプセルに入ったままの厄水の魔女・カツェは俺の指を見上げて海流を操っている。

それに半ば押し流されるようにして、リサは陸地までを泳ぎ切った。昇ってきた太陽に雲の向こうからボンヤリ照らされたV－2発射場跡には、もう誰もいない。

コッソリと滝をくぐり、その裏側に広がる眷属のアジトを大きな岩陰から見渡すと……

中は、それなりに騒ぎになっていた。

だが右往左往するナチ・ガールたちの様子を見るに、対応の統率は取れていないらしい。

本来ならその統率を取るべきイヴィリタは、自らUボートに乗り込んでいくところだ。

V－2の墜落を観測し、カツェを救出しに行くつもりらしいが……そのカツェはここで両手をメガホンにして『あたしはここだー！　敵襲ー！』と喚いている。気密性の極めて高いカプセルの中からだから、声は全くといっていいほど外に聞こえないけど。

カツェはカプセルを中から蹴りまくってるが、リサが歪めてしまったハッチは開かない。通信機も取り出したが、受話器を壁にぶつけて怒っているところを見るに墜落中に壊れたらしい。分かりやすい子だなぁ。

（闇やセーラの姿は見えないが……マズい動きをしてるのがいるな）

眷属たちの根城になっている大型帆船を見上げる俺は、ヒールを鳴らして上甲板を歩くパトラ

が『ジャンヌをこれへ』と言っているのを読唇して舌打ちする。
パトラの背後のマストには縄が垂れており、その下端には輪っかがある。絞首台だ。
「パトラはリサ――『ジェヴォーダンの獣』が死んだと思って、もう生け贄のジャンヌを生かしておく意味が無いと考えたみたいだ。行こう。急がないと」
身を丸めて岩陰に潜むリサの耳に、そう告げた俺だが――
俺の体は短時間とはいえ与圧服も無しで高空と地上を往復した急減圧・急加圧の影響で、血管や呼吸器に少なからぬ不全を来している。
体が痺れ、息も苦しい状態で……ただ突っ込んでいくのも、スマートじゃないな。
「――ついでだ。敵の戦力を分断するために、ひとつ破壊工作といこう。リサ、俺の言う通りに動いて」
俺は銘剣デュランダルを手に、再びリサに騎乗する。もう、眷属には見つかる覚悟で。
「香港では眷属に『船』で痛い目を見させられていてね。その仕返しもしてやりたいんだ。まずは船首まで跳べるかい？」
俺が命じると、リサは――もう無害なカツェのカプセルを置き去りにして、バンッ！
岩を蹴って、海竜を象った船首像へと跳び上がる。柔軟で、滑らかな動きで。
「……！　――て、敵襲うーっ！」
「ジェヴォーダンとエネイブルだわ！」
映画『もののけ姫』のような状態で現れた俺に、甲板上ではナチ・ガールたちが悲鳴を上げる。
そしてリサの巨体に怖れをなしたか、次々と船から逃げ出した。
この総崩れっぷり……どうやらここの党員たちは、眷属の代表戦士の身の回りの世話をする小間使いみたいな存在だったらしいな。
いいさ。逃げたい子は今のうちにお逃げ。雑兵の参戦は極東戦役のルール違反だし。
「――こ、こら、お前たちッ！　敵前逃亡は銃殺刑に処すわよーッ！」
海賊船から眼下の海水へ飛び込んでいく党員たちに、イヴィリタは威嚇射撃をしようとUボートのセイルに身を乗り出し――乗り出しすぎて、自分も水中に転げ落ちた。
そして泳げないのか「助けて！　助けなさい！」と金切り声を上げて浮いたり沈んだりしている。何やってんの。
まあ、あの辺のコメディー要員は放っといて……こっちはこっちの作戦を進めよう。
「リサ、前から後ろへとあのロープを渡ってくれ」
俺がそう言って背中をポンと叩くと、リサは――タッ！　タンッ！　船首像、船首楼を蹴り、大型帆船を大洞窟の岩壁に係留しているロープへ降り立った。
4本足で器用にバランスを取り、綱渡りするような状態のリサに「次へ」と言いつつ、俺はそ

の太いロープをデュランダルで掬うように切断する。リサが渡った次のロープも、その次も、と、どんどん切断していくと……グラリ……と、海賊船はその巨体を揺らす。

この『竜の港』内には、地下水脈の緩い流れがある。それに押されて、船は――留められていたロープを全て切られた結果、ゆっくりと前進し始めた。

滝のカーテン、その向こう側の、海へと。

「……トオヤマ、キンジ……！」

舵補助帆へ降り立った俺を呻きながら見上げるパトラに、ウィンクを1つ送り――

「――ここ掘れワンワンだ、リサ」

俺はリサを船尾楼へ飛び降りさせ、そのまま甲板を爪で叩き割らせる。

ジャンヌがどこにいるかは、分かっていた。外の混乱に乗じて脱出しようとしたらしいジャンヌが――船尾側の砲門蓋を1つ、内側から白く凍らせていたからだ。

そこめがけて、木造の船内をリサがバリバリと掘り進み……

中部砲列甲板の砲座室に閉じこめられていたジャンヌの元へ、上から辿り着く。

「……遠山！」

ジャンヌは対超能力者用の手錠をねじ切れずにいたらしいので、俺はリサから降りつつそれをデュランダルで断ち切ってあげて――

「これは……これが、『ジェヴォーダンの獣』か……！」

サファイア色の瞳を丸くしているジャンヌに、そのデュランダルを渡す。

「そうなんだよ。でも不幸中の幸いだったね、この子は女の子なんだ」

「なるほど、それでお前が手懐けられたというワケか。さすが女たらしの遠山だ」

「えーっと、いま君は物凄く納得した顔をしているけど、そうじゃなくて……ジャンヌを食べたりしないって事だよ。生け贄は異性に限られるんだろう？」

苦笑いする俺の前で、ジャンヌは――

とても大切な物だったらしいデュランダルを抱きしめて、二度、三度、頷く。

「ありがとう、遠山……助かったぞ」

「お礼には及ばないよ。エコール戦車戦では、ジャンヌが俺を助けてくれたからね」

迫り来る敵の気配にベレッタを抜きつつ、俺は改めてリサに騎乗する。

それを見上げたジャンヌは、びりびり、と生け贄のドレスのスカートを自ら引き裂く。

機動力を上げて自分も戦うつもりらしいジャンヌの、白磁のような太股をチラ見させていただいて――ヒス燃料を補給した俺は、

「ジャンヌ・ダルク騎士団の結成だね。団長1人と騎士1騎だけど」

「フフッ、そうだな。では私に続け、騎士よ」

三つ編みを結い上げ、あの地下倉庫で見せた戦闘モードになったジャンヌと軽口を叩く。

甲板（かんぱん）に打って出ると、そこでは――

あの水着のような衣装を着たパトラが、コブラの金冠を輝かせて待ち構えていた。
いやはや、彼女も大した女傑だね。ジャンヌ、ジェヴォーダンの獣、そして俺が正面に出てきたっていうのに、一歩も退かないよ。
係留を解かれた大型帆船は、滝のカーテンに向かって微速前進している。少し揺れて、足場はあまり良くない。
「――遠山、あれは私に任せろ」
デュランダルの剣身にパキパキと氷を纏わせながら、ジャンヌが前進する。
女騎士同上の一騎打ち――といったムードが甲板上に流れ、Uボートに避難したナチ・ガールたちが口々にパトラへと声援を送り始めた。
「分かった、他は俺が引き受けるよ」
船尾楼に突き出たボナベンチャー・マストの帆桁に腰掛けて、こっちを見下ろしている颱風の・・・セーラ……
その微かな殺気に気づいた俺が、リサを操ってそっちに向き直る。
ジャンヌもパトラも、プライドの高い女性たちだ。
2人の決闘にあの長洋弓で無粋なジャマはさせたくないし、セーラは俺個人からしても『銃弾撃ち』を攻略された遺恨のある子だからね。狙撃手は苦手だが、お相手しよう。
「パトラ。イ・ウー時代は先輩だったが、遠慮はしないぞ。この決闘は極東戦役の一戦。よもや異存はないだろうな」
「――無論ぢゃ。妾はのう、ジャンヌ。あの頃から研鑽派のお前らがキライだったのぢゃ。シャーロック亡き今なら、自由に討てるわ。ただ、お前は殺さず、妾の戦上に取り立ててやらんでもない。弱いお前でも、奴隷1人分ぐらいの仕事はさせられようぞ」
――『銀氷の魔女』対『砂礫の魔女』――
パトラは周囲に砂が無いなりに、自分の王冠や首飾りを砂金に戻してから曲刀に変えていく。
銘剣デュランダルを相手にするには、純金の刀はヤワだろう。だが、そのハンデがあっても――魔女としての存在感は、パトラの方が大きい。周囲にピラミッド形の施設は見当たらないが、どこかでたっぷり魔力を補給してきているようだ。
格上のパトラに気圧されつつあるジャンヌに、俺は……
「ジャンヌ、君はもうイ・ウーの頃のジャンヌじゃない。俺たちとの、そしてカツェとの戦いを経て、レベルアップしているハズだ。パトラにそれを見せてやれ。俺が、見守っていてあげるから」
そう言い残して拳銃の撃鉄を起こし、リサを跳び上がらせる。セーラの方へ。
ロビン・フッドの子孫で、風を操る魔女のセーラは――

帆柱から跳びかかるリサを、ポンッ。
見えない盾で弾くようにして、簡単に躱した。
猛獣の運動力を物ともせず、さらに、ポンッ、ポンッ、と、帆桁やマストの見張り台をアスレチックみたいにジャンプして追撃を躱していく。
まるで磁石のS極とS極のように、リサから離れるセーラの斥力……そのカラクリが、分かってきたぞ。セーラは風を操り、空気のクッションのようなものを自分とリサの間に張っているんだ。彼女はその都度、羽根飾りつきの帽子が飛ばないよう押さえてたし——チェックのミニスカートが思いっきり広がる光景が、そのありがたい証拠だ。
リサの爪や牙は空を切るばかりだが、追わないワケにはいかない。セーラは弓使いだ。距離を開けず、矢を番えるヒマを極力与えず、風の影響を受けにくい銃で——
——ガウンッ！　と俺が発砲したが、それを先読みしたセーラは既に弓から矢を放っていた。それが僅かにホーミングして、俺の弾丸を——ビシッ！　迎撃する。
（『銃弾撃ち』……！）
因縁の技を、逆にやられちゃったよ。しかも弓で。
女性相手とはいえ、これにはちょっと腹が立ち——
俺はセーラを船首側へと追い詰めるのに、少々躍起になってしまう。
さらに眼下で剣戟を繰り広げるジャンヌとパトラを気にかけて、俺の意識が逸れた時。
ドスンッッッッ——！
船首楼の内側から、その上にいたリサ目がけて何かが打ち上げられてきた。
（——砲撃かッ!?）
騎上の俺には見えなかったが、下から真上へと大砲か何かを撃たれたらしい衝撃がリサ越しに伝わってくる。
ウォォオンッ……！　と、リサが悲鳴のような吠え声を上げ——
——ち、縮んでいく。空中で。
「……リサっ！」
俺は——見る間に人の姿へ戻っていくリサを抱き、手足で衝撃吸収技・橘花を放ちつつ崩れかけた船首楼へと降り立つ。
「あ……うっ……も、申しわけございません、ご主人様……」
腹部を押さえて久々に人語を喋ったリサ——その金色の体毛は煙のように消えていき、もう体の前面は……ハ、ハダカになっちゃいつつあるぞ。背後、お尻の上にはフサフサのシッポが残ってるけど。
流れる金髪のロングヘア、その合間にはイヌの耳のような尖った耳がこれも残っている。理子が好きなアニメやマンガに出てくるような、イヌ娘といった風情だ。

ジェヴォーダン状態で攻撃を喰らったおかげか、見たところダメージはそこまで深刻なものではなさそうだったが……

瓦礫の中にあったカーテンでリサに体を隠させつつ、俺は気づく。

今のは、砲撃じゃない。

砲撃の方がまだマシだった。

「このヨーロッパ、鬼が出るか蛇が出るか……とは思っていたけどね。蛇はもうパトラのコブラが出てる。鬼が出ても不思議はないかな」

振り返りながら、そう言って立ち上がった俺は――

いま投げ上げてジェヴォーダンの獣を倒した、１００kgはありそうな金棒を拾い上げるソイツを睨み付ける。

アフリカ風の意匠が施されたカラフルな和服を、筋骨隆々とした巨躯に纏った……鬼の、女。

――閻。

でかい。蘭豹先生や車輛科の鹿取美も俺より背が高いが、閻は彼女らを優に上回ってるぞ。

２m近い大柄女子だ。

視界の端では、あっちは小柄なセーラが……ふわり。チェック柄のスカートを膨らませ、遠いUボートの甲板に降り立つところだった。

なるほど。最初から逃げ腰だなとは感じていたが、セーラは逃げるついでに閻の所まで俺たちを誘導してたんだな。また、セーラにしてやられたよ。

ざ……ざざ……ざざざ……

と、水流に押し流される海賊船は、その先端から滝のカーテンに入りつつある。

「ご、ご主人様……！」

カーテンで体の前面を隠しつつ、イヌ耳を立ててリサが俺を心配してくるが――

「閻、リサはもう戦えない。主人として、戦わせない。だから見逃してやってくれないか。代わりといっては不足かもしれないけど、俺が閻の相手をするから」

俺は逆に、リサの身を案じて閻にそんな頼み事をする。

すると、女なのにイケメン顔の閻は「？」と小首を傾げ……

「遠山。汝は歩む先に居る虫を、皆々踏み潰して歩くのか？」

ただの少女に戻ったリサには興味が無い、というムードで返してきた。

結果として、リサを見逃してくれるみたいだが……

それは、いただけないな。俺のリサを、虫あつかいとはね。

ただでさえリサを倒されて、ヒステリア・レガルメンテ気味の俺なんだ。あまり怒らせない方がいい。

ざざざざざ……！　と、もう帆船に降りかかる滝の水は俺たちのそばまで迫っている。

「外洋に出るね」
「そのようだな」
「じゃあ、あの滝を出たら手合わせしよう。鬼は外と言うし、閻もその方がいいだろ？」
「遠山 侍は昔より、折々、分からぬ事を言うものだな」
閻はマジメそうな目で俺を見据えると、鈍重そうな金棒を……鉄パイプでも扱うように、軽々と担ぐ。
「その前に聞いておきたいんだけど……君は、人間ではないみたいだね」
「左様。見ての通りだ」
「失礼な質問を許して欲しいんだけど、女性だよね？」
「左様。半陰陽でもない」
発言の一部は分からなかったけれど……ヒステリアモード的には、閻が女性かどうかは重要な情報。鬼と人の間で子孫が残せるかどうかは分からないけど、分からないからには――残せる、というセンを残して考えるしかないね。
となると、閻を女性と見なして……心を鬼にして、戦う必要があるな。
……ざざざざざ……！
船首楼の瓦礫に立って右舷側、左舷側にいた俺と閻は、揃って滝のシャワーに当てられ始める。
そして、水のカーテンでお互いが見えなくなってから――
それを出た時、俺は既にベレッタを閻に向けていた。
「じゃあ、鬼退治を始めよう」
ウインクと共に――ガウンッ！
火を吹いた俺の銃口に全く怯む様子もなく、閻は――パシッ。
小さな音を立てて、銃弾を掴んだ。金棒を持っていない方の手で。
「ふむ。種子島の頃から然程の進歩が見られぬな」
ずぶ濡れのまま、銃弾を抓んで眺めている閻は……
俺の銃弾掴みとは違う原理で、今、弾を止めたように見えた。
手による減速がほとんど見られなかったぞ。
「……どうやって止めたんだい？　弾」
参考までに、前髪から水を滴らせつつの俺が尋ねると……
「ん？　パッと来たから、グッと握ったのだ」
何の参考にもならない回答を、真顔でされた。
うーん。天然なのかな、閻は。それとも頭があまりよくないのかな。
何にせよ、銃は無用の長物みたいだ。しまっておこう。
「渡る世間に鬼は無いと言うけれど……ウソみたいだね。俺の世間に鬼が出てきたのは、3度目

だよ」

「ほう。何処にて、何方に逢鬼した」

「元・眷属だから、閻も知ってるんじゃないかな？　横浜でブラド、押上ではヒルダっていう吸血鬼と戦ったんだ。吸血鬼も鬼だろう？」

「否。烏滸がましい」

閻は少し口をへの字に曲げて、

「鬼は人より賢く、獣より強き、生類の頂点に君臨する存在。彼奴らは鬼の文字を戴くに相応しくない、チスイコウモリに過ぎぬ」

……だってさ。ヒルダが聞いたら怒るだろうなあ。

だが、その発言も――

この閻から出てくると、説得力がある。

強いぞ。ブラドほど大きくなく、ヒルダほど派手でないにせよ。純粋で、莫大なパワーが――塊になって、歩いている。そういう印象だ。

未知の敵だけに戦力分析は難しいが、強さを想定しようとするほど大きく見えてくる。本当の大きさ以上に。

実際、空で俺と互角だったリサを一撃で倒している相手だ。

やられるだろう。少しでも、ミスをすれば。

ヒステリアモードでも額に滲んできた冷や汗を、さっきの滝の水滴がごまかしてくれる中……

「鬼ってことは……閻は、ハビの関係者だよね。この戦いも、極東戦役の代表戦上同上の決闘という理解でいいのかな」

どう戦うかの手順を脳内で模索しながらの俺が、時間稼ぎがてらに話を振る。

すると閻はその問いには答えず、パーにした手を俺の方に向けた。

「人間ごときが覇美様を呼び捨てにする事、罷り成らぬ。謝し、申し直せ」

「女性の頼みでもね……普通、敵に敬称は付けないよ。二心あると思われても困るし」

「……覇美様を侮辱するという事は、天を侮辱するという事。因って遠山、此の閻、汝に――天誅を下すッ」

文字通り目の色を変えて、赤く光り始めた瞳で俺を睨んだ閻は……

よっぽど俺の発言が気に障ったのか、怒っているようだ。

この辺で……タイムリミットだな。

あまりいい手も思いついてないが、そろそろ闘るか。

鬼さん、やる気だし。さっき先制攻撃しちゃったし。

閻は、どうやら去年の10月に空き地島で見た鬼・ハビの部下で……その忠誠心は極めて高いらしい。ヨタ話で探れたのは、このぐらいだな。

「推して参る。参られよ、遠山」

ぐ、ぐぐぐ……と、閻は……

ゆっくりと、構えを取った。

だがその構えは、人間の格闘技には全く存在しないもの。

金棒は、剣道の脇構えのような形に下げている。ただし、左手一本で。

武器を自分の背後に隠すようなそれは、『振りかぶり』――

直撃を喰らった俺の体はバラバラに破壊され、空に飛び散る事になる。

その人智を超えた筋力で、俺を空高く打ち上げるための構えだろう。もちろんその際、金棒の

下げた金棒とは対照的に、右手はヒグマの如くワイドに上へ構えている。あれは、爪で俺を引

き裂くつもりだ。これも人間の格闘術ではまず見られないもの。

さらに人間と異なることに、閻の構えには『頭部の構え』『顔の構え』が加わっている。

俺を睨みつつ頭を斜めに下げ、額中央とその左側に生えた2本のツノをこっちへ向け、さらに

拗ねた子供が『イーだ』をするようにキバを露出させている。

それぞれ、ツノで俺を突き、キバで俺を噛みちぎる攻撃を前提とした……あれもレッキとし

た、構えだ。

――人間の知能を兼ね備えた、大型肉食獣。

それが、鬼の正体ってことか。

俺なりの理解で言えば、だけどな。

「……分かったよ。眷属に捕まってからは運動不足で鈍ってたけど、柔軟体操はV－2で済ませ

たところさ」

俺は鬼に比べればまだ人間なので、普通に左手開手・右手拳で構える。両足は自護体にし

て、重心は若干後ろに置いた。

父さんに習った遠山家の体術、蘭豹に習った武偵格技、あとアリアのバリツをパクってチャン

ポンにした、キンジ流の構えだよ。

特徴としては、ややカウンター……『後の先』狙いなところかな。

「……我が金棒・金剛六角が千人力の初撃――受けてみよッ」

一人力の俺に、文字通り鬼に金棒の閻が一歩踏み出した瞬間。

――パァン――！

俺は銃を使わない見せかけからの――『不可視の銃弾』を放つ。

発砲の動作が見えなければ、弾丸を掴むこともできないだろうと思ったが……さすがは鬼。金

棒を振り上げ、ガッ！　と当たり前のように弾を払った。

その、金棒から――ドドドドドドドドドドドドドッ！

空間が歪んで破裂するような力の渦が、こっちへ迫る。

これは俺の桜花の大型版、超音速の衝撃派……！

金棒のスイング速度は音速ではなかったが、俺の眼には見えた。

閻は一瞬だけ金棒をコマの軸のように超高速でコークスクリューさせ、その全面を覆うトゲのような突起全てを超音速に至らせたのだ。

爆音にリサが首を竦める中、

「――ッ！」

俺はクロスした両腕で顔面をブロックしつつも、瓦礫ごと吹き飛ばされる。質量の大きそうな瓦礫を蹴り、船首楼の上へは戻れたが……

持ってたか、鬼も中距離攻撃を。

それも金棒から衝撃波が竜巻のように放たれる、効果的には妖刀のサクガの巨大版だ。

顔を上げた瞬間、

「――！」

至近距離に閻がいる事に気付き――

その構えから金棒の軌跡を見抜いた俺が、這うように伏せる。

バァアアアアッ――！　と再び六角柱の金棒が振るわれ、渦巻きのような衝撃波が船首斜檣ごと船の斜桁帆をもぎ取っていく。

衝撃波技の殺傷圏は、前方、一定の範囲に限られるものだ。火炎放射器などをイメージすれば、先読みできないものではない。

即座に続いた打ち下ろしを、俺は両手両足で横に跳ねて躱す。

空振った金棒が、船首楼の一角を思いっきり打ち壊し、排水量3千トンはあろうというナオ・デ・チーナを盛大に揺らした。

「……ッ……！」

やむなく上方、やや斜めになった船首帆柱へと足の桜花で跳び上がると――

甲板上で戦うジャンヌとパトラも、閻の攻撃で起きた爆音に驚いている様子だった。

俺は彼女たちに笑顔の一つでも見せてやりたかった所だが、その余裕はない。閻が俺を追って、旋風のように迫ってきていたからだ。

（――速いッ……！）

帆柱を蹴って、俺は帆を垂らす帆桁へ逃げる事しかできない。

閻――怪力はブラド以上、素早さはアリア以上。そんな敵が存在するとはね。

いくらヒステリアモードでも象と押し相撲では勝てないし、チーターと追いかけっこはできない。だから、知恵を使う必要があるな。

「――奮ッ！」

ハスキーボイスで気合い一閃、閻が突き出してきた金棒・金剛六角に対し――

俺は軽く跳躍して、トンッ。
そのトゲの生えた六角柱に、降り立った。こうすればコークスクリューで大型サクガをやることもできないだろう。やろうとしたら、桜花で逆方向に蹴るよ？
「フハハッ」
嗤った閻と、笑顔の俺が視線を交わす。
バンッ！　と閻が金棒を払い上げた勢いを利用して、俺はさらに上の帆桁へ。
潜水艦用防空壕のような港に停泊させていた都合か、この帆船の帆柱は一部が折倒式になっている。楢材だし銅張りもされた、重たい帆柱だから……
継ぎ目を折って閻ごとうまく海に落とせば、よく沈むだろう。
閻は俺を溺死させたカタキの1人でもある。彼女にも、溺れる苦しみを味わわせてあげよう。
――と、腹に一物ある俺が降り立った、最上段の帆桁……
その反対側に、閻も軽くスピンしながら跳び上がってくる。
帆柱のほぼ最上部に位置するここの高さは、40m以上。
船は運河のような短い川を押し流されて、ちょうど大西洋に出たところだ。
雲間からのぞく旭日の中、風は陸風が海風に切り替わる凪の時を迎えようとしている。
10mはある帆桁の端で、俺越しに陸地を眺めた閻は――
「――人間五十年――」
……舞い、始めた。
前置きもなく。
扇の代わりに広げた手を掲げ、金棒を携えたままで。
「化天の内を較ぶれば、夢幻の如く也、一度生を稟け、滅せぬものの有る可き乎――」
その……あまりの優雅さ、美しさに……
俺は作戦も忘れて、見とれてしまう。
これは――敦盛。
人間の世の五十年の歳月は、天界の一日にしかあたらない儚いものだ――という意味の歌詞を伴う、古い日本の舞踊だ。
それを、決闘の最中に舞うとは。
粋な……女だな、閻は。
体はゴツゴツしてるけど。
「……なぜ、本気で来ぬ。上へ上へと逃れおって。むしろ下――この帆掛け船の中に隠れれば、潜みながら戦う手もあったろうに」
舞い終えた閻が金棒を担ぎ直し、マジメ一徹な顔で訊いてくるので、
「ちょっと、体質的な理由があってね」

今の舞いに拍手を送りながら、俺はそう答えておく。
閻が言うような作戦に、思い当たらなかったワケではないが……
俺が下に潜りたくなかったのは、彼女が和服の中に下着をつけてない事に気づいていたからだ。服の裾もやたら短いものだし、それを下から見上げるなんてイケナイ事だろう。
閻、次は虎皮のパンツでもはいてきてくれないかな？
「それに俺は、女性の美しい肌に傷をつけたくはないんだ。今までも出来る限りそうしてきたし、君のこともそっと組み伏せてあげるよ。安心していい」
「取ってもおらぬのに、鬼の首を取ったような顔をするな」
呆れたように俺を見る、閻に――
「じゃあ、俺も同じ質問をさせてもらおうか。君も、どうして本気で来ないんだ？」
今度は俺が、問いかける。
すると閻は『気づいていたか』という感じに大きな目をちょっと見開き、
「我は覇美様に、戦う正式な許可を頂いておらぬ故」
背筋を伸ばし、スッ、と掌を前に突き出して俺を制するような姿勢を取った。
「大和男子の若武者を前に、我も斑気を催してしまったが――ここまでだ。鎮まり給え、遠山。我ら、未だ、刻に非ず」
その背後、向こうから……雲の下、かなりの低空・海面スレスレを……
（……鳥？）
いや、白い航空機が、まっすぐ北北東から飛んできている。
その機影は――胴体がボートのような形状をしている。水面発着ができる、飛行艇だ。着水時にエンジンが水を避けるための、あの特徴的なガル翼は……『鴎』の異名を取る、ロシア製のBe－12に違いない。
バサァアアアアァ……！　と海面を掻き分けて着水したチャイカは、プロペラを回したまま水上航行に移る。翼下にロケット砲や爆雷らしきものを搭載しているが、軍用機マークは無く……代わりに、紫水晶の紋章が描かれている。あれは――ブリュッセルにあったリバティー・メイソンの隠し会館で、似たものを見た記憶があるぞ。
帆船にほぼ横付けしてきた飛行艇の開けたハッチから、ワイヤー付きのフックが打ち込まれ――電動式の滑車を使って、ジャンヌが凍らせていた砲門蓋へと――
（カイザー……！）
ブリュッセルで俺と物別れになった、リバティー・メイソンの代表戦上が突入してきた。
見れば、上甲板へは同様にコート姿のワトソンも乗り移っていく。
その甲板上では、全力を使い果たしたジャンヌがデュランダルを支えにして座り込んでいる。
ジャンヌと背を向け合うような位置では、足下を凍り付けにされて動けなくなっていたパトラが……ワトソンにシグ・ザウアーP226を向けられて、両手を挙げた。

リバティー・メイソンは――
V－2の発射を、レーダーか何かで捉えていたのだ。
そしてすぐ、アムステルダムからその発射地点めがけて出撃していた。
そこで即座に飛行艇を運用できる辺り、その組織力には頭が下がる思いだね。
「極東戦役――遊戯の刻は、間もなく終わろうぞ。我の務めは戦の行く末を見守る事でな。……後の世にて、改めて会おうぞ」
閻は俺に背を向け、
「しかし、鬼と体一つで渡り合える剛の者が当世にもいたとはな。誇ってよし」
半分振り返って、男子の俺ですらドキッとするほどカッコいい微笑を寄越してくる。
でも、体一つで……って言うけど、だって銃効かないじゃんキミ。
「最後に訊ねるが、遠山。汝は、何者ぞ？」
マストから海にダイブして立ち去ろうとして。
「ただの高校生だよ。ちょっと偏差値低めで、荒っぽい学校のね」
――俺は彼女から視線を外し、それを見過ごさざるを得ない。
本気を出されたらバラバラにされる事は分かっていたし、もう1人、カイザーに船内で追い詰められたらしく……この帆船から、身投げしようとしている御方がいるからな。
最上段の帆桁に立つ俺の眼下、遥か下の船体で――
砲門の蓋を手探りで開けた白い法衣の女性が、海へ飛び込もうとしている。
メーヤを利用し、眷属にも師団にもついていたバチカンの祓魔司教、ローレッタさんだ。
彼女はこの帆船に乗っていて逃げ遅れ、今までずっと隠れていたらしい。
目の見えない彼女があんなぞろっとした服のまま、海に転落したら――いや、彼女は、そのつもりなのだろう。
大きな胸の前で十字を切って、聖書の一節を暗誦しながら……
パッ、と、法衣を広げて宙に身を躍らせたローレッタさんを、それより数瞬前に上から飛び降りていた俺が空中でキャッチする。
そして飛び降りながら船体に引っ掛けていたベルトのワイヤーで、宙吊りになり……
「？　？　？」
見えない目をキョロキョロさせて慌ててる。
「きゃっ……！」
びくう、と全身を縮こまらせるようにしているローレッタさんのほっぺたに、小さくキスしてあげた。
「キリストさんも言ってるだろ？　『汝の敵を愛せ』って。愛する事は得意でね」
俺は優しく、優しく、囁いてあげて……驚く彼女の耳元に、

拳銃を手に砲門から上半身を突き出してきたカイザーには「やあ、お久しぶり」と、愛想笑いを送っておいた。こっちは投げやりでいいや。男だし。

それから続々と着水してきた『鴎』の群れは……

元々がソ連の対潜哨戒機だった事もあり、逃げようとしていたイヴィリタのUボートもしっかり河口で取り押さえた。

セーラはいつの間にか姿を消しており、カツェはワトソンたちにV－2のカプセルごと捕獲され、『竜の港』での戦いは師団の逆転勝利の様相となっていく。

俺が乗り移ってノックしたUボートのセイルからは、

「やっぱり……『呪いの男』だわ、お前は……！」

額に逆卍形の青筋を浮かべたイヴィリタが、部下の誰かの肌着で作った白旗を掲げて出てきた。一応はリーダーとして、党員たちを背後に守りつつ。

「違うな。『咎』だ」

とはいえ、イヴィリタは実際大した女だと思うよ。シャーロックやジーサード、孫にも殺されなかった俺を、初めて殺したんだから。

リバティー・メイソンの飛行艇でアムステルダムへ向かう途中、俺はブリュッセルでの事を詫びにきたカイザーを適当にいなし……竜の港にあったドレスを鹵獲して着たリサの、やわらかな膝枕でドロのように眠ってしまった。

そうして昼過ぎに着いたアムステルダム、そのリバティー・メイソンのロッジへと案内される間も――竜の港から解放されたメーヤ共々ローレッタさんが土下座してきたんだが、それも気恥ずかしいので「いいよいいよ、お前らも組織内での事情とかがあったんだろ」とあしらっておく。

……事実、ハメられたのは俺がマヌケだったせいだしな。

武偵高じゃ、ハメられた生徒を気遣うヤツなんていない。

敵に易々と陥れられるような武偵は注意力や警戒心に欠け、自分やチームを危険に晒すリスキーな人材という評価を受ける。

生徒からの信用は傷つくし、先生にバレたら体罰もの。むしろ敵を罠に陥れたヤツほど信頼され、誉められるのが実戦ってヤツなんだ。

その点……

俺はもっと、用心深くなるべきだな。

それはヨーロッパ遠征の教訓の一つだよ。

気をつけよう。1回殺されるという、高い授業料も払ったワケだしな。

リバティー・メイソンのロッジは、先日リサとも来たアムステルダム中央駅（セントラル）――港湾のすぐ裏手だ――から、車で15分ほど行ったWTC（貿易センター）ビルの最上階にあった。

そこはオランダという国の高度な建築技術をアピールするかのようにデザインされた、エメラルド色をした格子（こうし）状の窓ガラスが美しいビル。

その後、お馴染（なじ）みアルバート・ハインで食糧を大量に調達してきたリサが腕を振るい、俺たちはロッジのキッチンで特盛（とくもり）のオランダ料理にありつく。

投降（とうこう）したパトラ、それとイヴィリタとカツェにも食わせてやったら、3人とも遠慮なく食うわ食うわ。デザートのラムレーズン・アイスに至っては俺（おれ）の分まで食いやがったよ。

「……先ほど、バチカンから連絡がありました。私はシチリアのサン・フランチェスコ会修道院に出向（しゅっこう）となります。遠山（とおやま）さんにお会いできるのは、今日が最後になるかと……」

食後にローレッタさんがそう小声で報告してきたのだが、

「シチリアか。『ゴッドファーザー』で見たことがあるけど、キレイな島だよな」

年上の美女が近くに座ってきたことにテンパった、すっかりヒステリアモードの解けた俺は……そんなつまらない別れの言葉しか贈れなかった。

バチカンは、トカゲのシッポ切りみたいな形で彼女を島流しにするつもりなんだな。

師団（ディーン）と眷属（グレナダ）の両方にいい顔をして、極東戦役に保険を掛ける――ローレッタさんはその任務を遂行（すいこう）した挙げ句、詰（つ）め腹（ばら）を切らされたワケか。

まあ、組織とはそういう残酷なもので……日本の会社とかでもそういう不本意な左遷（させん）は日常茶飯事（さはんじ）だ。詰まるところ、あんた、運が無かったんだな。

だがそれも、幸運強化戦士・メーヤをコキ使っていたせいかもしれないよ。ジャンヌの説明によれば、幸運・不運というものはどこかでバランスを取るそうだから。

師団が『竜の港』からアムステルダムに連行した眷属メンバーは、投降した幹部クラス――パトラ、イヴィリタ、カツェの3人だけだ。

彼女らは欧州眷属の代表として、師団との停戦交渉を要求してきて……

リバティー・メイソンはそれを受けた。

実質、ほぼ師団の勝利で終わった極東戦役の、一日（いったん）の戦後交渉というワケだ。

逃亡中の眷属もいるが、代表戦士（レフェレンテ）クラスは闇（えん）・覇美（ハビ）とセーラぐらいのもの。妖刀（ようとう）・魔剣（まけん）ペアは傭兵（ようへい）なのだから、停戦後に戦う義理もないだろう。

だがまあ、その辺の難しい話は大人のカイザーやイヴィリタに任せる。

頭も悪くて戦うしか取り柄の無い俺は、ここいらで休憩をいただきたいところだよ。

（兵士の仕事は終わって、後は政治家たちの時間だ）

と、俺はWTCビルのてっぺん・27階の角に開かれたテラスに出る。

テラスはとても眺（なが）めが良く……緯度が高いため、まだ4時過ぎなのに早くも暮れ始めたオラン

ダの空と大地を丸々見渡せた。なんたってこの国には、視界を遮る山が無いからな。
そうして、一息ついていると――
「おい遠山」
これも戦う事しか取り柄のなさそうなカツェが、エドガーを肩に乗せてやってきた。
「……いいのか、停戦交渉。フケて」
「あたしはああいう難しい話はニガテだからな。余計な口を挟んで不利にならないようにって、イヴィリタ様から席を外すよう言われてきたとこさ。銃殺刑にでも何でもしやがれって覚悟してたけど、助命してもらえるみたいだしな」
と言いつつ、カツェは少し恥ずかしそうな表情で……
「その代わり、魔女連隊は条件付きで軍事拠点を幾つか師団に譲渡するらしい」
仲間に済まなそうに、そう続けた。
あのイヴィリタが、譲ってくれたのか。カツェのために。
血も涙も無いナチの幹部も、やっぱり人の子なんだな。
思い起こせばカツェはシャモニーの親独的ホテルでもエコールの兵器庫でも、みんなに好かれて可愛がられてる感じだった。
ある意味、カツェは自分の人望に命を救われた形になるワケか。
そこはストレートに羨ましい話だよ。俺、人望無いし。
その時、あまり雪深い国ではないオランダに……
ちらほらと、雪が降ってきた。
「――Oh the weather outside is frightful――But the fire is so delightful♪」
それを見上げたカツェが、ボーン・モンローの Let It Snow! Let It Snow! Let It Snow!を歌い始める。ナチ党員からしてみると敵性言語のハズの、英語で。
つまりこの歌が、降伏の証ってことか。ハッキリ『負けたぜ』と言う代わりの。
どこか陽気で愛らしくもあった、俺の好敵手――カツェらしい、小粋な敗北宣言だな。
「It doesn't show signs of stopping――♪」
「And I bought some corn for popping――♪」
映画『ダイ・ハード』のエンディングで流れていたから、俺も『猟経』で暗記していたその歌をカツェと共に歌う。今はもう、お互い、笑顔で。
カツェ。思えばお前とは、いろんな事があったな。香港のタンカー、ツェッペリンNT号からの転落、遭難したモンブラン、助け合って辿り着いたシャモニー、エコール戦車戦、そして、V－2。
雪の日に別れを惜しむ歌詞の、この歌は――
戦うしか能の無い俺たちが停戦を迎えようとしている、この時にお似合いだよ。
「「Let it snow, Let it snow, Let it snow――♪」」

最後はオクターブ違いでハモって、歌を終えると……
笑って俺を見上げるととびっきり可愛いカツェは、
「で、これから遠山はどうするんだよ」
「そろそろ日本に帰るつもりだ。学校の授業もあるしな」
「そっか……」
「お前こそどうするんだよ」
俺も参考までに代表戦上の戦後の身の振り方を聞いておこうとすると、カツェは……
「水は流れゆくものだぜ、遠山」
流れに身を任せて、これから考える。そんな感じに答えてきた。
まあ、そこも俺と同じって事だな。
「ああ、それと。これも交渉で返す事になったから、やるよ」
と……
カツェは、実は小物入れにもなっていたらしい眼帯から――
――アリアの、殻金。
それを出して、渡してきた。
殻金とは、イ・ウーでシャーロックがアリアに撃ち込んだ『緋弾』の殻。
人格を緋緋色金に乗っ取られないようにするための、超能力的なカバーのようなものだ。
元は7枚あったのを何枚も眷属に奪われて、今は4枚しか無かったんだが……これで、5枚目を取り戻せたんだな。パトラからも取り返せるだろうから、実質あと1枚だ。
ていうか、カツェの、なんというズサンな管理……！
モンブランで落っことしてたらと思うと、ゾッとするよ。
「事と次第によっちゃ、いつか組んで使ってやるぜ。日本は旧同盟国だしな！」
まだそんな事を言いつつ、眼帯を掛け直したカツェは……まだ俺を使い魔にする計画をあきらめていない目つきだ。とはいえ、ここで一刀両断にお断りするのも無粋だな。

今は黙って、苦笑いでこのアムステルダムの小雪に降られ、風に吹かれていよう。

数日後の昼過ぎ、アムステルダム・スキポール空港。

渡欧してきた日にパリの空港で見たのと同じ、セザンヌの『カード遊びをする人々』を使ったPhilipsの看板前で……

俺はベンチに掛けて、オランダ航空８６１便・成田行きを待つ。

ここはヨーロッパ最大級のハブ空港なのだが、俺は今回迷うこともなく出発ゲートまで辿り着けている。羽田、成田、香港、パリと経験を積んで、空港ってものにも慣れてきたからな。もう、１人でも出入国できるかもしれない。

かもしれない、というのは……今回、帰国が１人でではないからだ。

ジャンヌやワトソンは、停戦交渉のためにアムステルダムに残ったんだが――

「ご主人様、日清のカップヌードルをどうぞ。日本のカップ麺はオランダでも軽食としてたいへん評判が良いものなのですよ」

などと俺にカップ麺をプラスチックのフォークつきで提供してくれるメイドさん、リサ。

リサは今、セーラーメイド服姿で、ニコニコしながら俺の隣に座っているんだが……

これ、ついてきちゃうらしい。日本に。

なんだかよく分からんが、停戦の条件がどうのこうので押しつけられた。カイザー曰く、リサみたいな便利キャラは戦利品みたいなノリでもらえる事もあるのが戦役交渉の習わしなんだそうだ。で、リサ本人も俺の元に来る事を熱望したと。

そこまではしょうがないにせよ、来られる側の俺の意志は丸っきり無視かいな、師団の皆さん。俺、けっこう勝利に貢献したと思うんですけど？

でも……まあ、来るかもなとは思ってたけどさ。リサ。追い払う謂れもないし。

ショッピング街みたいな空港内をあれこれ案内してくれたのも勉強になったし、生活が荒れがちな俺のサポート役としてはピッタリなんだが……

……いるんだよな。もう１人。こういうタイプ。日本に。

言うまでもない、俺の幼なじみ・星伽白雪さんだ。

体どこにスイッチがあるのか未だに分からんのだが、白雪は時々、あの閻よりも怖い鬼神のようなバーサーカーになって日本刀をブンブン振り回しちゃうお茶目な大和撫子。

その際に被害を受けるのは俺の周囲にいた女子（と、巻き添えで俺）なのがお約束なのだが、経験上、こういうリサみたいな同タイプに対してはキレ方が国難レベルの大噴火になる事が白雪火山・遠山観測所の綿密なデータ検証により知られている。

うん。

死んだな。リサ。と、俺。

詰んでる。

だが俺は不可能を可能にする男。詰みがなんだ。将棋にだって、詰んだら詰んだで盤をひっくり返して無かった事にする手だってあるんだ。俺、かなめ相手にそれやったし。

白雪対策は、後で考えよう。遠山憲章2条――『難しいことは後回し』、だ。

いざ第三次俺の部屋大戦になったらなったで、リサもジェヴォーダン化して自分でなんとかできるかもだし。はい最後は他人任せ。これも遠山憲章3条に明記しとこー。

「ご主人様、そろそろボーディング・タイムですよ。搭乗いたしましょう」

カップ麺の汁をすすった俺に、リサが口回りを拭くハンカチを渡してきてくれて……

俺の欧州遠征も、これにて一件落着だ。

カードで対戦する2人の人物を描いた、セザンヌの『カード遊びをする人々』を背後に立ち上がった――師団だった俺と、眷属だったリサ――

ワトソンにはカードゲームに喩えられた極東戦役だが、87年前・大正時代にも、師団と眷属は似たような『戦役』を繰り広げたらしい。

（ってことは、86年後にもまた同じような事をやるのかな？）

俺はそんな苦笑いをオランダへの置き土産に、青空色をしたＫＬＭ機に乗り込んでいく。

さらば、戦乱のヨーロッパ。

また来るような予感もするが、その時はどうか、もうちょっとお手柔らかに頼みますよ。

2弾　武偵戦友会

眷属からの賠償の、つとして、帰国便のチケットはタダでもらえたんだが……アリアがロンドン行きで乗ってたような片道２００万円もする超エグゼクティブ・クラスじゃなく、狭いエコノミー席の券だった。

とはいえヒステリアモードの後遺症もあり、帰りの飛行機ではグッスリ眠れたよ。

寝しなの時には、２人掛けの席の隣からリサが、

「……とおい地平線が消えて、深々とした夜の闇にこころを休める時……遥か雲海の上を、音もなく流れ去る気流は……たゆみない、宇宙の営みを告げています……」

子供に絵本を読むような感じで、どこかで暗記していたらしい綺麗な日本語の散文詩を語ってくれたしな。リラックスできるよう、ぽん、ぽん、と心臓の鼓動のようなリズムでそっと胸を撫でてくれたし。去年４月のアリア出現以降、こんなにゆったりした気持ちで眠れたのは初めてだったね。

偏西風のおかげで行きよりも早く――とはいえ11時間かけて――

太陽を迎えるような方向に時差線をどんどん跨いで飛んだＫＬ８６１便は、おやつ時にオランダを発ったのが、翌日の朝、成田に着いた。もうこの辺の時差換算は普段の平凡な俺の頭にはよく分からん。とりあえず時計だけ日本時間に直しておこう。

久しぶりに見た日本の光景に安堵しつつ、成田から京成スカイライナーで都心に入っていくと……

リサは、キラキラ……キラキラ……！

車窓に見えるゴミゴミした東京に、まんま丸に見開いた翠玉色の瞳を輝かせて見入ってる。セーラーメイド服の上からでも分かる大きな胸の前で、感動に手を合わせながら。

生まれ持った非社交性および女子とは会話が進まない負のスキルを持ち合わせる俺だが、とにかく電車の中はヒマだったので、

「……あー……そんなに珍しいか？　高層ビルぐらいオランダにもあったろ」

などと話を振ると、

「でもご主人様、こんなにもビルがたくさん……！　それに、地平線まで都市が広がっておりますよ。なんという大きな町でしょうか。すごいです、すごいです、とってもすごいです！」

リサはエメラルドのキラキラお目々をこっちへ向けて『もーい』を連発。上位版もーいまで出したよ。

「お前、イ・ウー時代に来なかったのか？　東京」

「近海まで来た事はありますが、リサはお留守番をしてましたもので。上陸はしていないので」

へー。

まあ確かに、東京は世界最大の都市だしな。都市圏のメジャーな定義上。
俺は何とも思わんが、外国人にはビックリ要素なのかもしれん。これも。
その後、それぞれのスーツケースをガラガラ引きながら日暮里で電車を乗り換えようとしたら……
「あー、ラッシュの時間帯だったか。時差ボケでミスったぜ」
オフピーク通勤の影響もあって、ＪＲ山手線のホームは通勤客でごった返していた。
「……！　……!?　……！」
それを見たリサは目を白黒させて、きゅ。
俺の袖を色白な手で引っぱって、慌て始めた。
「ご主人様、急ぎましょう！　皆さん慌てて電車に乗り込んでおりますよ。あの慌てよう、あれを逃すと明日まで電車が来ないのではないでしょうかっ」
「いや、この時間帯なら2分もすりゃ次のが来るだろ」
「……？　？　？」
押し合いへし合いして、テトリスのように隙間無く乗り込んでいくサラリーマンたちの姿に——リサは混乱してる。
で、時刻表よりチョイ遅れの3分後に次の山手線が来たので……
混んでるのでスーツケースを持っている俺とリサは一言二言周囲に謝りつつ、乗る。
『——本日は車輌点検の為、列車が遅れましたこと、お詫び致します』
という車内アナウンスを聞いたリサが「？　？　？」という表情になり……
「お、遅れておりませんよね？　驚くほどすぐに次の電車が来たのですが……」
「いや、遅れたぞ？　1分」
「い、1分……！」
そんな話をしつつ降りた新橋駅で、あのいいかげんな国鉄が走ってるオランダから来たリサはショックを隠しきれない様子だ。
ゆりかもめに乗り換える途中で、ノドの渇いた俺がベルマートに立ち寄ると……
「いらっしゃいませー」
ぺこり、と一礼してきたバイトのお姉さんに、
「お初にお目に掛かります。私はリサ・アヴェ・デュ・アンクと申します」
リサはロングスカートの裾をちょこんとつまんで微笑み返し、頭を垂れて挨拶した。
お姉さんがそれに苦笑いして、もう1人いたバイトのオバチャンがクスクス笑ってる。
「お、おい。コンビニの店員さんに挨拶は返さなくていいんだよ、普通」
「いえ、でも、あんなに、ご丁寧に頭を下げてくださったので……っ」
目で分かる外国人顔でキョドるリサに、
「いーんですよ、お客さま。日本じゃ『お客さまは神様です』って言うんだから」
笑いつつ、オバチャンが教えてやってくれている。

それを聞いたリサは、両手を大きな胸の前で祈るように合わせ……

「モーイ……！　なんという……なんという、サービス精神に溢れた国なのでしょう！　時間にも正確で、礼儀正しく、どこにもゴミが落ちていないキレイ好きな国……！」

感動のあまり、また目を眩しいほどにキラキラさせてる。

どうやらヨーロッパから来た生粋のメイドさんからしてみると、おもてなし、時間厳守、礼節、清潔といった日本文化は……それはそれは素晴らしいものに感じられるらしい。

パッチリ二重の目にウルウルと涙を浮かべるほど喜んじゃってるリサからは、

「――ご主人様。リサは自分が生きるべき国、骨を埋めるべき国を悟りました。それは、ここ。ご主人様の祖国・日本です！」

出、出たっ、日本永住宣言……！　新橋のベルマートでっ。

なんでかパチパチ拍手してくれてるコンビニの店員さんたちに赤面しつつ、俺はリサの背中を押してコンビニから脱出する。

うちの不出来なメイドがプチ騒ぎを起こしてしまったので、お詫びの意味も込めて――いろはすをSuicaで素早く購入したんだが、

「ご、ご主人様、ミネラルウォーターのお代をお支払いしなければ。リサが……」

と、金色狼の刺繍が入ったサイフを出してる。

「も、もう払ったっ。電子マネー決済ぐらい、見た目から何となくで分かってくれよっ」

「……モーイ……！　ここは科学の国でもあったのですね……！」

あとリサ、そのサイフ。アムステルダムで見た時には気づかなかったが、お前の正体のヒントになっちゃってるじゃねーか。不用心だなおい。

その後、ゆりかもめの中で「ご主人様、忍者はどこにいるのですか？」などと博識だが偏った日本知識しか持っていないことが判明してきたリサに「そんな時代錯誤的なものはもういない。と言いたいところだが俺の後輩がそれにあたる。こんど会わせてやるよ」とゲンナリ顔で返しているうちに……

台場、そして元々は羽田空港まで延伸する予定だった東京臨海モノレールで浮島北駅、そこから徒歩で……着いてしまった。東京武偵高校・第3男子寮へ。

（……帰ってくる場所があるってのは、いいことなんだな。旅に出ないと、分からない事だが……）

などとハードボイルド風味にキメて現実逃避しようとしたが、やっぱり逃避失敗！

だって隣でリサがニコニコしてるんだもんっ！

考えたくなかったからずっと聞かないでいたけど、リサは『メイドの住処は、もちろんご主人様のお家。言うまでもありません』というムードでついてきちゃってる。

どうしよう。

男子寮の俺の部屋には、1匹1匹が百獣の王――合わせて四百獣の王ことバスカービル女子どもが群れをなしてたむろしているハズなのだ。

かなめの時みたいにまたランバージャックとか、イヤだぞ。

この窮地について誰とも相談できないかわいそうな俺は、エレベーターをリサと上がりながら……やむなく、自分の中のリトルキンジ（脳内で作り出した架空の相談役）と作戦会議。

ドアを開けた際、ピンク・黒・黄色・水色のどれかの色が見えた瞬間に室内へと無回転飛び込み。銃弾の嵐をその予想外の挙動で避け、素早く洗面所で手洗いうがいを済ませ、防弾物置へと高速飛び出し。自分の命をパーフェクトセーブ――という手順を立てた。

入る……と……

「奇跡、だ……」

……額に脂汗をダラダラかきながら、ドアノブに、手をかけて……

つい声が出ちゃったよ。

いくぞ。銃弾サッカー日本代表、遠山キンジ選手。勝負のキックオフだ！

と勢いづけた割にはソーッと鍵を開け、こっそり……と……リサを背後にかばいながら室内にいない。誰も。

怖かったのですぐ確認した白雪の部屋……という事に白雪が勝手にしている小部屋には、

『キンちゃん様　欧州遠征お疲れ様です。星伽に呼ばれたので、里帰りしています。何かあったらすぐ帰るからね。白雪』

という、毛筆でしたためた書き置きがあった。

俺、持ってる。

本田圭佑よろしくキメた顔でリサに振り返る俺だが、目に浮かんだ安堵の涙を隠すサングラスが欲しいね。

しかし……この書き置き、ちょっと不穏だな。

幼なじみだけあって、俺は白雪の書き置きは何度も見たことがあるんだが――普段なら、いつ帰るとか、冷蔵庫に葛餅がありますとか、もう少し情報が書いてあるものなんだが。

人の実家を悪く言うつもりはないが、星伽というキーワードも少々剣呑だ。

（白雪は、何か問題が起きても……割と、1人で抱え込むところがあるからな……）

だがしかし。

とりあえず第二次か第四次かの俺の部屋大戦が勃発しなかったのは事実。

今日は平和の素晴らしさを満喫しようとリビングへ向かうと、

「あの、ご主人様。つかぬ事をお聞きしますが……ご家族は……？」

挨拶でもするつもりだったのか、ついてきたリサが聞いてきた。

「お前も知ってるかもしれないが、カナが――俺の姉、というか、兄だ。あと言うなれば腹違いのバカ弟と、かなりお兄ちゃんっ子の妹がいる。両親はもういない。でも祖父母は健在だよ」

一応そう説明してやると、リサはサラサラの金髪を揺らして頭を下げる。
「すっ、すみません。複雑で、お答えいただき辛い事をお伺いしてしまって……」
「いいさ」
どっかりとソファーに腰を下ろし、俺が旅の疲れを癒しにかかると――
「……？」
リサが、スンスン。スンスンスン。
何やらワンコっぽく、空間を嗅ぐような仕草をしたぞ。
それで、上を見てるんだが……
なので俺も天井を見ると、ミシッ、がたんっ！
天井裏へのミニ扉が開いて、どちゃどちゃ！　落ちてきた！　俺の上にアリアと、その上に理子と、その上に女の子座りでレキがっ！
よ、予想外の所から出てきたぞっ、銃弾サッカーの敵チームが……！
キンジ国の平和、短かっ……！
「いやー、キーくんをビックリさせようと思って隠れてたんだけどね！　逆に理子たちがビックリだよ！　低出現率キャラのリサも好感度１００％にして帰ってくるなんて、やるじゃーんこのスケベ！」
などと俺の腹を肘で小突いてくる理子を、
「理子様！　お久しぶりでございます！」
イ・ウーの同窓生とあって、リサは親しげに引き起こしてる。
「うーん、愛人枠まで埋めてきたかー、理子ちょっと焦っちゃうなー」
なんだか分からん事を言いつつも、リサの特技があれこれ便利なことを知ってるらしい理子は
リサ歓迎ムードだ。
ソファーに進駐してきたアリアとレキに俺が「や、やあ、ただいま……」と引きつった笑顔を向ける中……
「神崎・Ｈ・アリア様。レキ様。お初にお目に掛かります。リサ・アヴェ・デュ・アンクと申します」
リサは、ちょこん。自分のスカートをつまんで小さく持ち上げ、優雅に一礼してる。
その仕草が礼儀正しく、堂に入っているので――
「ふーん。キンジ、あんたこれ、メイド雇ったの？」
リサを親指で指しつつ、アリアは彼女がメイドさんだという事をそのおっきなツリ目で見抜いたご様子。
「……そういう事になるかな」
俺が床にあぐらをかきつつ答えると、
「天井裏で理子に聞いたけど、元イ・ウー、元眷属なんですって？　でも、敵兵を味方に変える

のはキンジの特技みたいなものだからね。さもありなんだわ」
長いツインテールをしゃっしゃっと手の甲で払って整えたアリアは、きゅ。
レッグホルスターの二丁拳銃（ダブルガバ）をガンチラさせながら、足を組んでリサを見上げてる。
よかった。リサが便利そうだと直観したのか、好意的ムードだぞ。アリア様も。
「ちょうどこの家も理子のせいで散らかってたとこだし。なんとかしなさい」
「はい！　喜んで！」
アリアに仕事を与えられたリサは、嬉（うれ）しそうに手を合わせて元気よくお返事。
いやー、アリアは相変わらず人を顎（あご）で使うのに慣れてるね。呼吸するように人を使う。
人を使うのについ遠慮してしまう俺としては、そこは見習いたいところだ。
リサもリサで瞬時に俺とアリアの力関係を見抜き、アリアに服従する姿勢を見せてるし。アリアの機嫌（きげん）を取ることは俺の安全保障にも繋（つな）がると判断したのだろう。超能力レベルで空気が読める女だな。
レキは相変わらず俺（おれ）たちを無表情に見てるだけだったが、リサが悪人ではない事はすぐ分かったらしく、
「……キンジさん、おかえりなさい」
そんな事を言い残して、トコトコ。
と、自分の部屋（という事にレキが勝手にしている小部屋）へと消えていった。
レキは一見安全なように見えて行動が読めないフシギ女子でもあるので、ちょっと不安だった俺がその後を追うと……
レキ部屋にはいつの間にか、画架（イーゼル）に掛けられた大きなキャンバスが運び込まれていた。
「……美術の課題か？」
「はい」
制服が汚れないようにエプロンをしたレキは、選択科目で美術を取っている。
スイス人の画家・ギーガーみたいにリアルなタッチで鳥や植物を描いた、チョイ怖な、レキの絵は……
「お前……ホントに上手（うま）いな、絵」
上手いってレベルじゃない。すごいぞ。
濁色グリーンのモノトーンで陰影の強い、凄（すご）みのあるアクリル画だ。Sランク狙撃手の高い集中力が織りなす精緻なタッチは、俺みたいな素人にはどう描いたのかすら分からんレベルだ。
「こいつは超高校生級だぞ。普通に金が取れる、どころか高値が付くハズだ。お前、才能あるよ。なんなら俺がディーラーやってやる。売ろう」
画商の真似事をやって上前をはねるつもりで、俺がベタ褒めすると……
スプレーガンを持ってキャンバスの前にいたレキが、
「……まだ描きかけですから」

いつもの抑揚のない声でそう言いつつも――
チラ、と俺の方を見て、あ。ちょっと赤くなったぞ。
そして視線をキャンバスに戻しながらも、「早くキンジさんいなくならないかな」的な空気を流し始めてる。無表情のまま。
何コイツ。恥ずかしいのか？　レキのくせに。
よーし。そんなら逆に、描いてるところを見まくってやれ。ジロジロ。
「……」
フフフ。どうだねレキ君。恥ずかしいかね。だが俺的には嬉しいぞ。レキのそういう、人間っぽい感情の成長を見守れるのは。
俺に香港行きの飛行機以来の視線責めをくらったレキは、
「……」
……へにゃん。
すっかり赤くなった顔を下げて、それでもシュッ、シュッ、と絵を描き始めた。
そんなミントちゃんをちょっとカワイイなぁと思いながら眺めていると、
「モーイ！　素晴らしいです！　レキ様は天才です。天が二物を与えたのですね」
レキ部屋に来たリサも、俺のレキいじめの援軍をしてくれてるぞ。
「スーパーモーイだよな。おいリサ、お前ならこれ幾らで売ってこれる？」
「絵画は時価ではございますが、投機目的のプロ相手になら6万ユーロ――８００万円は出させてみせます」
商才のあるリサはそんな事を言ってから……「まあ」と、部屋の隅でほねっこを噛ってゴロゴロしていた、銀狼ハイマキを発見した。
「なんて可愛らしいオオカミさん。レキ様が飼っているのですか？」
リサに微笑みかけられたハイマキは「！」と顔を上げてからの、べたぁー。ごろり。
その場に伏せ、挙げ句、腹を上にして服従のポーズを取った。どうやらリサの正体――百獣の王の気配を、動物的本能で悟ったらしいな。
「そうです。名は、ハイマキと言います。リサさん、ハイマキを散歩させてきて下さい」
筆を取りながらのレキは、大型のコーカサスハクギンオオカミを可愛らしい呼ばわりのリサに驚く事もなくそんな依頼をしてる。これ以上俺とリサにイジられるのもイヤだったみたいだな。

「はい！　喜んで！　ハイマキさん、こちらへどうぞ。お外を一回りしてきましょう」
呼ばれたハイマキは、とたたたた。ダッシュでリサの所へ来てる。まさに王に呼ばれた兵士みたいな感じだ。初めて見たよ、ブラドとレキ以外の人間にハイマキが手懐けられた光景。
（いやはや、リサ……）
コイツ、凄いよな。
リアル猛獣ハイマキも含め、バスカービルの猛獣どもがとぐろを巻いていた俺の部屋に……早くも溶け込んでるぞ。かなめのようなバトルを経ずに、友好的に。
平和主義のキンジ国としては同盟関係にあるべき、関係調整国だ。リサ国。
ハイマキの散歩はリサに任せて、スーツケースから荷物を室内にしまった後……
俺は今度こそ疲れを癒そうと、二段ベッドに寝っ転がってマンガの読書タイムに入る。雑誌はバックナンバーも含めて理子がベッド下に貯め込んでるんだが、海外で読めてなかった遅れを取り戻さないとだからな。
で、ヤングガンガンなんかを読んでいると……
「――何この写真。すごい美人ね」
「うわぁー誰コレ！　女優さんー？」
「……キレイですね」
リサの帰宅後しばらくして、廊下の辺りが騒がしくなってきたぞ。小部屋から出てきたらしいレキまで反応してる。
何だ？　と起きてリビングから廊下を見ると……何やら額縁に入ったポスターをリサが壁に飾ったらしい。
「彼女はオランダで人気を博した、絶世の美女なのです。リサもファンなのですよ」
リサはニコニコと、アリアたちにその大判の写真を示している。
「……おい、俺の家に女の写真なんか貼るな」
美人の写真なんか、俺にとっちゃ地獄絵図だ。
なので、外させようと思って……近付いていく……と……
……っ……！
「ちょ、おまっ……！　えっ、こッ、なんで、リサお前、こんな写真、どこから……！」
俺は昭和のマンガなら目玉が飛び出すぐらい、ビックリ仰天する。
こ、これ！　クロメーテルさんの写真じゃないですか！
「ブータンジェの男性たちが、フェイスブックでグループを作ってアップロードしておりましたもので」
そのクロメーテルというか俺の写真は、ブータンジェでカフェにいた姿を盗撮されたと思われるもの。肖像権侵害だぞオランダ人ーっ！

「キンジあんた、なんでそんなに慌ててるのよ？」
うわ、勘がいい。アリアのレーダーが俺を捕捉したぞ。
「会った事あるの？　まさかこれもあんたの女じゃないでしょうね」
「ないないない！　それは絶対、断じて、物理的にないからっ！」
俺は立てた手が増えて見えるぐらいブンブン振って、大否定。
「……Hum？」
アリアは腕組みして、小首を傾げる。ちなみにこの『はむ？』という間投詞はアリアが疑問に答えが出ない時の発声である。
さすがのホームズ4世も、クロメーテル＝キンジだという事は分からなかったらしい。
「か、片付けろリサっ。俺は女の写真なんか家に飾ったりしないッ」
叱られた俺のメイドさんは、それでも、ニコニコ。
「ご主人様、その表現は正しいでしょうか？」
果たしてこれは女性の写真でしょうか？　的な事を言ってきた。
「美しい人物や風景の写真を家に飾るのは、ヨーロッパでは家の中に幸福感を与える良い習わしと言われております。美しい写真のある家では、住人同上のイザコザが減るという統計学的なデータもあるのですよ」

なんか、これ……リサ、怒ってるのかな？
俺の家にアリアたちがウジャウジャいたのが、何か気に障ったんだろうか。さりげなく弱味を握ってきた感もあるし。主人に対してなんちゅう振る舞いだこのメイド。

なんとか、クロメーテルの写真を片付けさせた後……
リサは家の中をピカピカに掃除して、「日本食は得意ではないのですが」と言いつつも冷蔵庫にあった物のあり合わせで普通の晩飯を作ってくれた。ぶり大根、チーズちくわ、しめじ御飯、高野豆腐と絹さやの卵とじ、シジミの味噌汁。で、これが、
「さすがメイドね。美味しいわ」
「リサ、おかわりちょーだい！」
「……」
アリア・理子・そしてレキにも好評のようだ。
帰国したばかりの俺も、いかにも日本の食事って感じで嬉しいよ。このメニュー。
「別に和食に限らなくてもいいぞ。日本人はいろいろ食べるんだ。味付けとかは日本風にアレンジするけどな……あっ理子、それは俺のチーちくわを奪い返すなどしていると――
理子の口を両手でこじ開け、勝手に食われたちくわを取り返す。
「でもリサ、あんた、ここがどこかは分かってるの？　あんたも武偵高に通うの？」
そもそも論で、ちっこい手でお茶碗を持ってゴハンを食べてたアリアが尋ねてる。
「はい。リサは眷属からの賠償として、日本で今後ご主人様のお役に立てるようにと――渡航費に加え、学費もいただいておりますので。編入試験も、インターネットで済ませております」
初耳だぞオイ。
「ご主人様、学校でもリサがたっぷりご奉仕いたしますからね。ご安心下さい、きちんとメイド業と学業を両立してご覧に入れますので」
どうやら……
『ジェヴォーダンの獣』の姿を見た眷属は、戦後もこれがヨーロッパをウロウロしてたらたまったもんじゃないと思ったらしい。
で、日本に居場所を与えて俺に押しつけたワケか。
停戦交渉は引き続きヨーロッパ残留組が進めているようなんだが……任せっきりにするんじゃなかったぜ。
「キーくんがいなかった間の探偵科の課題はこのフラッシュメモリに入れてあるからね！　ちなみに理子のノートは有料コンテンツなんで、課金したら見せてあげる♪」
そうだ……学校の授業も、取り戻さないとな。マンガだけじゃなく。
「払うから、後で見せろ。金額はリサと相談して決めろ」
俺がそんな事を言ったので、アリアは半笑いになる。

「キンジ、帰ってくるなり向学心あるわね」
「わざとスゲェ驚いたような顔をするな。失礼だぞ。俺はちゃんと勉強して、まっとうな大人になるつもりなんだ。いずれ普通に、一般的な、警備員とかバウンサーとかになってみせるからな」
「まーだそれ言ってんのキーくん？　『キンチは存在自体が一般的じゃない』ってココも言ってたよ？　S・D・Aランクだってアジア71位に――」
「ア～～～～ア～～～～」
アメリカのハタ迷惑な格付け会社が作ってる人間やめましたランキングの話が出た瞬間、俺は耳を塞いで自ら声を出し、情報をシャットアウト。去年89位だったのがいま何位なのかは聞かずに済んだ。読唇もしちゃわないよう、目も閉じ……数秒後……
「……」
薄目を開けて理子が黙ってるのを確認し……耳の穴から小指を外すと、
「つまりあんたより人間じゃない武偵は70人しかアジアにいないのよ」
アリアが余計な情報を――71位かよ！　聞いちゃったよ！　てか、どうやったら下がるんだよそれっ。非公式なデータらしいからクレームの入れようも無いってのに……！
「キーくんの一般人は、『逸般人』だからねぇ。くふふっ」
理子は指で空中に漢字を書きつつ、サディスティックに笑ってる。もう泣くよ？　俺。
……で……
アリアとレキは、食後のコーヒーを飲んだら連れ立って帰った。
女子寮のＶＩＰルームことアリアの部屋で停戦交渉の話を師団メンバーと電話したりとか、あと、何か仕事があるらしい。
あの2人も仲良しだよな。2学期のチーム結成の前にはケンカもしてたが、前から親友だったもんな。
（あのチーム・バスカービルから、まず俺が外れるとは思わなかったけどな……）
そんな事を想いつつ、理子から受け取った探偵科の課題ファイルをパソコンで確認していると……
その理子がニンテンドーＤＳを手に、ごろん。
俺がノートＰＣを運んできたテーブルの真っ正面のソファーで、フリフリのスカートが危険な角度から見える具合に寝っ転がった。ウザッ。
「……ところで理子。最近お前、何やってるんだ？」
俺は理子のサクランボみたいな飾りのついたソックスに包まれたキュートな足から目を逸らしつつ、ちょっと聞いてみる。
理子はヒルダを攻略した後、ちょっと自分の将来に悩んでたからな。
戦役停戦後、ヒマになったら迷走して悪事に走る懸念も無くはない。元々ワルだし。

「理子、いまちょっと派手に動けないんだよね。藍幇にキーくんがつれなくするから、今アイツらこんどは理子に狙いを絞って勧誘してきてさぁ。理子が何かしようとしたら、味方キャラを押し売りされてきちゃいそうなんだよー」

やっぱり……

早くも中国ヤクザ・藍幇なんかとやりとりしてたか。カワイイ顔して、イケナイ子だぜ。

「藍幇、か……お前、元々関係良かったもんな。誰か部下にでももらうのか？」

と、探りを入れると――

「いらなーい。理子のお眼鏡にかなう子じゃなきゃダメですよーだ。キーくん、アリア、レキュ級のチートキャラじゃなきゃ、会ってもあげないもんね。なもんで今は積みゲーや積みアニメを絶賛消化中なのですよ！」

と、理子は理子スマイルでポケモンの画面を見せてくる。

……心配することなかったな。オタクはヒマに強いって言うし。

よく見たら俺のノートPCにも……かぼすソフト？　の『天神爛慢』だの『のーまる☆わーくす』だの、DL販売で買ったらしい15禁ゲームが勝手にインストールされてる。

情報怪盗さんよ、人のパスワードを当たり前のように知ってるのはどうかと思うぜ？

俺がPCのログオンパスワードを『kinjikinji』から『kinjikinjikinji』に変えてると……リサがやってきて、

「ご主人様、理子様、コーヒーのおかわりをお持ちしました」

俺には薄めのアメリカン、理子には生クリーム入りで濃いめのコーヒーと両者の好みに合わせたコーヒーを持ってきた。

「リサ、リサ、『えいっ！』やってよ！」

理子がコーヒーを受け取りながら何やら要求してるので、振り返ると……

「えいっ！」

リサが手をグーにして、ちょっと気合いを入れるような仕草。

すると、ぴょこん！

家についてからリサが頭に増設していたヘッドドレスの後ろに、イヌ耳が飛び出した。スカートのお尻辺りが動いた所を見るに、シッポも出たらしいぞ。

ていうか、『えいっ！』で出せるのかよ！

サイフの刺繍といい、ジェヴォーダンの獣の正体、ヒント多すぎだろっ……！

イスからズリ落ちる俺を尻目に、理子は「きゃはー！　カワイー！」などとリサに抱きついてる。その後も何やら、日本の事をリサにあれこれ吹き込んでるみたいだが……

ああもう、うるせえなぁ。こっちは珍しく勉強してるってのに。ヘッドホンで音楽でも聴きながらやるとするか。

そのうるさい理子が帰ったので時計を見ると、もう夜も10時を回ったところだった。
結局、今ひとつ勉強に集中できなかった俺は……
やむなく、フロに湯を張りにかかる。
その様子を不思議そうに後ろから見ていた、イヌ耳を引っ込めたリサは……
「あの、ご主人様。とても熱いお湯を注いでいらっしゃるご様子ですが……何か、大きなお魚を煮るのでしょうか？」
「なに言ってんだ。これはフロだ。日本人はこれに入るんだよ。それに設定は41度だぞ。適温だ」
俺がカランから出てる湯に手をあてて確かめていると、しゅる、とタイを外しつつバスルームに入ってきたリサもおずおずと湯を触り……
「ほ、本当にこれに入るのですか。日本人は熱さに強い民族なのですね」
左手でブラウスのボタンを外しつつ、そんな事を言ってる。
「慣れだよ、慣れ。ほんと、お前らの『バスタブ』には参ったぜ。あれじゃ湯は張れてもすぐ冷めちまって使い物にならなかったからな」
「通常、タブはお湯を張るものではなく――シャワーの水が床に飛び散らないようにするためのものなのです。欧米では、入浴といえばシャワーの事ですので」

などと、リサは笑顔でヘッドドレスを外し……

「そこはホント、文化の違いだよな……ってお前！　なんで脱いでるんだよ！」

ノリツッコミ気味に、俺がドン引きする。

いつの間にかリサはブラウスを脱いでおり、それを胸の前で抱きしめるようなポーズになっている。胸周辺が隠れているのは不幸中の幸いだが、肩の、下着の肩ヒモ――純白のストラップが見えちゃってるよ！

「ブリムは付けたままの方がよろしかったでしょうか？　し、失礼いたしましたっ」

リサはヒラヒラ布のついたカチューシャみたいなヘッドドレスを付け直し、ズレた謝罪。

「ち・が・う！　俺が先に入るからッ！　お前は、後！」

「？　？　？」

バスルームから追い出されたリサは、キョトーンとしてる。

がらんっ！　と風呂場のドアを閉めて、俺は溜息しつつ脱いだ服を外に出し、ようやく久々の日本式バスタイムを満喫しにかかる。

ただのユニットバスだが、幸せな事だよな。普通のフロに入れるってのは。ヨーロッパじゃ湯に浸かるのも難儀したから、このありがたみが理解できるようになった。

フロに入る事は血管を広げて全身のコリをほぐす、武偵的にも推奨されている行為だ。

さらに体を湯に浸からせれば、浮力により肉体は体重を10％程度にしか感じなくなる。

これにより筋肉や関節には休み時間を与える事ができ、その管理を常にしている脳をもリラックスさせられる。入浴は心身の疲れを共に回復させる、究極の休息法の一つなのだ。

「……ご主人様。お背中をお流しいたします」

日本が誇るこの文化は、世界に広めるべきであろう。

……って！　おいィ!?

リラックスしてたせいで反応が一瞬遅れちまったよ！　リサ！　いる！　曇りガラスのフロの扉の向こうにッ……！

「『後』と命じられたとはいえ、遅くなりまして申しわけありません。新しいセッケンと桃の葉のローションを準備しておりましたので――」

フ、フロの、ドアが、開きつつあるぞ！　しかもボンヤリ見えるその体は、さっき付け直していたヘッドドレス以外、ぜん、ぜん、全裸ッ……フロだから当たり前だけど！

まいと、俺は桜花ダッシュ並の加速でドアに飛びつく。

そして内側からドアを押し返しつつ、

「――『後』ってのは、俺が出た後って意味だよッ！　背中ぐらい自分で洗えるッ！」

「で、ですが理子様が先ほど、日本では浴室で女性がこのようにするものだと……自らの身体

で、ご主人様のお身体を洗って差し上げるものだと……！」
割と力強く入ってこようとするリサは、これ――
さっき俺がヘッドホンをしてたのをいいことに、理子にウソを吹き込まれたんだなッ？
あのバカ、覚えてろよッ……!?　ノートの写しが終わるまではガマンすっけど！
久々の、フロだったのに……
なんとかシャットアウトしたリサの再侵攻の恐怖に怯えて、安らげなかったよ。
ベッドルームに2基ある2段ベッドはリサがベッドメイクしてくれたので、パジャマに着替えた俺は右の下段に潜り込む。他はよくバカービル（バカだらけのバスカービル）が勝手に使ってるんで、女臭くて寝れたもんじゃないからな。
「……」
だが、夜は更けているのに……眠くならない。時差ボケで。
ヨーロッパ→日本と移動すると、夜、寝つけなくなるんだな。
体が慣れちゃった中央ヨーロッパ時間で言えば、まだ夕方なワケだし。
（ジャンヌのアパルトマンでやたら眠くなったのと、逆か……）
だが、明日は登校するんだ。
感覚的には超早起きしなきゃいけない事になるんだから、寝ておかないと。
それに入眠できなかったとしても、人間は何もせず横になっていればその7割ぐらいは体を休めることができるという。ヘタに何かしようとはせず、おとなしくしてよう。
……コンコン。キィ……
「ご主人様。お情けを頂戴しに上がりました」
……おとなしく、して、いたいのに……またかよ……！
あと何なの、その「お情け」って。白雪も救護科棟でその謎用語を使ってたけど。
多分キンジ的NGワードなんだろうって事は分かってるから、調べてませんけどね！
「……」
だがリサよ、その動きは想定済みだ。ここで俺は得意技のタヌキ寝入り。もう寝てると判断すれば、忠誠心の高いメイドさんは起こしたりはしないだろうよ。
この作戦が功を奏し、リサはベッドルームに入ってはきたものの……
俺に毛布を掛け直しただけで、特段、危険な動きはしないでいてくれている。よしよし、寝返り打ってる間に出ていってくれ。
と思ってたら、ジャジャジャーン。俺の携帯から、杉良太郎『すきま風』のメロディー。
「……！」
タヌキ寝入り、中断――飛び起きざるを得ないッ！
というのもこの曲は電話帳の中でも危険人物からの着信があった時に鳴るよう設定してある、警報のようなもの。着信相手を見ると――蘭豹！

スルーしたら後で象殺しや斬馬刀で何をされるか分からん、暴力教師からだッ！

「は、はい！　お待たせいたしました！　遠山です！」

リサが驚くぐらいの大慌てで、俺が携帯に出ると……

『あァ？　おー、遠坂と間違えたわ。メンゴメンゴ』

以上で、通話、終了。

蘭ッ、豹ォ……！　このタイミングで、マチガイ電話なんか掛けてきやがって……！

メンゴじゃねーだろこのゴリラ女！

この遠山キンジ、ここまで誰かを憎んだ事は無いぜッ……！

携帯を怒りで握りつぶしかける、起きてた事がモロバレの俺に、

「ご主人様、やはり寝つけずにおられたのですね。時差による睡眠障害は初日が肝心要。安眠できますよう、まずはリサがマッサージで全身をリラックスさせて差し上げますね」

リサは緊張感がむしろ一気に増すようなプランを提案しながら……

きしっ、と、主人のベッドに手をついてきたぞッ……！

しかもその姿は、ブータンジェでも見た、下着が透けて見えそうな、というかバッチリ透けてる、薄っすい白のネグリジェ。しかも品良く傾けながらベッドに上げてきた太ももには、出たぞ伝家の宝刀・キャットガーター――！

「マ、マッサージとか、いらんから！　2、3、5、7、11……！」

「ご主人様。リサは……ご主人様の祖国に来ることができて、今、とても幸せなのです。とても嬉しくて、とても、ドキドキしているのですね」

と、震えて携帯を落としちゃった俺の手を――

リサは白い指でそっと取り、ふにゅん。

マシュマロのように柔らかく、メープルシロップのように甘い芳香をうっすらさせる、む、む、胸に当てさせたぞっ……しかも左胸の、割と先端部分に！　ギャーッ！

と、楳図かずおのマンガみたいな顔で壁際に後ずさる俺の前で、リサは――

スペースを空けてもらったと誤解したのか、きしっ、と、ベッドにインしてくる。

やっちまったな！　これ、理子がここに攻め込んできた時と同じパターンじゃねーか！　学習しろよ俺！

「……マッサージの後、ゆっくりとお時間をかけてお夜伽をさせていただきますので……そうすれば時差を気にせず、ぐっすりお休みになれる事と思います」

「た、確かにヒステリアモードは終わった後に眠くなるが――そッ、そうじゃなくて！　その、俺は正直その辺、何をどうすりゃいいのか分からないんだよ！　そういう事は！　保体の教科書も、実は昔から読んでないし……！」

「では僭越ながらリサがお教え致しますね。イラスト化されてはいましたが、事の手順は書物で読みましたし……オランダの深夜テレビで、映像も見た事がございますので……」

女の子座りしてしなだれかかってきたリサの、どこもかしこも柔らかい上半身――
そしてニオイに弱い俺にトドメを刺すような、甘い、洋菓子みたいな髪の香りが――
ダメだ。このままじゃ、単に押し相撲をしてても押し切られるッ……！
と思った序二段のキンジこと俺は、
「だ、大体その、ヒステリアモードになったらッ！　あれは、なってる間はむしろ寝付けなくなるんだよッ――それで睡眠不足になったら困るんだから、俺をヒステリアモードにするな！　メイドなら主人の言うことはちゃんと聞け！」
謎理論で土俵際の粘りを見せる。
するとリサは俺の『命令』には一定の理解を示し、
「う、承りました……それでは今宵はご主人様がＨＳＳにならない方向性に、お添い寝の衣装を替えてまいります。少々お待ちくださいませ」
と、一旦退室してからの……
……長袖・長ズボン、小さな金色オオカミのプリント柄のパジャマ姿で再登場。で、
「こ、こちらのパジャマではいかがでしょうか」
パジャマに不審な箇所がない事を示すためか、マイ枕を抱っこしたまま、とととと、とベッドの横でカワイく1回転スピンしてる。
「……ま、まあ、それなら……さっきのよりは、な……」
「安心いたしました。よかったです」
そして当たり前のように俺のベッドに上がってくるんだが……そこはもう妥協しよう。
これは追い払っても、後で潜り込んで来るリスクがある。それなら最初からこの普通のパジャマで入れておいた方がマシだろう。野放しにするよりは、目の届く範囲で監視する。これは危険物管理の原則である。
さらに用心深い俺は、あぐらをかいた俺の正面で女の子座りしてるリサが主人の命令をちゃんと聞くかどうかのテストに入る。
「お手っ」
「はいっ」
俺が手のひらを上に向けて突き出すと、リサは右手の指の第1・第2関節だけを曲げたわんこ手を乗っけてくる。
「伏せっ」
「わんっ」
ふぁさっ、とサラサラの金髪を広げて伏せのポーズも取った。
……よし。大丈夫だろう。
そういや、白雪にも昔こういう事をやった記憶があるな。その前後に鎖鎌で捕縛された恐怖体験もあるんだが、メイドモードのリサは戦闘スキルを持ってない単なる従順系女子。ジャンヌみ

たいに組み討ち技で馬乗りになってきたりする怖れも無いだろう。
「よし、じゃあ寝るぞ」
「はい……ご主人様。お添い寝役、務めさせていただきます……」
なぜそこでウットリと甘い声を出す。
俺はリサに背を向けて横になり、リサも毛布をまず俺にかけてから中に入ってきた。
「……」
「……」
黙って横になる事、数十秒……
俺はパジャマだからとリサをベッドに上げた事が、逆にミスチョイだった事を悟る。
なんかこれ、むしろ……等身大感があって、リアルだ。
メイドさんと同衾という非現実感もイケナイものだったが、この、パジャマ姿の女子が隣に寝ている感覚。
なんというか、等身大の男子と女子としてホントっぽくて……というかホントなんだが……湯上がりのリサから伝わる、生あったかい体温が……ああッ、いかん。別のヒス的な血流が活気づいてきた感があるぞ。
――やっぱり追い出そう！
と思って振り返ったら、リサは……すー、すー……
寝て……た。
そういえばリサ、飛行機では寝てなかったもんな。ある種、徹夜して、その後もずっと起きてたような感じになってたんだろう。リサの体内時計は。
俺の隣にいられて、とっても安心できているようなリサの寝顔に――
俺も安心し、苦笑いしてしまう。このほんわかムードに、悩ましい血流も引いてくれた。
……おやすみ、リサ。そして、こんなトンチンカンな学校で言うのは無粋だが……
ようこそ、日本へ。

九死に一生を得た夜が明け……
やはり猛烈に眠い朝の7時、俺は早起きしたリサがピッチリとアイロンがけしてくれたワイシャツとブレザーを羽織って家を出る。
るんるん顔でリサもついてくるので、仕方なしにチャリの後ろに横向きで座らせてやり――ロングスカートを車輪に引っ掛けないよう注意してから出発した。
この人工浮島はほぼ全域が武偵高の私道。2人乗りでも、特に遠回りをする必要はない。
ていうか……リサ、このセーラーメイド服で通学するのか。ヘッドドレスも付けて。
だが、武偵高は改造制服がOK。むしろロングスカートだと防御力が高いから、先生に誉められるかもだ。バカでアホでマヌケな当校の武偵娘どもは、ただでさえミニな制服のスカートをミ

ニミニに改造する。そうやって防弾面積を減らして自分の戦闘力を誇示する、愚かしい、誠に嘆かわしい慣習があるのだ。リサを起点に、その悪しき流行が廃れる事を切望する。

「お前、専門科はどこにしたんだ？」

「教務科の推奨がありましたので、救護科にしようかと」

やった！　探偵科じゃないぞ。

教務科も珍しく機能したな。リサには元々ナースの素養があったわけだし。

（望月萌と同じ学科か……）

武偵高に転入してきた萌の事を思い出して少々表情を曇らせる俺だが、武偵高イントラネットで確認したところ、萌と鏡高菊代は別クラスの2年B組。そこは不幸中の幸いだ。

一方、不幸中の不幸でリサは俺やアリア・理子と同じA組。

3学期の妙な時期に入ってきた編入生に、クラスの一同が盛り上がる中――

「リサ・アヴェ・デュ・アンクです。この2年A組と救護科で、お世話になります。また、高天原先生からは保健委員を仰せつかっております。残り僅かな3学期ではございますが、どうぞ皆さま、何とぞよろしくお願いいたします」

リサは流暢な日本語で自己紹介し、ちょこん、とスカートをつまんで頭を垂れた。

その仕草には男子も女子も「イヤッホォオオウ！　カッワイイー！」と大盛り上がり。

「はいはーい！　質問！　リサさんの誕生日とスリーサイズは!?」

司会の高天原ゆとり先生を丸っきり無視で、通信科のアホ・鷹根マナが勝手に挙手していきなりのセクハラ質問。対するうちのサービス精神旺盛なメイドちゃんは、

「8月2日、90・58・83です」

ニコニコ笑顔でお答えしてるが……なぜ女子がスリーサイズなんぞを聞くのだ？

でも、良かった。クラスは歓迎ムードだな、リサに対しては。リサもどこかの誰かさんみたいに自己紹介がてらガバメントをブッ放す事もないし。

後は、よい子のリサちゃんがここのバカ女子どもに悪影響を受けない事を祈るのみだぜ。ご主人様としては。

週末――停戦協定をまとめたワトソンやジャンヌが、帰国してきた。

ワトソンは元気なヤツで、帰ってくるなり報告を兼ねてリハビリをやろうと持ちかけてきた。

爆弾フォークの絵文字入り（断ったら爆殺するという意味）のメールで。

この『リハビリ』とは、女子としては男子に接し慣れていない転装生のワトソンと……ヒステリアモードのせいで女子にぶっきらぼうな態度を取ってしまう俺が、普通の女子と男子として接し合えることを目標とした相互ロールプレイ訓練。

要は、小っ恥ずかしいオママゴトなんだが……ワトソンには若干効果が見られて、俺と2人っきりだと女の子っぽい仕草が出来るようになってきている。それがカワイイせいで、俺はむしろ

病状が悪化してるような気がするよ。もうやめたいんだけどこれ。

とはいえ爆弾を食わされても困るので、土曜の朝、モノレールの浮島北駅で落ち合ったワトソンに「今回はどこでリハビリするんだ」と聞いたら「温泉だよ」とほざくから――

「ふざけるなッ！　リハビリの内容を大幅に飛び越してるだろそんなのは！　ワケありのサラリーマンとOLみたいじゃねーか！　インモラルだぞ！　ありえんっ！」

と、真っ赤になってクレームしたところ、

「な、何をそんなに驚いてるんだいトオヤマ。行くのは台場にある温泉テーマパークだよ。ま、まさか、混浴や宿泊を想像したのかっ？　キミの方こそエッチだ！」

俺は短気なワトソンにショートフックの連べ打ちを10発ほど貰い、大江戸温泉物語なるスーパー銭湯的な施設にズルズルと引きずり込まれたのであった。

実に、快適だった。

で、その時代劇風の内装がされた銭湯は――

まず広くて、手足を伸ばして入浴できる。そして男湯なので女が闖入してくる危険性が絶無。うちではリサのせいで安心してフロに入れなかったが、なるほど、銭湯という手があったか。武偵高からも近いし、今後活用しよう。

などと油断していたら、お父さんに連れられて来たらしい幼女がスッパダカで目の前を走り回ってくれちゃったりしてるので……ここも、絶対安全というワケではなさそうだ。さすがにヒスりませんけどね。幼女の裸には玉藻で慣れもあるし。

――その後、江戸の下町みたいなフードコートで……

源氏車柄の浴衣を着た町娘っぽいワトソンと、無地の着流しを着た痩せ浪人っぽい俺が、軽食をつまみながらの会話タイムとなる。

ここでは客が和服を借りて過ごす決まりだから、このように変装して正体を隠すのにも便利だ。

しかし、俺の向かいに座ってるイギリス人のワトソン君ちゃん……

意外なまでに、浴衣が似合うなぁ。髪も焦げ茶色だから、和服、割と自然だし。

だが似合うというなら俺もだ。時代劇のエキストラに出る自信があるね。博徒役とかで。まぁ、こっちは日本人だから当然なんだが。

（そういえば俺は、玉藻とかの長生き系のヤツらには――『遠山侍』なんて呼ばれたりもするんだよな）

そんな事を思いながら鉄火巻きをつまんでいると、

「ブリュッセルでは、キミのせいであのあと大変だったんだぞ」

松セットのお寿司を食べてる金持ちワトソンが、まず文句から入ってくる。

あー、リバティー・メイソンのロッジから逃亡する時『ワトソンは女だ』とぶちまけた件か。

謝っとこう。

「スマン」
「なんとかあれはキミの作り話という事にしたけど、あれからカイザーはボクが女子だという疑惑を持つようになったんだ」
疑惑じゃなくてホントだろ。
「……言い寄られたりしてるのか？」
よし！　これで1人、困った女子を他人に押しつけられるぞ……！
という淡い期待を込めて尋ねたんだが、
「いや、カイザーはむしろボクをちょっと避けるようになった」
「……？」
俺はその不可解な証言から、あのイケメン暗殺者・カイザーの心の動きを――苦手分野ではあるものの、腕組みして考えてみる。
カイザーは、ワトソンが美少年だと思っていた頃は興味津々だったらしい。
だがそれが実はただの美少女かもという疑惑を持ってからは、冷たくなったそうだ。
ここを冷静に、かつ、論理的に考えると……
……えーっと……
ま、まあいいや。趣味は人それぞれだし。
「で、極東戦役の停戦についてなんだけど」
ちょっと震えていた俺に、ワトソンが本題を切り出してくる。
「欧州にキミが出現した事が大きかった。眷属は『殺しても死なないヤツと戦わされても絶対こっちが負けるじゃないか。あれはズルい』と文句を言ってたよ」
「……」
「かつては師団・眷属がイ・ウーの出現で和合していたみたいに、キミの目が黒いうちはまた戦乱に陥る事はないだろう。キミはイ・ウー級の存在だと認識されているようだね。だからこれからは、師団・眷属両方の『再戦したい派』による暗殺に気をつけてね？」
「……」
気をつけてね？　じゃねーっつーの。何が悲しくて一高校生が暗殺に気をつけて日常を過ごさなきゃならんのだ。自分で播いたタネとはいえ、胃が痛くなってきた。
それに俺がイ・ウー1艦と同等の扱いとは、買いかぶりにも程がある。いやまあ、そのイ・ウーも俺が解散させましたけど。あれだってシャーロックの手のひらの上で踊らされてたようなもんじゃねーか。
だが、その辺のことをウジウジ考えてもしょうがない。ので――
「――妖刀。それと魔剣はどうなった」
話の流れで、俺は俺を暗殺しかけた妖刀のセイジとその相方アリスベルの事を尋ねる。
まだヤツらには借りがある。それを返すまで、俺は個人的にあのペアを追ってやろうと思って

いるところだ。武偵は義理堅いんでね。
「行方知れずだよ。眷属も把握していない」
「……了解だ。今後、情報があれば教えてくれ。此細な事でも構わない」
その後……
ワトソンから聞いたところによると、師団・眷属の交渉だけではなく、欧州師団内でも戦後の覇権交渉があったそうで――そこでは、眷属に通じていた一件もあってバチカンの立場がすこぶる弱かったそうだ。つまり、向こうではリバティー・メイソンが一人勝ちか。それはそれでちょっと気がかりだが……
「まぁ、とりあえず停戦になったのは良かったな」
と、小学生並の感想を述べた俺に――ワトソンは、フリフリ。小さく首を横に振る。
「いや、事態は一部複雑になっているよ」
「……複雑？」
「眷属の覇美たちが、眷属と物別れになったらしい。颱風のセーラは、連絡が付かない。どちらも停戦交渉には音沙汰無しだった」
「逃げたのか」
「逃げてくれれば良かったんだけどね。これは3日前のアンラッキーな写真だ」
ワトソンは袂から出した携帯で、画像を見せてくる。
成田空港の入国ロビーで撮影されている、その写真には……
「……ッ……」
絶句してしまう事に、あの闇が――空き地島で去年見た、覇美という鬼の少女を抱っこしている姿があった。周囲にも何人か、闇たちと行動を共にしているらしい者がいる。
みんな洋服や帽子などで変装しているから、どこまでが闇の一味かは分からないが……
「眷属は無条件降伏したわけじゃなく、停戦に条件を付けたんだ。師団も交渉で粘ったが、幾つかは飲まざるを得なかった。その一つが、玉藻が東京に張った『鬼払結界』の解除。玉藻がそれを履行した途端に――これだ」
と、ワトソンは携帯をしまう。
「……終わってないじゃねえか、じゃあ。流れてるぞ――眷属から鬼どもに、情報が」
「うん。だが、これは自然な事だと理解した方がいい。現実の抗争とはマンガやゲームのようにスッキリ終わるものじゃない。その後、物によってはより危険な尾を引くんだ」
警戒を促すように、ワトソンはクリクリした瞳で俺を見据える。
「第二次世界大戦の直後に勃発した、インドネシア独立戦争を知っているかい？　日本が敗戦した後、インドネシアを再植民地化しようと軍事侵攻したオランダやイギリスと――独立を目指すインドネシア側に立って、旧日本軍の残党が戦い続けたんだ。そして実際に独立させてしまった。ナチス残党がパレスチナ・ゲリラになってイスラエルと戦ったのも、大戦後の事だ。両方と

も、ただの民兵やテロリストではなく――鍛え上げられた兵たちの、しかも戦争を生き抜いた、強く、狡猾な者たちが戦うわけだから……それと戦う者たちは、誰もが手を焼いたものだよ」

俺の手前、ちょっとだけ日本寄りな語り口のワトソンだが――

言いたい事は、分かる。

極東戦役の停戦は、あくまで交渉によるもの。火種は十分残ってる。

火消しが不十分なら再燃する怖れがある事も、イ・ウーの一件で経験済みだ。

こいつは……確かに、一定のルールの下でハッキリ対立していた今までの方がまだマシだったかもしれないな。ヤツらは、いつ、どう動くか分からない。敵なのかどうかすらも分からない。

そういうリスクが、大手を振って歩いてるのだ。

事象を伝えた後、ちゃんと俺の意見も聞く質のワトソンが――

「キミはどう見る、覇美たちの動き」

今回もそう聞いてきたので、

「……停戦後も眷属として師団に敵対行動を取るんなら、ルール破りの連中って事だろ。もしカチ合ったら――そこで敵対行動や違法行為に及ぶようなら、戦う。それだけだ」

やや鬼たちを敵視し気味の回答を、返しておいた。

というのも……

覇美は、持ち逃げしたままだからな。

アリアの殻金、その最後の1つを。

もうほとんど取り戻したからアリアは大丈夫なんだろうが、盗まれたものの取り立てはキッチリさせてもらう。武偵憲章8条『任務は、その裏の裏まで完遂すべし』の精神でな。

持ってるヤツが日本に来てるってんなら、むしろ飛んで火に入る夏の虫だ。

（虫と呼ぶには、強すぎる相手だけどな……）

俺は鉄火巻きの残りを食いながら、心の中でそうボヤく。

まだ、俺は――

真っ赤に焼けた鉄みたいに危険な鬼共の蠢く、命を懸けた鉄火場にいるってワケか。

翌日の日曜、俺には……

実に久しぶりに、安全な予定があった。

――『武偵戦友会』。

かつて組んで事件解決に臨んだ事のある武偵が集まる、プチ同窓会みたいなものだ。

俺は1年の頃に何度か組んでいた武藤・不知火・平賀さんと、それをやる事になってたのだ。

だいぶ前からの決め事で。

武偵同士のリレーションシップを継続・強化させるこの習わしは教務科も推奨しており、正式に申請すると予算も下りる。そこは平賀さんがやってくれて、飲み食いするぐらいの金はもらえ

たそうだ。絶対ピンハネしてるけどな。
理子もあの頃は探偵科で情報収集に協力してくれたりしてたので参加権があったのだが、今回はワンフェスとやらがどうのこうので来ないそうだ。
会が開かれる、同じ第3男子寮の301号室・不知火の部屋に向かうと……ガハハハ、という武藤の笑い声が中から聞こえてきたよ。
「いらっしゃい、遠山くん」
遅刻した俺を一言も責めず、笑顔で迎え入れてくれた不知火は――
相変わらずイケメンで、物腰も柔らかい。いい男だよなぁ。
玄関をほぼ占領してる、跳び箱サイズのコンテナは……平賀さんが持ち込んだ物らしい。
「おうキンジ、遅刻だぜ」
「武偵は時間厳守ですのだ！」
清潔感あふれるリビングでテーブルにつくと、相変わらずでかい武藤と、ちっちゃくてイスにクッションを増設して座ってる平賀さんにツッコまれる。
みんなが揃ったのを見て、不知火は男なのに女子力の高い手料理を配ってくれた。
レディーファーストで盛りつけされた平賀さんは、
「不知火くんは自由履修で家庭科を取ってるのだ。こないだ授業を覗いたら女子にキャーキャー言われてたのだ！」
両手にスプーンを持って、女児みたいに前掛けをしながら不知火を囃してる。
不知火は苦笑いで返してるが、やれやれ、料理まで出来るとは……どこまでモテ要素をフル装備してるんだよ。そのくせ浮いた話が全然無い、フシギな男だ。
食後、戦友会は……不知火お手製デザートのキャロットケーキの余りを取り合う武藤&平賀さんと、ソファーでコーヒー片手に語り合う俺&不知火にバラけてまったり進んだ。
日ごろ抱えてる事案ヌキで気兼ねなく交流できる友達は、ほんとに落ち着くよ。
仲間は多い俺だが、友達はこの3人ぐらいしかいないからな。
特に不知火は武藤みたいにセクシー女優の話題を振ってきたりする心配もない、貴重な友人だ。
だが、
「不知火お前、大学はどうする？　武偵大に進むのか？」

「さあね。そんな遠い未来の事は考えてないよ」
「……中学は一般中だったんだよな。どんな生徒だったんだ？」
「さあね。遠い昔の事なんで、忘れちゃったよ」
うーん。相変わらず、プライベートが謎の男だ、不知火。
ちょっと探りを入れても、笑顔ではぐらかされた。
でもな……
俺は一つ、知っている。不知火の笑顔には、2種類あるんだ。
女子はどっちを見てもキャーキャー言うだけだが、いま不知火が見せた笑顔は……昔、コイツが武装銀行強盗を撃った時の笑顔。あれだ。
あれは1年の1学期、俺たちのほぼ初陣と言える事件。3年のリーダーは付けてもらえたが、立てこもり犯のいた都銀支店派出所への強行突入班は——俺と、不知火だった。
ヒステリアモードでもなかった俺は、真剣そのものでカチ込んだものだが——
不知火はまるで友達の家にでも入るかのように平然と現場に入り、フルオート散弾銃で武装した主犯を見つけるなり左右の膝を撃って黙らせた。涼しい笑みを浮かべたまま。
俺は共犯者たちを拳銃で威嚇して縛り上げながら、不知火に内心ゾッとしたのを今でも覚えている。
つまり不知火は武偵高で言うところの『前からさん』。入学前から銃を撃っていた男だ。
不知火にとって、人を撃つのはゴミ箱に紙クズを投げるぐらい何でもない事だったのだろう。
高1の時点で。
だが付属校上がりでもなく、インターン経験もなく、菊代みたいなヤクザの一門というワケでもないとなると……謎が謎を呼ぶ。
ただ、過去の詮索はよそう。今もちょっとやりかけてしまったが、それは武偵に限らずあまりいい事じゃないからな。ジャンヌとケンカしたガルニエ宮での反省もあるし。
それに殺気こそ放たれなかったが、この笑顔を見せられたのは——
俺としても、ほんのちょっと怖かったからな。この底の知れない男が。
「ところで、悪かったな。1年の頃の約束……破っちまって」
俺は話題を変えつつ、前から気に病んでいた事を不知火に話しておく。
1年の頃、強襲科での俺は……
入学試験で教官を倒した件で、その後もヒステリアモードの姿を間々目撃されて、皆に持て囃されつつも少し怖がられていたみたいだった。
その印象を、よく組んでいた不知火が和らげてくれていた。
だから将来的にも、『2年になったらチームを組もう』と約束していたのだが——
「お前とチームを組む件、なんか1年の末からうやむやにしちまってた。これ、お前にはちゃんと謝ってなかったから……ずっと気がかりだったんだ。ごめんな」

「しょうがないよ。遠山君、あの頃お兄さんの事で沈んでたし」
「ああ、理子あたりから聞いてるかもしれないが……生きてたんだ、兄さんは」
「知ってる。良かったよ。でも、僕からすると後の祭りかな。もう神崎さんにパートナー候補を取られちゃったワケだからね」
「俺もアリアが現れる前は、お前とチームを組むと思ってたんだけどな。しかも、今じゃ俺は教務科命令でジャンヌのチームの監査役。フラフラしてて、我ながら恥ずかしいよ」
　済まなさそうに俺が言うと、
「大丈夫、埋め合わせはしてもらうから。遠山君ほどの逸材を逃したら、僕も何のために武偵高にいるのか分からないし」
「？」
「じゃあ、約束破りの貸しで……もう1つの貸しの延期をお願いしたいんだけど。去年の夏休みにサッカーの試合に出た報酬――2学期に僕の依頼を何でも1つ受けてもらうって話だけど、あれ、無期限延期してもいいかな？」
　不知火は軽い調子でそんな事を言ってきたが……
　ってことは、うやむやに出来るかもな。不知火が忘れてさえくれれば。
「いいぞ。無期限延期だ」
「ありがとう」
　微笑んできた不知火だが、これも……良くない方の笑い方だな。
（……地雷踏んだかな？）
　などと傾げた俺の首を、ぐきっ！　と、折るような勢いで――
　武藤がソファーの裏からのし掛かってきた。重っ！　でかっ！　暑苦しっ！
「ンだよ武藤お前……！」
「おいキンジ、白雪さんはどこ行ったんだよ。最近見ないぞ」
「なんで俺に聞くんだよ」
「そうだったのか。病気でもしたのかと思って心配したぜ」
　そう言った武藤は、ケーキの残りを手に何かを思い出したような顔をし――
「そういや白雪さんには戦妹がいるぜ。なんかちょっと雰囲気が似てる1年だった」
「見た事ある。佐々木とかいうヤツだろ。アリアの戦妹と仲がいいんだよな」
「気をつけろよ。その佐々木の親、武装検事だぜ」
「おっと……相変わらず女子情報には詳しいな。それは知らなかった」
「ヘタに手出すなよ」
「出すかよ。俺は『たらし』なんて呼ばれてるらしいが、本当は――」

「そういう意味じゃなくて、強襲科的な意味でだ。アリアの相棒のお前に間宮が嫉妬して、間宮と同盟関係にある佐々木がお前に仕掛けてきたりするかもしれねーだろ」

……ありえる……な。

間宮あかりはかなめと何やら妙な同盟を結んでたし、1年もそろそろ実力を付けてきておかしくない時期だ。武装検事の娘なら、小さい頃から戦闘技術を教わっている可能性もある。うちがそうだったみたいにな。

……頭が痛いぜ。学校の中も外も、敵が自然発生しすぎだろ。

「とーやまくんのお父さんも、武装検事さんだったのだー！」

そこに平賀さんがダイブしてきて、武藤からニンジンケーキをかっ攫いつつそんな事を言ってくる。

「とーやまくんも、なればいいのだ！　武装検事、カッコいいのだ！」

そして将来、武装職の俺にあれこれ売りつけるつもりだね？

「……なれるワケないだろ。俺は普通の武偵になれるかどうかも危ういんだし」

俺は、ケーキをリスみたいに頬袋に入れてモグモグやってる平賀さんにボヤく。

武装検事になるには――

原則として、高い学歴が必要だ。日本だと東大・京大、最低でも早慶の法学部に合格し、海外ならアメリカ法曹協会認定の上位法科大学院かそれに相当する法学教育機関を優秀な成績で卒業していなければならない。

そこで司法試験または国家公務員試験に受かって、検察官――検事になったエリートの中から、主な志願者が募られる。

そこからの実務試験、通称『武検選抜』が難関中の難関。

知力・体力はもちろんのこと、精神力・判断力・統率力、そして何より――戦闘力――総合的な人間力が問われる、悪夢のような試験が一次・二次・三次と続く。

大勢の志願者が一次で全滅する事も希ではない試験（一次の不合格率は96％らしい）で、最終的に合格するのは年に1人いるかいないか。当たり年には数人いるらしいが。

しかも、それで終わりじゃない。

その後、検察庁による残酷なまでの最終審査が執り行われるのだ。

公表されてはいないが思想、信仰、家柄や外見までもが審査対象となる。過去の経歴に至っては小学校時代まで厳しく調べ上げられ、健康診断で虫歯が一本見つかってもダメだ。

それをパスすると――晴れて内閣総理大臣によって任命され、天皇陛下から認証される。

それが武装検事だ。

まあ、それぐらいじゃなきゃ人を殺しても罪に問われない超法規の公務員を国家が公認しないってのも分かるが……実際、武装検事はエスパーより少ない才能と言われている。俺なんかがなれるものでは到底ない。

でも、父さんは――当時まだそこまで厳しくなかったらしいものの、その試験に通った。
それは凄い事だし、今でも尊敬している。
だが……武装検事の27％は、定年まで勤められない。
これは単純な離職率ではなく、ほぼ殉職率なのだ。父さんも、その殉職した1人。
これは武装検事が一般の警察でも民間の武偵でも、ヘタしたら自衛隊でも解決できないような国難の矢面に立たされる役職だからである。
そのくせ、武装検事は儲からない。公務員だからな。その後、武装弁護士にでも鞍替えすればボロ儲けできるらしいが。
「いや、キンジ。お前は確かに運動神経にも波があるし、成績も悪いし、ツラも暗いし、後輩からの評判も悪い。だがな、可能性ってもんは常にお前と共にあるんだぜ！」
俺を貶したいのか励ましたいのか分からんぞ、武藤……悪気は無いんだろうけど。
とはいえ武藤が言う事ももっともだ。武装検事とか大それた目標じゃないが、『普通の武偵』になる可能性をアップさせるためにも、しっかりやらんとな。普通の勉強とかも。
などと決意しつつ、顔を上げると――
追いかけっこで暑くなったらしい武藤はジャケットの前ボタンを開けており、俺はその下の『I Like 演歌』とプリントされた赤いシャツが目に入って吹き出してしまう。
「なんだよそれ、武藤」
「カッコいいだろこれ。最近オレはファッションに気を遣ってるんでな。なんたってもうすぐバレンタイ――」
――はっ、と武藤が口を噤み――
俺も、平賀さんも、凍り付いた。不知火も笑顔のまま、額に冷や汗を浮かべる。
「……ッ……すまん、口が滑った……っ！」
武藤は冷や汗をダラダラかいて、チャン・ウー先生あたりがいないかと天井や窓の外を見回しているが……
ど、どうやら……誰にも聞かれていなかったみたいだな。
「――気をつけろ武藤。『それ』は発言するだけで危険だぞ」
注意する俺の声も、小声だ。
その名称を言うだけで教務科にしょっ引かれる、恐怖の催し……
それは、バレンタインデーの事だ。
これはゴリラウーマン略してゴリウーの蘭豹が昔、好きだった書店員にチョコレートをあげたら――ソイツが恐怖のあまり店を辞め、雲隠れしてしまった事が全ての発端。
蘭豹の八つ当たりは強襲科の生徒たちのみならずバレンタインデーそのものに向けられ、その後、武偵高ではその一切が禁止されるに至ったのだ。高カロリーなチョコレートを食べるのは体調管理によくないとか、そういう取って付けたような理由で。なお、同様にホワイトデーも禁

止されており――違反がバレると、体罰が待っている。
留学生とか転入生はこのルールを知らなかったりするから、迂闊に口に出してしまって蘭豹にボコられるという悲劇が2月には間々起きる。
しばらく静かになってしまった、戦友会だが……
「と、ところで――平賀はあれだろ？　交換留学が決まったんだろ？」
自分で播いたタネを自分で刈り取る形で、武藤が話題を将来の話に戻す。
「で、ですのだ！　来学期からあややはワシントン武偵高の装備科に行くのだ！」
と、平賀さんも明るいニュースで場の空気を修正する。
「工場のみんなが壮行会をやってくれたのだー。ワシントンからはロスアラモスって所に研究開発員として行く事になってますのだ」
平賀さんは『文ちゃんがんばれ！』と書いた横断幕をバックに町工場のお兄さんたちが泣きながら平賀さんを胴上げしてるケータイ写真を見せてくれるが……
ロスアラモス……NGワード、出てましたね今。
前にかなめが言ってたが、あそこは世界中から天才を集めて多種多様な兵器を開発している科学の魔窟だからな。なるほど、平賀さんがそこと繋がったか。さもありなんだ。
「あやや の商品はアメリカからも通販するから、ご安心をー！　ですのだ！」
ぽこぺん！　とアリア級に平たい胸を自ら叩いた平賀さんは……商魂たくましいな。
なんで知ってんの平賀さん……
という俺の質問より先に、目を€マークにしてくる。あー、そこに物しまうのやめようよ、武偵高の女子のみなさん。
「あやや の留学前に、装備品の在庫一掃処分セール中なのだ！　奨学金でセット買い！　いかがでしょーかー？　ですのだー？」
天真爛漫な笑顔で渡された生あったかい紙は、商品名と写真の横に注文数を書いていくすしざんまいみたいなシステムの注文書。
通常価格には斜線が引かれて、確かに2～3割引のセール価格になってる。
俺専用アイテムの紙もくれたが、これは確かにお買い得かもしれん。
よし、これを機に補充しとこう。極東戦役で備品減ったし。
「……この『オロチ改』ってのは何だ？　オロチはグローブ式の防具だったが……」
「前腕まで延伸させた、手甲型のオロチなのだ。コバルト合金とチタンの配合率も改善して、耐久力も上げてあるのだ！　秘匿性確保のために、手首から先の装甲は前腕甲の中に収納できますのだ」
おお、それなら……亜音速に留めていた桜花を、超音速まで上げられるかもしれないな。
手甲なら腕をそのまま盾にもできるだろうし、買っておこう。

「この、『空嚢弾』ってのは……」

「それは読んで字の如く、着弾地点にエアバッグを展開する銃弾ですのだ。おまんじゅうみたいな扁球体で、長径1m、短径0・8m。超高強度シリコン樹脂は厚さ7ミクロンmだけど、瞬間的に38・5tまでの衝撃に耐えられるですのだ」

すげえな。それなら衝突する前に相手の車に撃ち込めば、お互い無傷で済むぞ。買いだ。

「この『レフボタン』――通称・盗撮ボタンもオススメなのだ。男子制服の第2ボタンと見分けが付かないけど、なんとデジタルビデオ内蔵！　マジックミラー方式でホールレスだし、内部電源だし、衛星無線で映像ファイルをインターネット上のクラウドにアップし続けるスグレモノなのだ。遠山くんと武藤くんは女子ノゾキが趣味だから、重宝するハズなのだー」

前科があるから強くは出られないが、俺は「それは誤解だっ」と言いつつも……

これも購入しておくことにする。何かの時に役に立つかもしれないしな。

「でも、平賀も女子だろ。こんな便利グッズを出回らせて、お前は平気かァ～？」

良からぬ目的のために、武藤も買うつもりらしいが……

「あややはノゾかれる物に乏しいから、どーせ狙われないのだ」

Vサインで返してる平賀さん、あんた男子ってものを誤解してるぞ。平賀さんみたいな体形が好きな男子だって世の中にはいるハズなんだから。

だがそれで販売中止になっても困る。黙っておこう。

他にも俺は靴底に鉤爪を仕込む『鉤入り靴』や、発砲すると銃口から着弾点までに化学繊維のワイヤーを張る『繊維弾』など、アイデア商品の数々を――「何かに使うかも」と次々購入決定してしまう。『携帯用万能棒』なる十徳ナイフ的な棒まで薦められるままに掴まされそうになって、ハッと我に返り――

「あー、いま俺には管財人がいてな。後でそいつから注文させてもらうから」

と、注文書を折り畳んだ。

俺は生来、買い物下手だからな。ここは値引き交渉も含めてリサに任せよう。

「……玄関のコンテナも商品か？　何だあれ。見せてくれよ」

と、楽しい戦友会でテンションが上がり気味だった俺は、平賀さんにそんな話を振る。

「これは――『YHS／02』！　アリアさんに注文してもらった、ホバー・スカートの改良品ですのだ。上昇性能は飛躍的にアップしたけど、飛翔時間がまだ課題ですのだ」

玄関にスキップしていった平賀さんはSFアニメっぽいデザインの箱を開けて、アリア専用飛翔ユニットの改良品を見せてくれる。

おお。新しいホバスカ、ほんの僅かにカーブしてるフィンがカッコいいな。形状的にもこなれてきた感がある。カラーはピンクゴールドで、前にアリアさんが取りに来る約束ですのだ」

「これは、ここにアリアさんが取りに来る約束ですのだ」

平賀さんがそんな事を言った時、ピンポーン。噂をすればでアリアがやってきた。

不知火に代わって俺が開けた玄関から入ってきたアリアは、
「あら、キンジもいたのね。ハロー、平賀さん。でも……男子寮で遅くまで遊んでるのを見つかると、寮監さんに撃たれるわよ？」
自分の事を棚の最上段に上げて、そんな事を言ってるよ。
そして玄関に子供みたいにしゃがみ、赤紫色の大きなお目々でＹＨＳのチェックに入る。
「ちょうど開梱してたのね。ふーん……いいカンジだわ」
などと、高級車を納車してもらったみたいな雰囲気でハーネスを確かめたアリアは――
「うん。気に入ったわ。キンジ、箱に戻しといて」
立ち上がってニッコリ笑い、ドレイの俺にご命令。
そのツリ目がキュッと細められる様にどうにも弱い俺は、少しドキッとして赤くなってしまう。あークソッ。このぐらいの事で何でテンパるんだよ俺。ヨーロッパではアリアに会ってなくて、アリア分が不足してたからかな。って、何だよそれ。俺。
「イ、イヤだね。いま俺は公式に休憩中、お前風に言えばパーティーの席なんだ。指図を受けるいわれは無い」
友達の手前でもあるので、俺はアリアに非服従の態度を見せるが……
「ノー、油売ってないでキリキリ働く！」
あくまで貴族様は俺を顎で使おうとするので、俺はホバー・スカートでアリアを室外に射出しようと企み、起動スイッチを探していると……
「遠山君、またカノジョさんとケンカかい？」
いい笑顔で、不知火が現れた。
「お、おまっ……カノジョとかそういう……」
事を言うなよッ、と、続けたかったんだが――さっきアリアの可愛さにキョドったのがまだ尾を引いてて、言葉が続かなくなってしまった。
挙げ句なぜか、俺はアリアが今の不知火の発言にどんな顔をしてるかチラ見してしまう。
すると運悪くちょうどそのタイミングでアリアも俺をチラ見してきており、目が合ってしまい、２人してどんどん赤面してしまうハメになった。なんなんだよこの空気。
「キ、キンジほらッ、早くそれ、を――っ……？」
ドレイこと俺のカノジョ呼ばわりされたのがそんなにキツかったのか、アリアは得意の空中でエアお手玉。テンパった時にアワアワしながら行うシャドー・ボクシングのお手玉版を見せた。
は、速いっ。シャドー・お手玉、今日は３つ４つ同時に飛ばしてるな。
「を――っ……？」
その時、妙なアニメ声を上げたアリアは……手を止める。
そしてその手を、ぱし。膨らみに乏しいので胸か背かがセーラー服の向きで判断される、その胸にあてた。

「あ、あれ……？」
かくん、と俺の方にもたれかかってきたアリアが……額に、妙な汗をかいている。
「――どうした」
その異常に最初に気づいた俺が、アリアの顔を覗きこむ。
「だ……大丈夫。いつもの、よ。いつもの発作みたいな……んっ、あれ……？」
アリアの視点が、定まっていない。
マズいぞ。
アリア本人も自らを急に襲った不調に驚いているが、これは――不整脈か何か？
「――アリア！」
抱き留めて支え、叫ぶが――反応が無い。もう失神している。目を開けたまま。
「……神崎さんッ!?　どうしたんだい、脈は――」
「大丈夫だ、いま診たが徐脈や脈拍上昇は起こしてない。ただ、意識がッ……アリア！　聞こえるか!?」
「神崎さんッ！」
不知火と共に呼びかけるが、アリアは見当識が無い。
指を捻るようにして痛みを与えても、払いのけるような動きを見せない。
似たような発作は藍幇城でも見たが、あの時は意識レベルをここまで落とさなかった。
とはいえ胸に痛みがあったらしい事から、出血性脳梗塞やクモ膜下出血の疑いも少ない。
一体どうしたんだ、アリア――
「――武藤君！　救急ッ、神崎さんを運ぶ！　平賀さん、救護科に連絡を――！」
不知火が指示を出す隣で、俺はアリアに呼びかけを続ける。
――アリア！　アリア！　アリアーっ！　――
原因不明の意識障害は、救護科から転送された武偵病院でケロッと回復したのだが……精密検査が必要との事で、アリアは深夜、東大医科学研究所の附属病院に搬送された。
――そしてそのまま、入院する事になってしまったのだ。

3弾　忍者の暇はあれど

アリアが入院した、港区白金台にある医科研病院は――8階建ての、大病院だ。
周囲は鬱蒼とした林に囲まれており、どこか閉鎖的な印象も受ける。
そしてそこへ見舞いに行った俺は……とりつく島も無く「面会謝絶」を申し渡されて、門前払いを食らっている。
院内1階にあったコンビニで買い物をするフリをしつつ、エレベーターや階段の位置を確認したが――
（病室のある7階までは、行けるは行けそうだけどな……）
上の階へ侵入しなかったのは、上に妙な気配を感じたから。
事前に聞いたが、アリアを殊のほか尊敬している1年の戦妹・間宮あかりは俺より先に医科研病院へと駆けつけたらしいものの……
受付での門前払いに怒って病室へ勝手に行こうとしたところ、スーツのお姉さんたちにとっちめられて追い出されたという。その中には、白人もいたらしい。
追い出される際にその1人から間宮がかっぱらってきたピンズは、『外』の字を崩して輪っかのような形にした、外務省の標章。
――外務省が動いたのだ。
どうやらＶＩＰのアリアお嬢様が体調を崩したので、安静を強要してるらしい。間宮が見た白人女とは、おそらくイギリスの駐在武官。駐日英国大使館も連携してるとなると、一武偵の身空じゃお目通りすら叶わないぞ。俺が院内で上階方向に感じた気配も、確かにただの文官のものだけじゃなかったしな。
これは――一筋縄じゃいかない。
出直して、潜入する必要が出てきた。
となると、今はヘタに顔を見られない方がいい。
そう判断して、一旦は成果ナシで武偵高に戻り……
こういう案件にこそ役立ちそうな理子に「お前も動いてくれ。ただし、内密にだぞ」と連絡し、さらにもう1手打つ事にした。
放課後の学食、そのテラスで寒風に吹かれてコーヒーを飲んで待っていると――
ザァッと北風に落ち葉が舞い、それに紛れるようにして、
「――風魔陽菜、只今参上仕った」
俺の戦妹が、いつの間にか俺の前で片膝を突いてポニーテールの頭を垂れていた。
忍者の子孫らしい諜報科の後輩に、院内潜入の助言をもらおうと思ったのだが……
「此度、再び師匠の御役に立てる事、恐悦至極。某、一意専心の構えにて――」

「挨拶はいいから顔を上げろ。あと、立て」
見下ろす角度だから内部までは見えないとはいえ、俺は風魔が短いスカートで片膝立ちしてるのをやめさせる。
スカーフみたいな口当てで顔を半分隠しちゃいるが……実は風魔は端正な顔をしてて、将来美人になりそうだからな。少女マンガみたいに「あれ……コイツ意外と可愛い……」とかならないよう、あどけない今の内から警戒しとくに越した事はない。
「――密偵して参ったところ、医科研病院、特に神崎殿の御入院なさる7階は警戒厳重。日英の武装職が4名常駐して御座った」
踵を揃えて直立した風魔は、まずそんなレポートをしてくる。
「4人、か。それなら全員が揃って隙を見せるタイミングは少なそうだな」
それなりに、守りは堅いみたいだ。どう侵入したものかな。
「この件はあれこれ不可解だ。アリアは意識が戻っているハズなのに、連絡が付かない。外務省の動きも異様に速かったし、もう今は軟禁されているような印象だ。早めに本人とコンタクトして、出してやらないと……」
……そのまま、連れ去られてしまう気がする。アリアを。
元々、イギリスのロンドン武偵局はアリアの犯罪者狩りの腕――それと多分、世界中の悪党を震え上がらせる『ホームズ』のネームバリューを欲しがってた。神崎かなえさんの裁判という事情があるにせよ、虎の子をその1案件にいつまでも釘付けにさせておくのは国家の損失と考えているのだろう。
「御意。とはいえ恐れながら申し上げるが、焦りは禁物に御座る。敵が警戒心を強めれば更なる増援や、より金城鉄壁に神崎殿を移送する恐れもあるかと」
「それはそうだが、じゃあどうする」
「忍者の暇はあれど番人の暇はなし。忍び込む側は任意の時に動けるのに対し、守る側は常に警戒を続けねばなり申さぬ。先に疲弊し、隙を生じさせるは何時の世も守り手なり。ついては――院内に潜伏し、先ほど師匠が仰ったような好機を待つのがよろしいかと」
「潜伏作戦……か。つっても、あの病院内にずっと居座ってたらそれこそ怪しまれるだろ。それとも医者にでも化けて潜伏れってのか？」
「否。失礼ながら師匠は振る舞いが雑にて、医者の風格に非ず」
ホントに失礼だなコイツ。
「じゃあ何になれってんだ」
腕組みして俺が尋ねると、風魔はキリッとした表情で――こう答えた。
「――コンビニ店員に御座る！」
……はい……？

確かに、医科研病院の1階・建物内には都内に多い『コンビニナイン』があった。患者や見舞客など、ほぼ院内専用のコンビニとして。

風魔の調査によるとそこの男性店員が最近1人辞めたところらしく、バイトを募集していたとの事だ。

潜伏先がコンビニとは、バイトを転々としている風魔らしい案だが……

詳しく聞く内に、それが割と良案だという事が分かってきた。というのも、バイトの履歴書等は個人情報保護法の関連で外に出せないのだ。俺の正体は、病院側にバレない。

なので俺は――風魔の推奨の通り、そのコンビニでアルバイトをしつつチャンスを窺う事にした。そして、入院と共に断たれてしまったアリアとのコンタクトを取り戻すのだ。

しかし、風魔にも注意されたが……俺は……

アリアの事になると、焦る傾向があるな。

パートナーだから当然といえば当然だが、焦りはミスを生む。

これも、平常心で努めないと。

だが潜伏そのものは楽勝だろう。

前に潜入捜査でやったエリート高校の生徒や、IT社長や、執事とは違う。やる事は、たかがコンビニのバイトだ。普通の高校生もやっている、簡単なお仕事さ。

――と、俺は風魔が用意してくれた黒ぶちメガネで最低限の変装をするが……なんか、一気にすげぇダメ男っぽくなったな。俺、似合わないんだな。メガネ。

そうして数日後、単身向かった医科研病院の『コンビニナイン』は……

前に来た時にも思ったけど、少し店内が荒れてるな。商品の陳列も雑だし、掃除も隅々までは行き届いてないカンジだ。店員は十分いるように見えるのに。

面接に来た事を伝えると、俺は店の奥でパイプ椅子に座らされ……

（レジの向こう側は、こうなってたのか。一部、倉庫も兼ねてるんだな）

初めて見るコンビニのバックルームに、興味が湧いたが――

俺の履歴書を見る店長のほうは、あまり俺に興味が無い様子だ。

面長でチャラい感じの、想像してたよりずっと若い小和田店長は、

「ンだよ、男かぁ……」

病院内なのにタバコを吸いながら、ボヤいてる。すごく、つまらなさそうな顔だ。

だがバイトの女子大生が「てんちょぉー、ドラゴンタイプが出な～い」などとケータイゲームの画面を見せてきたのに対しては「あぁ、ちょっと待ってろー」と超優しい笑顔で答えてる。

「東京武……高？　知らねぇー。まァ、高校生な？」

「は、はい」

よかった。どこまで身元調査されるか分からなかったから正直に書いたんだが、そこはスルーしてくれたみたいだ。

しかし、今の……まさか、武偵の偵の字が読めなかったのか？　店長。
「オメー、他には何のバイトやった事あるよ？　コンビニ経験は？」
「警備業や調査業を……コンビニエンスストアで働いた経験は、ありません」
「ふーん。まァ、体力あるんならいっかなァ……最近ＯＦＣもウルセーしなァ」
その後、遠慮無くコンビニ業界用語を交えて喋る小和田店長が――俺に、週どのくらい、どの時間帯のシフトに入れるかを聞いてきた。
病院に潜伏するつもりの俺が夜～深夜帯に毎日来られる旨を伝えると、そこが店長には好印象だったらしく、
「じゃあ、このシフトで明日から来い。シフト10分前には絶対来て、引継ぎ受けろよ？　あと研修期間はバイト代は75％な」
タバコをもみ消しながら、無事に俺を採用してくれたのだった。
労基法の改正で高校生の深夜バイトが解禁されてたのも、ラッキーだったな。
貸与された制服を武偵高の防弾制服に重ね着した俺は、翌日から『コンビニナイン』で働き始めたのだが――
まずは先輩のバイト店員に店内での言葉遣い、ラベラーで商品にプライスシールを貼る仕事、商品の陳列方法、客が買った品の袋詰め、掃除の仕事などなどを教わっていく。
だが、これが――
初日からいろんな仕事を、それも矢継ぎ早に言われるので……覚えきれないよ。そんな、1回ザッと説明されただけじゃ。普段の俺の記憶力は人並みなんだから。
「あの……この検品端末……でしたっけ。これは、どこにしまえばいいんでしょうか」
「は？　さっき教えたでしょ」
教えてもらってねーよ！
と言いたいところだが、このバイトの女子大生さん、あの小和田店長とバックヤードで遊ぶ時間が俺の教育のせいで減ったもんで、ご機嫌斜め。
これを怒らせると、ただでさえ不十分な説明がもっと不足してしまう。
下手に出ないと仕事のやり方すら教えてもらえない俺は、
「い、いえ……まだ、教わっては……」
と、しどろもどろになりつつ小声で言う。
「オマエもいい歳してんだから自分で考えろよ！」
だが……言われて自分で考えようにも、こういう仕事はした事がないので俺には想像もつかない。
なので仕方なしに、俺はレジ台の周囲や引き出しを一つ一つ確認していく。
万が一拳銃が入っていた時の暴発を防ぐため、引き出しを最初はゆっくり開ける習慣を武偵高

でつけさせられてた俺を――バイトの女子大生さんは「グズっ！」と、喝。俺からハンディ端末をもぎ取って、ガシャッ！　と棚の陰にあった充電器にブッ挿した。

「すみません……」

という俺の声は、聞こえてたかどうか。

女子大生さんは俺に幾つか仕事を教えたので、とりあえず休憩するつもりらしい。

ウケルー！　超ウケルー！　とかいう他のバイト女子たちの黄色い声が聞こえる、店長大人気のバックヤードへ引っ込んじゃったよ。

ていうか、このコンビニ……俺以外のバイト店員は、みんな女子大生なんだが。

しかも皆さんややケバめで、性格はともかくけっこうな美人揃い。

店長が面接したワケだから、彼の趣味なんだろうけど……個人的には迷惑だぜ。

（想像してたよりキツイかもしれないな。コンビニのバイトって……）

などと、しょぼくれる暇も無いまま――

俺はあちこち乱れていた店内を整えに整え、お客に気を遣いながら床を清掃し、レジに向かう人が居れば先回りしてレジ打ち待機し、深夜には納入されてきた雑誌類を……成人向け雑誌からは目を逸らして……陳列棚に並べ――

という仕事を何日か繰り返している内に、気づいた。

店員がみんな、俺が来てから、ほとんど働いてない。

あれもこれも俺に押しつけて、自分たちは店長を中心に遊んでる。俺は通信科で掃除を押しつけられてた中空知みたいな状態だよ。こいつはとんだブラック企業だぜ。

（なるほど……前に辞めた男性バイトさんも、こういう事になって辞めたってワケか）

だが、ヤツらに付け入る隙を与えてしまった俺も俺かもだ。女子大生さんを前にすると、ヒステリアモード化の恐怖で――目も合わせられないし、喋りも噛み噛みになってしまう。お客さんに対しても、女性客が来ると緊張してしまうのがバレバレ。

それで俺は『気の弱いヤツ』という印象を持たれ、ナメられきってる。

で、孤立して、いいように働かされるワケだ。

今も、これからも、みんなの分も。

そして絶望的なことに、それはヒステリアモードという俺の体質が原因となって起きている。

俺が先天的に患っている、一種のコミュニケーション障害に起因する事なのだ。

ヒステリアモードは、治そうとして治るものではない。

つまり将来、俺は、こうして一般の仕事に就いたとしても……

こうなっちまうんだろうな。

（普通の人間としては、俺は、マトモに働くことすらできないのか……？）

チクショウ。なんだか分からん涙が浮かんできたぜ。だが勤務中は泣く事も許されない。なんたって客商売だしな。

そう、俺は――クビになるワケにはいかないんだ。
未だそのチャンスは窺えていないが、ここに居座って、敵の隙を見つけて……アリアに接近するまでは。
耐えろ。耐えるんだキンジ。
最初にこの仕事をナメていた事は猛省する。辛い事が一切無い仕事なんて無い。世の中多かれ少なかれ、働くって事は大変な事なんだろう。
でも、だから、めげるな。今はしがみつけ、この仕事に……！

シフトは俺だけが早く来させられて、俺だけが遅くに終わる不可解なものだ。
その「のりしろ」は、日に日に伸びている。今じゃもう俺だけ前後に＋30分のサービス残業が付け加えられてる状態だよ。
しかも前のシフトを担当してる女子大生さんは、引継ぎが引継ぎにならないタイプの人。今までも仕事を人に押しつけてほとんどしてなかったらしく、やり方をそもそも知らないのだ。
これには難儀したが、俺はバイト経験の豊富な風魔に携帯で質問するなどの裏技も使い……今では、なんとか仕事を回せるようになってきている。
それで周りを見回す余裕が出てきて、分かったんだが――
ここはコンビニナインのＦＣ店舗なのでオーナーがおり、そのオーナーは医科研病院の医師。しかも小和田店長の父親だった。
要するに店長は医者のドラ息子で、コネでこのコンビニを任されてたってワケだ。
どうりで金持ちで、最新型のiPhoneとか50万する腕時計とかを自慢してくると思ってたよ。
そのくせ店長はケチで、研修期間の80時間は優に回ったってのに俺の時給を上げない。
どうやら上げ忘れたフリでピンハネしてるらしいんだ。セコいよな。
一方、そのパパこと内科医の小和田オーナーが来た時は、俺は顔を見られないよう警戒してたんだが……
オーナーは売上チェックや商品の陳列状況、店員、同の勤務態度なんかを監視するハズなのに、まるで確認しなかった。笑顔でやってきて、ドラ息子の店長にセルシオを買ってやる話をしてただけだ。
……息子が可愛いのは人としてしょうがないのかもしれんが、将来ダメな子になるぞ。そんな育て方じゃ。
（いや、もうなってるか……）
俺１人では回せないほど仕事があり、お客さんに迷惑なので手伝って欲しい時にも……
店長はまるで働かず、バックヤードでバイトの女子大生たちを侍らせてＵＮＯなんかをやってる。
「ビリはバツゲーム～！　くすぐりの刑な！　オラオラーっ！」

などとさりげなく……もない、あからさまなボディタッチもしてるよ。お盛んなこって。
普通ならセクハラで訴えられてもおかしくない行為だが、女子大生たちは怒るどころか楽しそうに大はしゃぎ。
俺は体質上、これっぽっちも羨ましくないけど……モテモテだよ、店長。
というのも、小和田店長は金持ちだからモテるのだ。
世間ではイケメンしかモテないような事が言われているが――現実はご覧の通り、違う。
占くから語られている上方落語『イモリの黒焼き』でも、女にモテる男のパターンを「①おしゃれ」「②イケメン」「③金持ち」「④芸達者」「⑤働き者」「⑥純情で可愛い」「⑦口が上手い」「⑧力持ち」「⑨度胸がある」「⑩評判がいい」と10個も挙げている。
店長はその③を装備しているから、モテるわけだ。ちなみに俺はどれも持っておらず、特に⑩なんかは逆張りもいいとこなんだが、ヒステリアモード時には⑦あたりが点灯する。
（そのせいで俺は後々、地獄を見る事になるんだけどな……）
などとヒスった時の己の妄言を思い出し、セルフサービスで鬱になっていた時――
「おい遠山！　ヤニ買って来い！　前と同じマルメラだかんな」
「は、はいっ」
――店長にパシらされる形で、病院内を偵察するチャンスが訪れた。
ここは病院内のコンビニなのでタバコは売ってないのだが、敷地の外には専売店がある。最近はお使いでも未成年が買いづらいアイテムとはいえ、そこのボケ気味のお婆ちゃんは普通に売ってくれちゃうのだ。
パシリには蘭豹のパシリで慣れてる俺は、猛ダッシュで正しくマルボロ・メンソール・ライトを買い付け――
もぎ取った僅かな自由時間で、病室のある上層階を目指して病院の階段を上がってみる。
時刻はもう夜10時。外来はとっくのとうに時間外だ。なので、すれ違う人もいない。
だが……4階あたりまで抜き足で進んだ所で、俺は足を止めた。
――いるな。
なんとなくだが、武偵高で鍛えられた感覚みたいなもので……
そこそこの手練れがいる事が、分かる。上にいる4人は、プロだ。
これ以上行けば、１００％勘付かれる。今の俺ではな。
（まだ、機を窺うしかない……か）
やむなく、音を立てないよう万全の注意を払いながら――コンビニに戻ると、
「遅えよ！」
パイプ椅子を蹴って俺のスネにぶつけながら、小和田店長が怒鳴ってくる。
「……すみません……」
俺がタバコの箱を差し出すと、店長はそれをむしり取って『早く仕事に戻れ』オーラ。

自分はまた女子大生たちの輪の中心に戻り、みんなでスノボ旅行に行く話をしてる。
（ここは小和田店長の王国、だな……）
小山の大将ってヤツだが、リアルが充実してる感じだよ。店長。
社会的には、ああいう人の方がうまくやってるって事になるんだよな。往々にして。
俺みたいな要領の悪いヤツは、ああいう輪からハブられて、置いていかれて、仕事だけ押しつけられて――気がついたら爺さんになるまで、人のパシリ。
（俺みたいなのが厚かましくも社会に出て普通の仕事についたら、こうなるって事か）
と……悲しい事実を実地で学ばされた俺は……
黒ぶちのダテ眼鏡を直し、寒いせいかよく売れる酒の在庫の品出し作業に戻る。
入院患者や病院職員向けに、コンビニナインは、応24時間営業なのだが……
深夜帯になると、客はほとんど来ない。
配送されてくる商品の納品対応も、陳列・清掃も、ＦＦの唐揚げや肉まんの調理もやってしまうと……やることが無くなる。
とはいえ時々、ほんとに時々お客さんも来るので、俺は延々とレジに立ち続けるのだ。
これが、なかなかにキツい。精神的に。
（ヒマだ……）
俺の部屋でアリアが拳銃をブッ放したり白雪やかなめが出刃包丁を振り回したり理子が手榴弾を炸裂させたりする時には――俺は女子どもによる嵐が過ぎ去るまで、何時間でも防弾物置の中に隠れるんだが――この感覚は、あれに似てるな。
しかし、物置では携帯で映画情報サイトを見たり武藤とメールしたりができた。ここは仕事場なんでそれもできん。女子大生たちは客さえいなけりゃケータイいじってるけどね。
その女子大生と店長がスーパーカップにお湯を入れるため、バックから出てきた時……これはこれで平穏と言えなくもなかったコンビニナインに――
――招かれざるお客さんが、来てしまったみたいだ。
パーカーのポケットに右手を突っ込んで、ガムをクチャクチャやりながら、エラソウに入店してきた……中2ぐらいの、やや小柄な女の子。
美人のタマゴ的な美少女なんだが、そのクリッと大きなお目々は目つきがワルめ。
金髪に染めた髪は根元がかなり地毛になってきてて、カラメルを乗せたプリンみたいなカラーリングになっている。
いっぺん一緒に来たお婆ちゃんにそう呼ばれてた事からついた通称は、『やっちゃん』。その時はやらなかったが――万引きの常習犯だ。
「いらっしゃいませー」
当店のブラックリストに載ってる子とはいえ客は客なので、俺は笑顔を向けてご挨拶。
だがやっちゃんは俺をスルーして、パチン、パチン。ポケットの中で飛び出しナイフの留め金

を鳴らしてる。音から分かるが、藤木林が買ってたのと同じ通販のやつだねそれ。
どうやら前腕を骨折したらしく左腕は吊っているが、右手の手クセの悪いやっちゃんが来ると……店長と女子大生バイトさんは『遠山に任せる』というムードでバックヤードに逃げていってしまった。
俺的には何ともないんだが、彼らにとってこういう面倒系の客の対応は厭なものらしい。
しばらくしても、店長たちがラーメンを啜る音は聞こえてこない。やっちゃんが悪さをする所をカメラモニターで撮影する、証拠取りの態勢に入ったからだろう。
とはいえ、やっちゃんは上手いからな。くすねる瞬間を防犯カメラで録画できたためしはない。
ちなみに、よく棚減りするのは梅ガム。好物らしく、被害総額は６００円にも上る。
コンビニで、万引き犯が逃走を図った場合は――防犯カラーボールを投擲して服や足にカラーペンキを残し、捕まえた際にシラを切られるのを防ぐ。的な事が、マニュアルには書いてあった。
だが、よしんば今回現場を録画できたとしても……そのカラーボールのペンキの掃除も俺がやらされるんだろ？
なので俺は同じマニュアルの、その前のページに書いてあった内容に従ってやっちゃん対応をする事にした。それとなく店内の見回りをして、万引きを未然に防ぐのだ。
俺は雑誌を立ち読みするやっちゃん、冷凍庫のアイスを物欲しそうに見るやっちゃん、ジュースや缶コーヒーの並ぶ冷蔵庫を開けたり閉めたりするやっちゃん……と一定距離を保ちつつ、仕事がてらさりげなく存在をアピール。
小者ほど、細かい気配には敏感なもので――
「……チッ……ンだよテメー、あたしの行くとこジャマすんじゃねーよ！」
やっちゃんは床をモップ掛けする俺のコンビニ制服の襟首を、いきなり掴んできたよ。
ヤンチャなタイプらしいが、入院して外で暴れられないからイライラしてるんだろうな。
だが、危険だよそれは。俺が、じゃなくて、君が。例えば武偵高のブレザーには、襟を掴まれた時に備えた毒針入れが最初から付いてた。掴んだ人の手に刺さるようにね。俺は自分でケガしないために入れてないけど。
「あー……申しわけございません。失礼しました」
俺は苦笑いで、年下の女の子にペコペコ。
しかしその張り合いのない態度に、やっちゃんはむしろイラッと来たみたいだ。
「ンだよテメー、その態度は。やんのか？　えェ？　やんのか？」
これはホントに不思議なんだが……なんでシロウトさんって、そこの確認を取るんだろう？
聞く前に先制で、発殴る方が絶対いいと思うんだけどな。どう考えても。
「あ、申しわけございません……」

「あたしはなァ、カレシがヤクザなんだぞっ」
おや奇遇ですねー、俺もヤクザと知り合いなんですよ。元組長ちゃんにはストーキングされてまして。
などと一瞬思ってしまって、ついビビるリアクションを取り忘れた。
やっちゃんはきっと、俺をビビらせようとして今の発言をしたのだろう。だが俺が共感するような顔をしたので、思い通りにいかなくてムムーッって顔をしてる。
でも……キミさっき超真剣な顔で、少女向け雑誌の『イナイ歴＝年齢の子必見！　一体どうしたらカレシができるの？』のページ読んでたじゃん。ケータイにメモまで取って。フカシこくなら、もっとリアルな設定にしようよ。
「ケンカ上等、マッポ上等なんだよっ。てめぇ上等、ちょお上等。どこのレディースにも負けねえぐれー気合い入ってんだよ！　あたしは！　分かってんのか！」
啖呵を切った（つもりらしい）やっちゃんは、
「えーっと、ちょっと、よく分からないです……」
本当によく分からなかったのでそう答えてしまった俺に「あァ？」と睨み目を接近させ、片手で俺の襟を掴み続けるのに疲れたのか手を放した。そして細い眉をツリ上げ、
「フンッ。あたしのこれはなァ、抗争で折れたんだよ」
なぜか今度は、吊ってる左腕のケガ自慢をしてきたんだが……
包帯からハミ出ている擦過傷のカサブタから見て、多分、チャリでこけたな。
腕の吊り方からも分かるが、低速で転倒して若木骨折でもしたってとこだろう。
ぴくぴく動かしてる手指の動きも、ほぼ治ってる動きだ。武偵高ならとっくに強襲科の格闘訓練に戻されてるぐらいの治りっぷりだよ。一般人は大げさだなぁ。
「それは大変でしたね。抗争とは、実に、その……大変でしたね。自分、怖いです」
アドリブ下手な俺からはそんなしょうもないコメントしか出なかったが、自分のウソを俺が信じたと思ったやっちゃんはフフーンと笑顔になる。
その笑顔は一般の中学生らしくて、あどけなくてカワイイもんだ。
と、ちょっと油断してたら――ペッ！
やっちゃんは噛んでいたガムを床に吐き捨てて、何も買わずに帰ってしまった。
「あ、ありがとうございましたー……」
あーあ。これの掃除も俺だよ。
まあ、カラーボールのペンキよりはマシだけどな。

その後の休憩時間、バックヤードの隅っこで弁当を食っていたら――
「ダラダラ食ってんじゃねーよ！　レジ戻れ！」
俺＝男子が近くで休憩してると目障り、かつ、代わりにレジに立つんで女子大生が減る事に腹

を立てた小和田店長に、弁当を蹴り上げられた。
ヤンキーには片腕吊った女子中学生にすらビビってたくせに、気が弱いと見た相手にはとことん強気だなぁ。店長。
さっき俺、やっちゃん対応で店に貢献しただろ。少しは評価して優しくしろよ。
（それに休憩時間って、1時間あるんじゃなかったのか？　まだ15分しか休んでないぞ）
とも思ったが、
「――すみません。戻ります」
俺は緩めていたコンビニナインの制服のジッパーを上げて、売り場に戻ることにした。
この店で自ら買ったチャーハン弁当も、床に散らばっちゃったしな。
「掃除しとけー」
女子大生さんに言われるまでもなく、するつもりだよ。
今日は掃除ばっかりしてるなぁ、俺。
しかし、ここはここで……安全で、平和で……俺みたいな社会性のないヤツにも仕事をくれる、ありがたい職場なのかもしれない。来月のベレッタ社からの入金までもけっこうあるしな。
金を稼げるのは、純粋にありがたいよ。ピンハネされてるとはいえ。

その後も、折を見て上階の様子を探ってはみたんだが――
アリアを軟禁する外務省とイギリス大使館のプロたちは、まだ俺のような外敵に対する隙を見せない。常時、全意識を侵入者対策に振り向けている感じだ。
（だが、忍者の暇はあれど、番人の暇はなし……だ）
持久戦なら、こっちが有利。向こうがいくら優秀でも、必ず隙を見せる時は来る。俺はただそれを捉えればいい。ここは焦らず、粘るぞ。
と、仕事をしながらチャンスを窺っていると――
翌日の夜遅く、また、やっちゃんがご来店なさった。
遠山キンジVS万引き女子中学生、再びの決戦である。この遠山桜、散らせるものなら散らしてみやがれ！　とばかりに、俺はモップを手に出撃。
だがあれ以降すっかり俺を目のカタキにしたらしいやっちゃんは、掃除してる俺の足を棚の陰から引っ掛けて転ばせて、
「キャハハハ！　だせー！」
などと短いスカートをぴょんぴょん跳ねさせ、飛び上がって笑ってる。
その後も「釣銭の渡し方がなっちゃいねぇ」とクレームしてきたり、わざとファンタをこぼしたり、その空き缶を捨てるフリでぶつけてきたり、積極的に俺イビリをしてきたぞ。
「オメー、掃除遅えよ。辞めろ辞めろ。辞めちまえ」
そんな事を繰り返し言ってくる、やっちゃんは……

俺のせいで万引きでストレス発散ができなくなったから、俺を辞めさせにきたんだな。
さらに買う物もないのにレジ前につき、
「あたしはな、社会のために言ってんだよ。オメーみてーなダメなヤツは辞めさせた方が社会のためなんだよ」
レジ台を挟んだ奥にいる俺に、ネチネチと口撃してきたよ。
今は他にお客さんがいないから、まぁいいんだけどさ……
こういう子って、割と社会派を気取る傾向があるよね。自分＝正義だから。
だがそれもある種の中二病。人間の成長の一過程ということだろう。
「あたしは区長とも警察署長とも友達なんだぞ。オメーの首ぐれぇ、いつでもカンタンに飛ばせるんだっ」
「……」
黙って苦笑いしていた俺の、黒ぶちダテ眼鏡の奥で……
（……ッ……！）
驚愕に目が見開かれていくのを見たやっちゃんは、『ようやくあたしにビビったか』と満足げな笑みを浮かべたが……
俺が驚いたのは――やっちゃんのプリン頭の向こう――
このコンビニの自動ドアの向こうに現れた、存在に対して。
見間違いだと思いたい。
錯覚だと思いたい。
だが、無情にもドアは開き――深夜でも煌々と灯されたコンビニの蛍光灯が、彼女らの姿を明瞭に照らし上げた。
――チクショウ……人違いじゃないぞ……！
（……閻ッ……！）
このコンビニナインに、ただの人間に自分たちを偽装した、3体の鬼が――
やってきた、のだ……！　なんでだよ！
来日していた事はワトソンから聞いて知っていたが、まさか、ここでいきなり出くわすとはッ……先読みできなかったぜ。
閻の衣装は、ゴツン、ゴツン、と足音を鳴らす革のブーツを始め、革ズボン、革ジャン、どれも黒ずくめだが、胸元は開いており――タンクトップらしきシャツは、閻の髪と同じ赤銅色をしていた。サングラスをし、黒革のキャップ帽を被り、左に偏った2本のツノは帽子の飾りのように見せている。背には、金剛六角――凶悪な形状の金棒が背負われて、鈍色の輝きを放っている。
その閻に片腕で抱っこされてる、ヒラヒラした女児服を着てるのは……
（覇美……！）

怪力の、チビ鬼だ。空き地島の宣戦会議以来、久しぶりに見たぜ。
そして闇の隣には、さらにもう1人――これは初見の、しかし短いツノが前髪の間から露出してる事から一目で鬼と分かる――細身の美女がいる。
膝丈スカート・紺色一色のセーラー服を着た鬼娘は表情に乏しく、闇や覇美より冷静、そして冷酷そうな顔つきをしている。腰には柄だけでなく鞘も革でコーティングし、鍔も革袋で覆った革包太刀 拵――通称、鬼丸 拵の太刀を佩いている。
（だが、コイツらが、なんでここに……ッ!?）
絶句している俺と目が合った覇美が、ニィ……と、満面の笑みになり、突然、
「――悪い子は、いねぇーがぁー!?　あははっ！」
自動ドアのガラスが震えるような大声で、『なまはげ』みたいな事を叫んだ。
やっちゃんはその声に飛び上がって、ようやく後ろの鬼たちの存在に気付く。
「――――！」
当然のように武装した闇たちの『明らかにカタギではない、どころか人間ですらない』ムードに、プリン頭の髪が逆立つぐらいビビったやっちゃんは……
振り返ったその場で、ヘナヘナと女の子座りしてしまう。
背をレジ台にくっつけて「も、もれたぜ……」などと震え声で言ってるところを見るに、気を失ってはいないようだが――
腰が抜けて動けなくなったとなると、自力では逃げられなさそうだ。
さらに覇美の声を悲鳴か何かかと思ったらしく、店長とバイトの女子大生たちもバックヤードから売り場を見に来てしまう。
クソッ。ここで鬼どもに暴れられたら……おしまいだぞ。ただでさえ通常モードの俺が、みんなを守りながら脱出しなきゃならなくなる。そんなの絶対不可能だ。
サングラスの下の目で何かを探しながら、のし、のし、とこっちに歩いてきた閻が――
ジャマだったのか、足下で震えていたやっちゃんを、軽く、サッカーのパスみたいな足つきで自分の歩く先に土くれが粉々になろうと何とも思わないだろう。
その際、土くれが粉々になろうと何とも思わないだろう。
闇、よせッ、その蹴りは致死傷になる――ただの女の子にとっては！
「――ッ！」
だが――俺には分かる。闇には、力加減ができない。するつもりもない。
もう俺は何も考えず、レジ台を跳び越え――
やっちゃんのパーカーを掴み、かっ攫うようにして引きずった。そしてやっちゃん共々端の商品棚にぶつかりつつも、なんとか闇の足に空を切らせる事には成功する。
――ガスンッ!!

閻の軽いキックが掠めたレジ台の正面板は思いっきり破壊され、内側のステンレス鋼にまで引き裂いたような大穴を開けている。

（クソッ、重機みたいな女だぜ……！）

ヒステリアモードでもないのに無茶なアクションをした俺は、急激に上がった心拍数と呼吸を整えるので精いっぱいだ。

だが、棚から落ちてきたフリスクを払いのけた時――恐怖で俺の頭部に抱きついていたやっちゃんのお陰で、自分が若干ヒスれている事に気づく。

失礼ながらあんまり好みのタイプじゃなかったが、吊り橋効果ってやつかな。生理的に心拍数が上がると、人間の脳はそのドキドキを異性へのドキドキと誤認してしまうというやつ。

ガタガタ震えて「う、うえぇぇん……」と泣き出しちゃってるやっちゃんを――まずは最年少女性ということで逃がしてあげたいんだが、鬼たちの動きが読めない以上、ヘタなアクションは取れない。

一旦おとなしくして、様子を見るべきだ。

しかし、ヒステリアモードの俺の思惑をよそに――人間のレベルを遥かに超えた蹴りを放った閻を見た店員たちは、みるみる内にパニックに陥っていく。

女子大生たちは悲鳴を上げ、このコンビニから逃げ出そうとした。

だがその先では鬼たちがウロウロ歩いているので逃げられず、また悲鳴を上げている。

騒ぐなッ。騒ぐと鬼たちの注目を惹く……！

（クソッ、なんでお前ら……おとなしく隠れてる事すら、できないんだよ……！）

阿鼻叫喚の店内で最も騒がしいのは、

「て、店長！　ヤバいよ！　マジヤバイよォ！」

「は、はなせ！　この馬鹿！」

茶髪を振り乱して店長にしがみつく女子大生と、一番のお気に入りだったハズの彼女を蹴っ飛ばして振り払い、自分1人で逃げようとしている店長だ。しかも店長はその蹴りで自ら足を挫いたらしく、スッ転んでるぞ。

そんな人間たちの大混乱を全く気にせず、閻は……

酒類が置かれてある棚から、ワンカップ大関を取った。1つ。2つ。3つ……全部。

それを抱っこされている覇美がスカートで受け止めると、がし、がし。日本酒や焼酎を拾い上げていく。これも、全部……かと思ったら、鬼ころしだけは名前がイヤだったのか残した。

さらに閻はウイスキーやブランデーの瓶も無差別に取り、覇美に渡していく。

一方、細身の鬼は米飯の棚からオニギリを略奪していたのだが――そこに歩み寄る閻に抱っこされた覇美が、うーん、うーん、と高いところにあるオニギリを取ろうとしたのを見て……閻と一緒に、小さく微笑んでる。

どうも……暴れ回るつもりは……なさそうだ。

しかし、ピンポイントで医科研病院に来たという事は――
俺か、あるいはアリアがお前らの目当てなんだろう。
だがアポ無しで仕事場に押しかけられたこっちは、笑顔でお迎えできる気分じゃないぜ。
「人間はなぜ、必要としている者に分け与える事もせず――こうも、物を貯め込むのだ。揃いも揃って気の病にでも罹っておるのか？」
店の中を見回した閻が小首を傾げ、挨拶もなく俺に尋ねてくる。
俺は無礼な閻の質問には答えず……
やっちゃんを助けた時に曲がってしまった黒ぶちメガネを外して捨て、素顔に戻る。
そして目つきを、武偵のものに変え――
「――やあ閻。鬼払結界が解かれたら、すぐ来日したそうだね。ちょうど節分も終わったところだ。その2つは、さすがの閻にとっても怖かったという事かな？」
少し挑発するような事を言い、出方を窺う事にした。彼女の目当てが俺で、竜の港では付けられなかった決着を付けに来た――という1つの推測の確認のために。
「それに閻は少し甘いね。いま俺を追撃すれば、殺せたのに。そうしなかった」
さりげなく店内のみんなを守れるような位置に移動しながら、俺が言うと……
閻はまた、首を傾げる。そして、
「遠山。汝は蜂の巣から蜂蜜を取る時、いちいち近くを飛んだ蜂を皆殺しにするのか？」
オランダでも言っていたようなセリフを、ハスキーボイスで返してきた。
「米と酒。我らはそれを摘みに来ただけよ。その二つは人間が造り出した、佳いものだ。我らは占くからその二つの中毒になっておる。汝ら人間は米と酒を造り、こうして我らに供えるためのみに、蜂のようにな」
――生かしておいてやっているのだ。養蜂の、蜂のようにな。
鬼にとって、人間というものは……本当に、虫けらみたいなものなんだな。
そしてもう一つ分かった。コイツらの狙いは俺じゃない。これだけ挑発しても、乗ってこなかったからな。
（となると……アリアか）
事態が、より深刻になってきたぞ。
「閻姉様。こいつ、侍です。食ってしまってよろしいですか」
閻の隣にいた、セーラー服の鬼が――
そう言いながら、俺をマークしてくる。
「好きにせい、津羽鬼」
閻にそう言われて、津羽鬼と呼ばれた黒いセーラー服の鬼は……ゆら……と、こっちに殺気を発し始める。
その雰囲気は――鋭い。
ワンアクションされたら、殺される。喉元に刀を突きつけられているような感覚がある。

（津羽鬼の実力は、計り知れないが……）

闇を姉と呼んだところから見て、闇以下。しかし闇に準ずるパワーの持ち主と想定して対応しよう。

となると――

ここで暴れられたら、一般人が巻き添えになる。紙きれのように千切られる。

そう考えた俺は津羽鬼が動く前にと、やむなく、

「退店しろ」

コンビニナインの制服の下、バックサイド・ヒップホルスターにずっと隠し持っていたベレッタを抜いた。

威嚇の意味も込めて操作が見えるようハンマーを起こした、チャキッ、という音に――俺の銃を見て、しかもそれが実銃だと理解した女子大生たちがまたうるさい悲鳴を上げる。

店長は絶句して青ざめ、やっちゃんも目玉を飛び出させそうに見開いてるよ。

だが俺は彼らに『正体』を隠していたお詫びは後回しにして、

「今のようなケースでは通常、事前に警告・威嚇射撃の義務があるが、お前たちに武偵法2条は適用されない。9条もだ。虫を叩く時、そんな気を遣わないのと同じにな」

さっき人間を虫扱いした鬼に、虫扱いを返しておいた。

商店のような屋内では――棚や天井に引っかかる太刀よりも、拳銃の方が有利だ。

こっちが銃をハッキリ見せておけば、津羽鬼は不利と判断してここを出るだろう。

そうすればとりあえず、ここの一般人たちが巻き込まれる事はなくなる。

「――『鬼は外』だ。店から出ろ」

さっき起き上がる前に薬室に装填しておいた武偵弾も、去年バチカンにもらった徹甲弾。

弾頭を掴み取ろうとすれば、いくら鬼でも手に深手を負うハズだ。

分かりやすくセーラー鬼の額に狙いを定め、脅しをかける俺に――

「无邪志国の侍よ。いま蜚蠊のように這いつくばって謝れば、苦しまぬよう、心の臓から喰ってやる。そうしなければ、生きたまま手足から喰らう。どちらか選べ」

銃口を向けられている側の津羽鬼が……逆に、脅しをかけてくる。

その口調はブラフでない事が明らかな、落ち着き払ったものだ。

しかも津羽鬼は、刀を抜く素振りすら見せていない。

ただ、姿勢良く立っているだけだ。

ナオ・デ・チーナの時の閻とは違い、本気で掛かってくるつもりらしいが……

……素手の鬼の方が、銃を持った人間より強いってのか。

「謝さぬか。ではまず、膝から下を捥いでやろう。だが佳かったな、侍よ。お前はそれを視ることも能わぬ。視ようとする前に、取れているからだ」

ただ喋っていただけの、黒セーラー服の鬼が――

――パッ――
――消えた。
「ッ！」
瞬時にスーパースローになった俺の世界で、パンッ！
さっき床に散らばったフリスクのケースが破裂して弾け飛んだ。それは、足跡。眼前、下に――空間が歪んでいるように見える、薄い人影がある。これが津羽鬼だ。これは透明化や瞬間移動じゃない。――超スピード――！
あまりの超高速に攻性の反応は全く取れず、俺は自分の膝にキバが接触したような感覚だけを頼りに、
（――橘花ッ――！）
両足で亜音速の回避技を放ち、そのまま、その場跳び前宙を切る。
そのモーションの途中、上下が逆さまになった状態で左腕刀の桜花を放ったが――
津羽鬼にはスリ抜けられたので――！　右手のベレッタで、発砲する。
――パッ――
着地した俺の場所を通過した向こう側に、横向きに立つ津羽鬼が再び現れる。
慣性の法則で激しく靡いたスカートとロングの黒髪、それとそこそこ大きい胸の位置が元に戻り……その、刀を持ってない方の手には……
「ふん。弾が至るまでにアクビが出るわ」
俺の、弾丸が、摘まれていた。
……当たり前のように、掴み取りやがった。至近距離から撃ったってのに。
しかも徹甲弾を取ったという事は、閻のように力業で掴み取ったのではないのだろう。
津羽鬼は俺の銃弾掴みと同様、弾の速度と手の速度を揃えて摘まみ取ったのだ。
（武偵弾、敗れたりだな）
だが津羽鬼は素早さがウリっぽいし、全ての鬼が弾を掴み取れると絶望はしないでおく。
こっちの発砲姿勢もムリがあったしな。宙返りしながら上下逆でとか、初めて撃ったよ。
津羽鬼が動いたので閻もこっちに振り返ったが、その腕の上では……
「閻、津羽鬼。腹へった」
閻の革ジャンの胸を引っぱって、覇美が食事をねだっている。
「覇美様、暫くのお待ちを。目障りな侍がおりますもので」
津羽鬼が俺越しにそう応えると、覇美は、
「腹へった！　へッ、たァー！　へったへったへったへったへぇ――ったぁ――！」
騒ぎ始めたぞ。
その声がやたらでかい。常識のリミッターが全然掛かってない。まさに子供の騒ぎ方だ。

それに慌てた閻はサングラスを外し、
「さ、されど、その……」
ガラにもなくオロオロとして、覇美を宥めようとしてる。
だが、
「ううぅう。閻、嫌いだ！　大っ嫌いだぁー！」
閻の腕の上で、覇美はジタバタジタバタ。
スカートばきなのも意に介さず、両手足を振り回しての駄々っ子モードに突入した。
一方、覇美に『嫌い』と言われた閻は……ガーン……！
という音が聞こえてきそうな勢いで絶句して、
クを受けた顔になってる。
「おっ、おっ。覇美様。御鎮まりを。にぎりめしが、こちらに」
弾を捨てて長いスカートを小さく抓んだ津羽鬼は、俺を無視して覇美の方へ駆け寄る。
そしてすぐ、さっき自分がオニギリを掻き入れたカゴをアイランド陳列の台から上げて覇美に
差し出している。
どうやら……ヤツらにとって……覇美は、相当な重要人物らしい。
というより、閻・津羽鬼・覇美は夫婦と子供みたいな感じだ。閻は女だが。
（泣く子には勝てない、というヤツか……？）
おかげで、戦いは一時休止となったが……
覇美に食べ物を与え次第、また俺に襲いかかってくる可能性も低くはないな。
種族の差もあって、津羽鬼や閻の思考は読みづらいところがあるし。
それに――
戦いになろうと、話し合いに応じさせようと、せっかく俺の前に現れた鬼たちをタダで帰すワ
ケにはいかない。
ヤツらは眷属の一派――にも拘わらず、正式に停戦に同意してない不届者だ。
それに何よりアリアの殻金、その最後の1枚をそこの覇美が持ち去っている。
それを取り返せば、アリアは緋緋神にならずに済むのだ。
俺は……鬼たちを威嚇して追い出す事は難しそうなので、
「手下が手下なら、主人も主人だな」
自分をエサに外へ連れ出す方針に切り替え、向こうの特別な存在らしい覇美を小馬鹿にしなが
ら後ずさっていく。出入口の方へ。
子は宝とも言うが、それは効果抜群で――
「御屋形様を愚弄するか。それだけは聞き捨て置けぬぞッ」
さっき俺の膝を食いちぎろうとしたキバを剥き、さっきの家族構成でいえばお母さんの津羽鬼

が俺を再び睨んできた。
そして刀を握る手を震わせながら、一歩、一歩、歩いてくる。
よし。これで少なくとも1匹は外におびき出せるぞ。
閻と覇美が店内に残ろうと、津羽鬼を痛めつければ助けに出てくるだろう。
俺が退がって出口の自動ドアが開き、津羽鬼が――パッ――！　また消えた。その瞬間、
「――鎮まれ津羽鬼いいッッ！」
落雷のような声が売り場に響き、パッ、と津羽鬼は消えた場所に再び現れた。
閻の一喝で身を引いた津羽鬼の、目にも留まらぬ動きで生じた気流に乗って……
俺の背後から、ふわっ、と、香りがした。
それは忘れ得ぬ――
・・・・・・
クチナシの、香り。
「……アリアっ？」
俺が振り返ると、そこには武偵高のセーラー服を着たアリアが仁王立ちしていた。
――アリアを見て、閻は津羽鬼を制止したんだ。だが、少し慌てたような声だったのはなぜだ……？
一方、片眉を上げて俺のコンビニ制服や拳銃を見回したアリアは、
「胸騒ぎがしたから来てみれば、やっぱりキンジだったのね」
と、アニメ声で第一声。
偉いぞアリアの胸。騒ぐ胸も無いのに、よく騒いでくれた。
「……外務省の監視は？」
「撒いてきたわよ。アイツら外ばっかり警戒してたから、中から抜け出るのは簡単だった。で、あんたは何やってんのよ」
「ちょっと、アルバイトをね」
「はぁ？」
今度はこっちが夫婦漫才になりかけたところで、
「――みぃーつけたぁー！」
覇美が閻の腕の中から、隠れんぼのオニみたいな調子でアリアを指さしてきた。
やっぱり、ヤツらの目当てはアリアだったか。
そこが確認できて、アリアを背後に庇うような態勢になろうとする俺だが――
当のアリアは、のしのし。俺の真横まで出てきてしまった。

そして、ぎろり。店内の鬼たちを鬼みたいな目で見回し、腕組みしてフンゾリ返る。
「あんたらは眷属が言ってた、アフリカの鬼たちね？　退屈してたとこだし、胸を貸してあげるわ」
貸す胸は、どこに……？
と、その場の誰もが思ったが、口に出すのはグッと堪える偉い俺。だが、
「胸を貸す？」
声が後ろから聞こえたので、俺とアリアが揃って振り返ると――
いつの間にかそこに、津羽鬼が回り込んでいた。
「貸したら破産だろう」
津羽鬼は自分にはそこそこある胸を突き出すように張り、ダイナマイトに火炎放射器で火を吹きかけるような発言をしてる。
しかも津羽鬼は、スリ抜けざまにアリアのブラウスをめくり上げており――
「――？」
と見下ろしたアリアがツインテールを放射状に広げるぐらいビックリしてしまう事に、な、なんと、トランプ柄の寄せて上げる偽装ブラが……
まる出しの、まる見えに――
なっちゃってるぞ、おいッ！
「……ッ……！」
全力でテンパる俺だが、この悲劇は4月のパラグライダー救出劇の際にも起こったもの。アリアのブラウスは引っかかる物に乏しいため、めくれる時は一気にめくれてしまうのだ。
がば！　と両手でブラウスを下ろしたアリアは、その手の動きを二丁拳銃の抜銃に繋ぐ。
「～～～

ちにするような位置取りだ。
俺は闇の方へと向き直り、津羽鬼に激怒しているアリアの背に自分の背を付ける。
「背中合わせ。香港のタンカージャック以来だね、アリア」
「キンジ、コイツらには風穴開けまくってよし！」
さっきのハプニングでヒステリアモードが強化された俺と、燃料供給源のアリアは――津羽鬼がアリアを、闇が俺を正視した瞬間――くるっ。
何の打ち合わせも無いままに、かつての新幹線ジャックでアリアとレキがやったような入れ替わりを見せた。回転扉のように。
俺には――アリアが、そうするような気がしたからな。なんとなく。
この鬼たち相手には、何でもいいから意表を突かないと苦戦しそうだし。
ダダッ！　とアリアが闇めがけてロケット弾のように飛び出す音を背後に聞きながら、俺も改造べレッタのフルオートで津羽鬼を攻める。
さすがの津羽鬼も連射される弾を掴み取る事はせず、躱し――俺の腕が開くような方向、右側へと本能的にカーブを描きつつ迫ってくる。
だがその走り方は、野原をスキップする乙女のように軽やかなもの。
今まさに弾丸の斉射を浴びせられているとは思えない、気軽な足つきだ。
その拳は指の爪を引っかくように立てた独特の型で、中国拳法の虎形拳に似ている。
しかし、津羽鬼の――鬼の殴打は、そのような形に手を構えて実質的には目潰しを狙う人間の技とは一線を画したものだ。
右側から――
パパンッ！　パパパパンッ！
手で引き裂いた空気に破裂音を上げさせながら、逆襲の打撃を次々と浴びせてきた。
爪で相手の皮と肉を引き裂き、手のひらで骨を折る。当たった所を無差別に削ぎ落とす、刃物つきの鉄槌連撃。そんな打撃がフルオート射撃よりも速く乱射されてくる。
俺はそれを橘花で次々に受け流すが――とにかく人体のどこに当てようと肉をゴッソリもぎ取れる打撃とあって、津羽鬼の狙いはランダム。先読みしにくい。
視界の端に見えた店内では、店長や女子大生たち、それと、やっちゃんが……
俺と津羽鬼の打撃戦が上げる、この世の物とは思えないような炸裂音に絶句していた。安心させるためにウィンクの一つでもしてあげたいが、今は一瞬の油断が命取りになる。俺は真剣な表情を崩せず、申し訳ない気分だ。
一方、アリアは――
ポテトチップの棚を踏み台に、猫宙返り気味の側転1回捻り。高身長の闇を飛び越え、ダンッ、とレジ台にしゃがみ姿勢で降り立つ。

そして人間砲台と化し、ババババッ！　ババババッ！
店長たちを背に、閻めがけて.45ACP弾を雨霰と放った。
「おッ、と」
覇美を抱っこしたままの閻は、それでも亜音速の弾丸を掴み、或いは躱すが――確実に自動ドア側へと後退してくる。
アリアは――店内の一般人を守るために、まず敵を店外へと押し出しているのだ。怒り狂っていても、そこは武偵として俺と同じ考えだったらしい。
アリアが閻を撃つと、その先の直線上にいる俺と津羽鬼にも流れ弾が飛来する。
味方を誤射しないよう、通常そういうコースで撃つのはNGなのだが――俺とアリアの連携力なら、それも可能だ。弾は俺には当たらず、さらに射撃の天才児アリアは津羽鬼の動きを牽制する軌道に弾を通している。
そうこうしている内に、ぴょーん、と閻の腕から降りた覇美は――
たくし上げたスカート前面いっぱいに酒とオニギリを載せ、スキップで津羽鬼の後ろを通過し、店を出ていく。
それを追いかけるように、
「津羽鬼。今は只の小娘なれど、緋緋神様の御雛様に遠山 侍との遊戯の累が及ぶは慮外。御屋形様が御命じのままに、去ぬぞ」
弾切れして抜刀したアリアを背に、閻も同じ所を通ってコンビニを出ていく。
それを見て、津羽鬼も――俺に悔しそうな一瞥を残して、去っていく。
鬼たちはそのまま、覇美を閻が追い、閻を津羽鬼が追う形で病院からも出ていくようだ。
とりあえず、一般人やアリアを鬼たちから守る事には成功したが……
――追撃するぞ。
想定とは違う形でだが、アリアとも合流できたしな。
再会の喜びも、俺は戦いの中の笑顔でしか表現できない運命にあるようだ。今こうして駆け寄ったアリアに向けた、苦笑いのようにね。
「行くぞアリア。アリアも知ってると思うが、彼女たちはアリアの大事な殻金を持ってるからね。ここからは『鬼ごっこ』といこう」
ズボンの裾に隠していた弾倉を再装填する俺の隣に、
「あたしたちがオニだったら、どっちもオニになっちゃうじゃない」
アリアは犬歯長めの口をニカッと笑わせて、ぽん。レジ台からジャンプして降りた。
流れで再結成だね。ホームズ4世&そのドレイのコンビ。
「あ……ぁ……？　えっ……？」
という声が聞こえたので視線を向けると、小和田店長がレジ奥で震えながら俺を見てた。
いつもの黒ぶちメガネも無く、あの鬼たちと戦い、今も銃を持ったままの俺に――最早、言葉

も出ないご様子だな。

「店長、すみません。お支払いを忘れてお帰りのお客さまがいらっしゃったので、その旨お伝えしてきます。外出許可を下さい。あと今日、それで上がっていいですか？」

「……は、はいィ……どうじょ……」

涙と汗で顔をぐしゃぐしゃにしてコクコク頷く店長は、一般人にしても情けないが……

まだ今は俺も、彼の店の店員だ。店員としての務めは全うする。

ヤツらは空き地島での殻金だけじゃなく、この店でも——万引きどころか強盗レベルの盗みを働いたんだ。俺が汗水流して前進立体陳列し、こまめに整理整頓したカップ酒やらオニギリやらをな。絶対に許さん。

怒りに燃える俺は、ピンクの二丁拳銃さん同伴で——

店を出る前に、雑誌棚のそばに座り込んで俺を見上げていたやっちゃんに、

「あまり遅くまで子供が起きてると、鬼が出るそうだよ」

実家で婆ちゃんが言ってたセリフを残しておいた。

ピンポーン・ピンポーン……アリガトウ・ゴザイマシタ……

というセリフが、自動ドアから聞こえてきて——

俺はコンビニの制服を脱ぎ、中にそのまま着ていた武偵高の制服姿に戻る。

——さて、鬼のお客さま。お支払いがまだのようですよ。

4弾　富嶽の女帝

病院の外へ出つつ、俺は手持ちの武装を確認しておく。外務省とのケンカに備えて先日リサに買い付けさせた平賀製品もあれこれ持ってきてたのはラッキーだったな。それと、前もってある・・話をしていた理子にも「そろそろ出番だぞ」と連絡を取っておく。

時刻は23時少し前。外は寒く、さらに今夜の東京には深い霧が立ちこめていた。

医科研の敷地内、公園のような林からは——霧の夜空へと、白いロープのようなものが伸びている。上空には、霧でよく分からないものの……晦月と満月……月が、2つ……？

「キンジ。これはあたしのカンだけど、きっと敵はあの月の上よ。多分あの白いテザーを登って行ったんだわ。あたしは荷物を取ってくる。あんたは3分間待機」

満月の方を示したアリアは、ピンクのツインテールを靡かせてその場を離れる。

濃霧のせいもあってその全容がよく分からないロープと月だが、アリアが言うからには鬼たちはあの月にいるのだろう。相手は超常の存在・鬼。『ジャックと豆の木』みたいなシステムで雲の上に鬼ヶ島が在ったとしても、今さら驚かないね。

何にせよ、ロープを登っていったのなら……と俺は林の中に立つロープの付け根に走り、その下端が地中に埋まっているのを見て舌打ちする。

地面との結び目を解くような妨害工作は、すぐにはできなさそうだな。

それなら切ってやるか、とも思ったが——

ロープはアリアの表現通り、軌道エレベーター等の宇宙開発で使われる強化紐（テザー）のような超高分子量ポリエチレンとケブラー（KFRP）の複合繊維で出来ている。切断には専用の工具が必要だろう。

（それに、このテザーの上がどうなっているか分からない以上——構造次第では、切ってしまったが故に追えなくなる可能性もあるな。登って追うしかない）

しかし、霧があるとはいえ鬼たちの姿が完全に見えない事から考えて……

どう登攀しているのかは不明だが、鬼の上昇スピードは非常に速い。

対する俺は、こんな縄一本を——何の器材も無しでどう登る。

いくらヒステリアモードでも、手足で登ってたんじゃ大したスピードは出せないぞ。

と、眉を寄せた俺の腰に——

——ゴォッ——どかっっっ！

骨盤が外れてしまいそうな衝撃があり、それに続けて、横移動から縦移動へと俺の移動ベクトルが目まぐるしく変わっていく。体感時速は、早くも80kmを超えた。

何にタックルされたのかは、クチナシの香りで分かっていたが……

「平賀さんの造った新型YHSよ。こないだ平賀さんが、ここへ納入しに来てくれて——追い返されたけど、これのコンテナ自体は病院が預かってくれてたの。これで上がるわよ。キンジ、ハーネスとベルトを固定しなさい」

霧を引き裂いて、ホバー・スカートを着装したアリアが上昇している。
俺はそのアリアに後ろから抱きつかれて、テザーに沿って上へ上へと運ばれているのだ。
こいつで一気に、あの月を目指そうっていうのか。
さすが、俺のご主人様は常識の枠に囚われない発想力があるね。
レンジャー部隊みたいにロープ登りをしようか、などと考えていた俺とは大違いだ。
「上昇のチャンスは1度きりよ。ＹＨＳは本来1人用だし、それでなくてもハイブリッド燃料がすぐ切れるの。あたしはいつまた発作を起こすか分からない。月までは運ぶけど、後はあんたに託すわ」
『任せる』ではなく『託す』――というアリアの言い方から、俺への信頼感が感じられて……それが嬉しかったヒステリアモードの俺は、
「そういうアリアの強引なところ、俺は好きだよ。了解だ。きっと月の向こうは恐ろしい鬼の世界。そんな所まで盗品の取り立てに行くのは、俺1人で十分だろうからね」
上昇する風に暴れる前髪を掻き上げて、半分振り返って笑いかける。すると、
「なにバカ言ってんの、上見てなさいよバカキンジっ――目標接近中――！」
やっぱり赤くなってる可愛いアリアが、ぽか、と俺の頭を小さく叩く。
ご命令通り、空を仰げば――見えたぞ。
左右の豪腕で覇美と津羽鬼を抱いた、閻が。
津羽鬼は閻のブーツを大事そうに抱えており、裸足の閻は……なんと足の指でロープを挟み、
バッ！　とロケットのように真上へ跳んでいる。
それを両足で続ける事で、閻は猛スピードでテザーを登攀しているのだ。涼しい顔で。
なんちゅうパワーだよ。体内に原子力エンジンでも積んでんのか。
そしてもう1つ、俺たちが上昇する事で接近し、もうすっかり大きくなって見えている満月
――テザーの上端で光るそれの正体は――
巨大な、白い風船だった。
内側から強力なライトで照らし出されている、ほぼ球形をした風船は……紙……和紙を貼り合わせて作られたもののように見える。
「何よ……あれ……？」
それをアリアが知らないのもムリはない。これは――
（……『風船爆弾』……だと？）
俺も俄には信じ難く、外観を見回すが――間違いない。旧日本軍が対米攻撃に運用した、気球爆弾――通称・風船爆弾。これは、それを拡大したものだ。
風船爆弾とは――巨大風船に爆弾を垂下して放球し、対流圏上層まで上昇させ、そこを流れるジェット気流に乗せてアメリカ本土まで運び、爆撃する特殊兵器。
見た目はアドバルーンのようで可愛くすらあるが、その実体は現代も今なお世界最長の実戦攻

撃距離記録を誇る、史上初の大陸間爆撃兵器なのだ。
この風船爆弾の芯部にはビーズのように穴が通っているらしく、テザーはそこを通っている。そこを貫く形で、閻たちは見る間に気球の上まで一気に登り切った。
そしてそこから、もう一つ空へとワイヤー付きの光る風船を打ち上げている——更なる上空へと上がった風船は小さく、光は点滅している。何だ……？　目印のようなものか？
「キンジ、あのバルーンは空中ブイだわっ。9時方向、航空機——！　アイツらはあれとランデブーするつもりよ！」
風船爆弾を飛び越える形で上昇したアリアが叫び、霧と境目が分からない雲の向こうを指す。
その、向こうから……
風の音に混じって、確かに、力強いエンジン音が接近してきている。
近付くほどに重い音が大きくなり、ビリビリという震動が腹の底に響いていきた。
機影も、見えてくる。遠いはずなのに存在感がある。デカイ……ぞ……！
「キンジ、大きいわ……何？　B－36？　ううん、見た事のないシルエットだわ……！」
雲と霧に渦を巻かせながら見えてきた、これも……アリアが知らないのも、ムリはない。
直線テーパー翼、発動機6発、目測全幅はジーサードのB－2改をも凌いでいる……！
コイツは……！
「……富嶽、だ……！」
「フガク？」
俺もまさかとは思ったが、あれも旧日本軍の——しかし、開発途中で製造を断念されたハズの超大型戦略爆撃機・富嶽。当時の日本を苦しめたB－29なんかよりも遥かに大きい、常識外れの軍用航空機だ。
それが真っ正面を向き、低速で接近している。こっちへ。
日本一雄大な山・富士山の異名をその名に戴く、富嶽は——
全長45m、全幅65m、搭載爆弾重量2万kg、航続距離約2万km。地球を無補給無着陸で半周できる、狂気の巨大兵器。
当時の計画では、日本を飛び立たせ——なんとアメリカのピッツバーグ・デトロイト・ニューヨークといった工業地帯・主要都市を直接空爆し、そのまま北米大陸を跨がらせ、大西洋をも飛び越えて——同盟国ナチス・ドイツ領に着陸。そこで燃料と爆弾をタップリ補給してもらい、イギリス領インドや中国、場合によってはソ連を空爆して日本に戻る……つまりは世界中を爆撃してグルグル回るという、悪夢のように壮大な発想の爆撃機だったのだ。
その要求性能は現代でも世界最大の爆撃機B－52にほぼ匹敵しており、当時の日本には工業力的にオーバースペックであり、かつ、ユニットコストが高額すぎた等の問題があり、終戦までに生産が間に合わなかったのだが……
「盗人を追っていたら、もっと危険なものに出くわしたね。あれは検分する必要がある」
これはあまり知られていない事だが、富嶽といえば必ず併記される『ドイツに一日着陸する』

の深意は……

当時ドイツが理論レベルまでは開発できていた新型爆弾――原爆の搭載を見据えての事。

まさかとは思うが妙な物を積んでないかどうか、中を見せてもらわないとな。

「アリア、あの飛行機に俺を下ろしてくれ。できるか？」

「……やってみるわ。あんただから大丈夫だとは思うけど、ちゃんと帰ってくるのよ？」

「もちろんさ。俺はアリアにまた会いたい。いや、必ず会う。こんな決意まで俺にさせてしまう女性は――アリア以外にいないよ」

「バッ……」

バカ！　と言おうとしたらしいアリアの声は、俺たちの上空を丸々覆ってしまいそうな富嶽のエンジン音に掻き消され――

富嶽から垂らされていたパラシュート形の網――至る所にフックがついている――が、点滅していた風船を包むように引っ掛ける。

その風船と繋がるワイヤーを保持していた閻たちは、風船爆弾から空へとかっ攫われた。

な、何てヤツらだ。そんな乗り方が有りえるのか。人間だったら体がバキバキになるぞ。

「キンジ、あと15秒よ！　燃料が切れるわ！」

富嶽が生じさせた乱気流に揉まれながら、アリアがその主翼への接近を試みる。

その距離が――20mほどに近付いたところで、

「ありがとう、アリア。行ってくる」

俺は自分のベルトからYHSのハーネスに付いていたカラビナ・フックを外し、拳銃で繊維弾を放つ。見越し角を付けて、富嶽の右翼端へと。

1≒m経になっても0・2tの張力を誇る複相アラミド繊維が――しっかり滞空弾子・前進弾子間に張られ、アリアから切り離された俺は――気流を利用しながら、ワイヤーを辿って空を進んでいく。

そして――激しい回転受け身を取りつつ、翼の上面に飛び乗った。

振り返れば、YHSが燃料切れのアリアはイギリス国旗柄のパラシュートを広げて降下していく。地上では外務省たちに追跡されるんだろうが、後はアリアの地力を信じよう。

（……しかし……）

見れば見るほど、驚愕の超巨大爆撃機だな。富嶽。

プロペラの直径さえも、5m程あるぞ。それが左右に3発ずつ6発も並んでるんだから、壮観と言うより他にない。まさに、空に聳える黒金の城――だ。

だが、少し違和感を覚えたのは……まるで旧ソ連のK－7のように、翼が厚い点。

全幅や全長は計画値とほぼ同じに見えたが、この富嶽の翼厚は後世に伝えられた値よりブ厚い。これは、21世紀の最新素材で建造できるので設計から改めたんだろう。翼面にも炭素複合

材がコーティングされており、少なからずステルス性も持たせているようだ。
（……光学的に見つからないよう、わざと雲の中を飛んでいるな）
向こうの翼端が見えないほど視界が悪い中、俺は――
闇たちの姿を探してみるが、どこにも気配は無い。もう機内に入ったようだ。
ならば俺も、と思ってどこかに侵入口を開けようと思ったものの……すぐ、その必要が無い事に気づかされる。翼上の中ほどに、出入口と思われるハッチがあったのだ。
しかもそのハッチには、鍵が掛かっていない。レバーを回せば簡単に開き、機内からの温風がムワッと吹き出してくる。
侵入者に怯える必要の無い鬼たちには、鍵というものの必要性が分からないのかもだ。
そうして易々と降り立った、富嶽の主翼内は……廊下があった。床には、毛皮の絨毯も敷かれている。また、機内は与圧されており、暖房が効いてる。これは有り難いね。
最初は屈まないと通れないような通路だったが、胴体側へ進んでいくにつれ天井が高くなっていく。もう今は立てるぐらいだ。
そして驚いた事に、壁には扉――つまり、翼の中に部屋まであるぞ。
部屋は発動機を一つ一つ内側から制御するために造られたものと……それが無い空間に造られた、居住室だ。
（まるで基地がそのまま飛んでるみたいだな。畏れ入る）
ベレッタを手に、さらに翼の中を進むと……
「……定時報告……富嶽、二三〇〇……キノクニまで順調に飛行中……」
計器室と思われる小部屋から女――多分、鬼――の声が漏れ聞こえてきた。
紀伊国？　この富嶽は東に向かっている。三重県の方に飛んでいるとは思えないが……
それはそうと、無闇に深部に入り込むと鬼に取り囲まれかねないな。
今はまだ、闇や津羽鬼みたいな戦闘タイプの鬼が機内に何体いるのかも分からないんだ。
（まずは少し隠れて、敵情を視察しないと……）
そう思いつつ、俺は主翼に――人の気配のしない小部屋が2つ並んでいたので、右か、左か、ちょっと迷ってから――運試しするような思いで、右の扉に手を掛ける。
だがここで、俺の不幸スキルが発動。
やはり鍵が無く、簡単に入れた3畳敷きの室内には……
「……っ……！」
ちょっ、えっ、なんで、お前がここに？
「……っ！」
全く気配を立てずに……茹でたブロッコリーを食べていた向こうも、俺を見て藍銅色の目を見開いてる。
（颱風の、セーラ！）

日本の女子高の制服みたいな、ブレザーとチェックスカート姿の――
深皿を手にしたセーラが、床に体育座りしているぞ……！
コイツはロビン・フッドの子孫で魔女の血も引く、眷属の残党。風を操り、弓術と組み合わせたチート技で――俺は銃弾撃ちを攻略され、すんでの所で射殺されかけた。強敵だ。
だが今、孔雀の羽根をつけた矢入りの矢筒はドア側、つまり俺の側にある。
弓も分解して、チェック柄をしたトランクに収納しているようだ。
状況を認識した瞬間、俺の体は反射的に動いており――
「きゃっ……！」
声を上げかけたセーラの口を手で押さえ、拳銃を銀髪ロングのこめかみに突きつけて、後ろに回り込み、抱き寄せた。
「オランダでの貸しがあるとはいえ――いきなりの失礼、悪く思わないでくれ。セーラは賢い子だから、大きな声を出さない方がいい事は理解できると思う」
俺が耳元でそう囁くと、セーラは、
「……死んだはずの男。キンジ……」
レキよりは少し感情の籠もった、しかし抑揚には乏しい声で呻いた。
「そういう呼び方しないでくれるかな。確かにいっぺん死んだけど、今は生きてるんだし。で、何してるんだい」
こっちが悪役みたいな体勢で、俺がセーラに尋ねる。
セーラはサラサラの髪を揺らして少し振り返り、
「極東戦役（FEW）が終わったみたいだから、再就職した」
人間、銃口を頭に突きつけられれば素直になるもので、ちゃんと回答した。まあ、俺は銃口を頭に突きつけられても、なおかつ撃たれても素直じゃなかったけどね。
「なるほど。この黒雲もあの霧も、セーラが呼んだのか」
「そう」
確かに鬼たちは遠距離戦が出来なさそうだったから、弓手を雇ったのは理解できなくもないが……
「なんでまた、鬼の傭兵なんかになったんだい」
「金」
セーラは青いジト目で、シンプルかつ分かりやすい受け答え。
それはそうとこの子、密着してるから分かるんだけど……いいニオイだな。髪。ライムみたいな香りがする。ここでも少々、ヒステリア燃料を補給させてもらうとするか。
「失礼な事を訊くけど、セーラは……金に困ってるのかい？」
ついでにこの子を懐柔する糸口を掴もうと、俺はもう少し突っ込んだ話を聞いてみる。
「ちがう。でも金は幾らあっても足りない」

「あー……そういう考え方は感心しないな。吾唯知足と言ってね……」
「稼いだ金を貧しい人にあげるのがフッド家の生業。貧者がいなくなるまで、私の戦いに終わりはない。私はプロ。雇い主の人種や思想は問わない。1ポンドでも高く報酬を出す方に付くし、仕事ならたとえ貴族でも牧師でも射る。キンジは武偵。武偵も同じなはず」
「……それは、そうだね……」
説教しようとしたのに、年下に15秒で論破されちゃってるよ。俺。
ヒステリアモードでも、相変わらず女の子には弱いね。
「じゃあ……仮に俺がもっと払ったら、こっちに付いてくれるかな？　払うのはアリアになると思うけど、参考までに聞かせてくれ。おいくらだい」
「現金は信用しない。24金、99・99%以上の金地金。60kg」
「ろ、60kg……えっと、約2億円？　超一流のサッカー選手並みだね……ちょっとそれは、高いんじゃないかな……」
「世間の相場は無視。二つ返事で出さなければ即破断。あとキンジが仮に70kg出しても、依頼主を裏切る二重契約は受けない。信用は金より大事。私は裏切らない」
「……俺の弟は農業ができる。食べても食べきれない程の、上質なブロッコリー畑を作らせようか」
ぴく。セーラが一瞬、動いた。
「裏切らない」
「いま一瞬迷ったよね？」
「その話が本当かどうかの確認が取れていない。人の話は信じない。自分で見たものだけ信じる」
ともあれ……一連の発言から、セーラは……
独自のプロフェッショナリズムを持っている事が窺えるな。頑なだよ。狙撃手には多いタイプだけど。
「雇われてるのは、セーラだけかい？」
この子を寝返らせて味方に付ける事は、できなそうだ。
「……」
「答えて」
「うん」
良かった。妖刀・魔剣がセットでいたりしたら、手こずりそうだと思ったからな。
「――キンジ。キンジは私を放していい」
「どういう意味かな？」
「キンジを射る正式な命令を受けてない。私はプロ。命令に無いことはしない」
竜の港では、闇も同じような事を言っていた。

この辺のドライな性格も共鳴したんだろうな。セーラと鬼たちは。
「さっきセーラが俺を信じてくれなかったお返しじゃないけど、ごめん。信用できない」
そう言って、銃口をセーラの銀髪頭に据え直した俺だが――
……困った。
セーラを放せば、距離が開く。そうなれば弓が怖い。機内じゃ弓は使いづらいだろうが、その常識を覆してくるのが代表戦上だ。
なのでとりあえず、俺は――
セーラに銃を向けたままチェック柄のトランクに手を伸ばし、留め金をパチン、パチン、と開けてみる。
すると中には案の定、分解された長洋弓が入っており……単純な構造のベアボウらしくハンドルと上下のリムしかなかったので、俺はそのリムを片方取り上げておいた。
「ど……どうするつもり」
それを見たセーラは元々白い顔をもっと蒼白にさせて、青い眼を見開いてる。
「え？　捨てる」
敵の武器を破棄して武装解除させるのは至極当然の事なので、普通に答えた俺に……
「うわぁぁぁぁ」
セーラは拳銃を向けられてるというのに、涙ぐんで詰め寄ってきた。
そして、ぽかぽかぽか！
「かえせ。かえせ」
今度は赤くなって、アリアの１０００分の１ぐらいの威力のパンチを俺の胸に連打してくる。
さっきまでクールだったのに、いきなり超必死になってるよ。
この弓、よっぽど大事な物なのかな。
なんか……すごく……悪いことしてる気分になってきたんですけど。
「あー、じゃあ、こっちにする。これは使い捨てだし、また作れるんだろ」
泣いてるセーラがかわいそうになってきて、俺は弓の部品をトランクに戻し、矢筒から矢を全て抜きとる。
すると、セーラは……んむむむ……
元々への字気味の口を、１字にするぐらい不満そうな顔をしたが……
俺が細い窓をちょっと開けて、そこから矢を機外に捨てる事は看過してくれた。

「さて、と。セーラにはもう少し用があるんだけど、いいかな」
そう言って改めて向き直った俺に、セーラは今度はビックリしたような表情になり――壁際へと身を引く。
「へ、へンな事しようとしたら、噛みつく」
「違うよ。人質になってもらうんだ。はいバンザイして」
傭兵を人質に取ったところで、鬼たちはすぐ切り捨てるだろうが……人質がいないよりマシなはずだ。
そう考えた俺は、銃で誘導したセーラに手を挙げさせて――防弾服ではなさそうなので、「きゃ」とか言われながら背中に銃を突きつける。
そして……
「ああ、そうだ。もう一つ、教えてくれないかな」
「何」
「また俺に、死相は出てるかい？」
そんな質問をした俺に、セーラは――
「意地悪したから教えない」
銀髪を揺らして半分振り返り、アカンベーしてくるのだった。

人質を得て、主翼の廊下を進み……
富嶽の翼から胴体に入る扉の前に立つ。
扉の彫金の装飾が――また、独特だな。日本の浮世絵みたいな鬼が彫られているのに、彩色や背景はどことなくアフリカ調だ。
だがこれは、地獄の扉。この向こうにいるんだな。鬼たちが。
笑い声も漏れ聞こえてきているし、猛獣の檻みたいに危険なムードがあるよ。
拠点突入は対人の手順しか訓練を受けた事がないが、それに従うなら――セーラを盾にしつつ大声を上げて中に突入し、敵が事態を飲み込めていない内にまず人数、武装、位置関係を確認する……ってとこだな。
富嶽の胴部という想像しにくい空間だが、幾つかのパターンを想定してから――
俺は思いっきりドアを蹴り開け、セーラを突き出すようにして中に飛び込む。
「――動……っ！」
動くな！　と叫ぼうとしたのに、むんにゅりっ……！　と、顔面が何やら柔らかい物にめり込んで声が出なくなる。
（なんだこれ……ッ？）
銃を持ってない方の左手でそいつを掴んで、顔から引き離すと――
「……！」

む、む、胸じゃないすかこれッ……！　女性の！
それも、たいへん、でっかい……！
俺の顔の位置に胸がくるような、長身の、女の鬼といえば――
「？」
……思った通り……！
閻が、俺を心底フシギそうに見下ろしているのだ。まさに今。
なセーラー服姿で。
その右胸を、俺が思いっきり掴んでしまっているのだ。まさに今。
しかし失礼ながら、やっぱり閻は女性だったと思い知らされたね。
いくら体が筋肉質でも、女性の胸というのは柔らかいものだったんだな。ほぼ平坦でも柔らかな小山を持つアリアといい、女性の胸とは意地でも柔らかいものらしい。
「……遠山？」
「す、済まない！」
キョトンとしている閻から慌てて手を放し……気づけば、いつの間にかセーラは不在。
そのセーラが逃げていった先、この空間は――
富嶽の胴体の上半分をほぼ丸々使った、大広間になっている。操縦席までブチヌキで、強度を保つための柱が何本かあるだけだ。
足下にはアフリカ産と思われる苣で編まれ、緑・黄・赤でカラフルに着色された茣蓙のようなものが敷かれている。
「と、と、と、遠山ッ……！　き、貴様ッ……閻姉様に何たる羨……否、無礼を……！」
セーラを庇うように立ち、血走った眼で俺を睨んでいるのは――津羽鬼。
さっきと同じ黒セーラー服で、何やら怒りに肩を震わせながらキバを剥いている。
なお、俺によるボディタッチの被害に遭った閻姉様は……
「此は遠山っ。遠山ではないか。摩訶不思議な草摺を穿いたアリアと飛ぶのは見ていたが……まさかのまさか、富嶽に乗り移ってきていたとは。此は、豪儀な！　ワハハッ」
ばんばん、と俺の肩を叩いて……笑ってるし。
怒るかと思ったが、機嫌がいいカンジだぞ。
というのも、その理由はすぐに分かった。酒臭いのだ。閻は。そして、この広間は。
床にはキンキラのザブトンが幾つかあり、その周囲にはカラになったワンカップ大関や紙パックの大五郎が転がっている。朱色のでかい盃と共に。
あれは閻をはじめ、鬼たちが飲み散らかしたものだろう。
津羽鬼もウイスキーの瓶を脇に置いているし、他にも――もう1人、でかい甕に入って頭の上半分だけを出してるメガネの女鬼がいて……ソイツの甕の縁にもブランデーの瓶が載っている。

（酒盛り、してたのか……コイツら？）

複座の操縦席にいたパイロット・副パイと思われる双子らしき鬼も、女子中学生っぽいジャンパースカート姿で酒瓶を咥えて振り返っている。ひでえな、富嶽の飲酒運転だよ。

そして――奥には、覇美。

あのチビ鬼が、尾翼側に設置された大魔王の玉座みたいなのに座っている。

鬼の官女たちに傅かれた覇美は女児用セーラー服を着てふんぞり返り、大吟醸の樽酒をゴブゴブ飲んでいて……背後に斧と共に置かれた、巨大な地球儀を背もたれにしていた。

その地球儀に刺して掲げられた、交叉する2本の旗にそれぞれ描かれているものは――

崩し字にした『無』の一文字と……日本の、家紋……？

瓜の断面図みたいな、木瓜紋だ。だが通常の木瓜ではなく、五瓜。少し、珍しいな。

「御屋形様は着衣に数寄であられる。日本で市井の学生をご覧になり、お気に召されて、これらの学生服を我らに下賜あそばれた。だが、お前は……最初から着ておるな」

ニヤニヤ笑う閻は、俺の服を至近距離からジロジロ見回してくる。

「……え、閻姉様っ。男などに、麗しいご尊顔を近づける事……おやめ下さいっ。汚のう御座います」

何やらハラハラしたムードで、津羽鬼が向こうから俺を汚いもの呼ばわり。失礼な。

どうも、鬼どもの頭の中は読めないままだが……

連中には酒が入っており、比較的リラックスしたムードのようだ。すぐに取り囲まれて畳まれるムードでもない。そこは、ツイてた。

それに、コイツら全員と俺1人でドンパチやるのは得策ではない。

オランダとコンビニで小手調べも済んでいるから分かるが、ヒステリアモードでも閻とマトモにぶつかれば3回に2回、津羽鬼となら3回に1回は負けるだろう。

2人を分断できても予測勝率は22％強、同時に来られたらそれは絶望的な数値に変わる。さらに周囲には他の鬼もいるし、大将・覇美も侮れない。小さいからってナメてかかると痛い目を見るのは、孫で経験済みだしな。

なので俺は、この和やかなムードが保たれている内にと――

「覇美。ちょっと、君を叱りに来たよ」

――ヤツらが持っている最も重要なアイテムを、交渉で取り返せないものか試みる。

「んゅ？」

言葉がちゃんと通じるかどうかすら怪しい、覇美ちゃんは……

生花で飾り付けた赤銅色の髪をわしゃわしゃ掻いて、こっちを見る。酔った目で。

「いただけないな。女性が身につけているものを剥ぎ取って、逃げるのは」

「なにのことか。覇美、分からぬ」

応、日本語は通じているんだな。覇美は言葉がヘタなだけらしい。

「――アリアの殻金の事だよ。覚えているだろう？　去年の10月1日、東京の空き地島で君はそれをアリアから盗んだ」

「んー」

斜め上を見て、チェリーピンクの唇に人差し指をあて、考える仕草をした覇美は……

「おー！」

思い出したらしい。笑顔でキバを剥いて、こっちに向き直ったよ。

「いいかい覇美。アリアは俺のものだ。つまりアリアの一部も当然、俺のものだ。だから俺のものを持ち逃げしたんだよ、覇美は」

これは交渉なので、あくまで対等な素振りで話す俺に――

――スッ、と、青光りする丁子刃の日本刀が添えられた。その瞬間まで気づかないほど、素早く。

「無礼講の宴席とはいえ、頭が高い。第六天魔王・覇美様の御前だぞ。控えおろう」

いつの間にか、津羽鬼が――俺と閻の間に割り込むように立って、抜刀している。

だがこの程度の脅しは武偵高では日常茶飯事。ペースを崩される俺じゃない。ナントカ大魔王？　とかいう暴走族みたいな肩書きも、陳腐なもんだ。

「あー、キンジ！　つまり、なにか？」

と、覇美も俺に言葉を促すので、

「殻金を返せ」

俺はこっちの要求をまず、突きつけた。

すると……それまで覇美を羽根扇で扇いだり手足を揉んだりしていた鬼の官女たちが、ちょっと顔をこわばらせる。

彼女たち4人は閻や津羽鬼と違い、戦闘タイプの鬼ではなさそうなものの……

それぞれ、覇美を守るような位置にさりげなく身を寄せていく。

「遠山。それは覇美様の腹中、鬼袋にある。今の物言い、覇美様に危害を加えようという意味か」

閻もハスキーボイスを低くして、機嫌を損ねた調子になるが……

こっちも必要なものを目の前にして、おいそれと帰るワケにもいかない。

それに閻は今、いい情報をくれたな。殻金は、覇美の腹の中か。

すぐ退かないで押した甲斐があった。たとえすぐ結果が出なくても、交渉事とは押せば押すほど核心に迫った情報が手に入るものだからな。

「鬼袋か池袋か知らないが、吐き出せばいいだろ。あれは食べ物じゃないんだ」

俺が魔王様を前にそんな事を言うと――

「――覇美様。討伐ご下命を。此奴の振る舞い、度を超しておりますゆえ」

先生にチクる生徒みたいな感じで、津羽鬼が覇美にそんな事を願い出る。
「あー。じゃあ、閻、闘え。津羽鬼が闘うは、あんまり見えない。覇美おもしろくない」
覇美はそんな指令をし、津羽鬼ではなく閻をご指名してきた。
「――御意」
閻は短く返し、さっきまでの酔ったムードを収める。
「閻姉様……」
「津羽鬼、下がれ。お前が遠山と闘えば、ややもすると傷つくやもしれぬ。我は僅かとてお前が傷つく様は見たくないのだ」
閻はそんな事を言って、津羽鬼にイケメン顔を向ける。
覇美は手をパンパン叩き、足をバタバタやって閻をけしかけている。
「よし！　よし！　閻、闘え。遠山の頭、とれ。髑髏、盃にする。あははっ！」
近くで見れば見るほど、覇美は……
扱いづらそうな相手だな。理子やジャンヌ、ブラドやヒルダ、パトラ、シャーロック、ココ、ジーサード……どれとも違う、全くの異文化・異種族の敵だ。考えが、読めない。
最終的な目標は、あくまで殻金の奪取だが……
（あれから取り返すのは、一筋縄じゃいかなそうだ）
だが今は、覇美よりも眼前の閻をなんとかしよう。コンビニ強盗の主犯にオシオキするためにもな。
どうあれ1対1で敵の戦力を減らすチャンスを貰えたのは、ありがたい事だし。
閻を倒せたとして、その後どうするかは――流れ次第だ。
「――富嶽から落ちた方、負け！」
鬼のようなルールを、鬼の覇美が楽しそうに言い放ってくる。
計画性ないなあ。落としたら俺の髑髏で盃が作れないじゃんか。作られても困るけど。
「分かった。受けて立とう。その代わり、俺が勝ったら殻金を返してもらうよ」
勝ってもスンナリ返してもらえるとは思ってないものの、一応そんな都合のいい条件を一方的に突きつけて――
俺は、最初っから完全に間合いに入っている閻に向き直り、見上げる。
格闘ゲームのキャラみたいな感じで、意外とセーラー服も似合ってる閻は――
でかい。何度見ても。ツノを含めれば、190ぐらいあるな。
「――汝の望みも、強ければ叶おうぞ。世は力、也や」
あくまで殻金を欲しがる俺に、閻はシンプルにそう言い放つ。
力こそ全て論者か。ヒルダと自分は違うような事を言ってたが、そのポリシーは鬼同上同じだ

な。

俺を睨み下ろす閻と、閻を睨み上げる俺。

視殺戦を挑まれると――

おー、怖いね。さすがは鬼だ。

と思ってたら、閻は何かにピンと来たように片眉を上げた。

「誰ぞに似ておると思えば、摂津守殿の面影が……いや、よく似ておるな。瓜二つだ」

「摂津守？」

「我が祖・酒呑様の仇、清和源氏の頼光殿よ。ふむ……遠山よ。汝は遠山金四郎景元殿の胤裔か？」

「……ああ。景元は、うちのご先祖様だけど？」

「ワハハッ、道理で。加藤氏には頼義殿を挟んで、頼光殿の子が密かに渡されておったのやもしれぬの」

何やら1人で面白がってる、閻だが……いま彼女が言った『加藤氏』の……加藤景員という武将は、平安末期から鎌倉初期にいた遠山家の先祖だ。景員が源氏に味方して戦っていたのは知っていたが、その辺に縁戚もあったような意味の事を言ってるのかな。

「頼光公も酒呑様や土蜘蛛を討ったものだが、汝も竜悴公姫や九龍猿王を討った剛の者。其の宿命、千年隔世して生じたとみられる。それと相まみえるとは、縁は異な物よ」

ニィ……と、嬉しそうに嗤う閻に――

「親は2人、祖父母は4人。その前は8、16、32、64――祖先は、冪乗的に増えていく。千年も遡れば天文学的な人数だ。その中の誰かが君の祖先の仇だったとしても、どうでもよくないか。やった方が言うのも何だけど」

「否。言わばこれは、親の仇討ちよ。なあ皆の衆」

閻が周囲の鬼たちに言うと、鬼たちは――「応！」「おぅ！」などと叫んで酒瓶で机を叩いたり足を踏みならして、騒音を立てている。

なんか、これでこの場における俺の悪役ムードは確定した感じだ。

セーラまで場の空気を読んでジト目でブーイングしてきてるし。お前関係ないだろ。

「――鬼にも様々な種があるが、我らの一族は人のように婚姻をせぬ。従って、誰が誰の親という物の考え方もせぬ。先に生じれば皆が祖、後に生じれば皆が子。人に喩えれば、我らは親同士が戦った因縁の敵のようなものよ」

「えーと……生物学的・文化学的な興味から一応聞いておきたいんだが、閻たちの一族はどうやって子孫を残してるんだ？　なんか、みんな女性に見えるんだけど……」

「当世、我ら緋鬼は生まれた時みな女性。鬼も十八と人は言うが、十八歳を過ぎれば鬼はそれより老いる事は無く――長大な差のある個々の寿命の晩年期に、特に戦に強い鬼だけ性が変わり、他の多くと子を残して死んでいくのだ」

……す、すげえ。雌性先熟の種なのか。

だが、それは生物界で間々見られる生存戦略だ。生物の授業で習ったのは魚だったが、ベラやブダイ、トラギスなんかに見られる。

姿形から見て、人間から分化した種なんだろうが……

どうりで、強いと思ったぜ。

今の話によれば、後で男になって子孫を残せる鬼は、戦闘力の高い個体だけ。

強い遺伝子だけが篩に掛けられて残り、それが何代も続けば――後の世代は、どんどん強くなる。気がつけば強キャラだらけの一族になってるってシステムだ。

酒呑とやらが閻の親なのかどうかは閻本人も定かではないらしいが、閻のように長命な者もおり、かつ、乱婚する鬼の文化では――誰が誰の親か分からない以上、祖先はみんな親みたいなものとして敬う。

頼光って人がそれを斬ったなら、その子孫と目される俺ＶＳ閻の対決は、人間の文化に翻訳すると『親子二代に亘る宿命の対決』って事になるのだ。彼女らの文化だと。

「我はあの時分に数えで五つの子鬼なれど、ずしん、と、閻は俺に詰め寄ってきて――距離を、ほとんどゼロにしてきた。

そして胸を張り、手を腰に当て、勇ましく立ちはだかるような厳ついポーズを取る。

「頼光殿は門外不出の奥義を二つ用いて、酒呑様を殺めておってな」

「じゃあ門外不出じゃなかったんだろ。見られても閻がほっとかれたんだから」

俺はほとんど真上を見るような感じで、閻とのメンチ切りを続ける。

「否。頼光殿は、技を見た我を捕らえたが――幼子と分かって、見逃したのだ」

ふーん。鬼を斬るぐらいの超人なのに、頼光って人も人の子だな。

子供の鬼は逃がしたのか。おかげで21世紀の俺は大迷惑だよ。

「人如きに助命されたは、生涯の恥。その恥、今宵雪ぐ」

金棒――金剛六角は今、閻の手元に無い。

酒を呑んでいた座の脇に放られてある。

俺がその辺を確認し終えた時、

「おい。閻。早う」

酒を呑みながらの覇美が、せっついて――

「御意」

一言返した閻が、

「――『羅刹』」

言うや否や――ズッッッッッン――！

ノーモーションからの、掌底を叩き込んできた。
俺の胸の中心・中央に、掌がメリ込むように、極めて深く。
それは初めての、閻の、本気の一撃。
あまりの速度と威力に、橘花の対応が不十分になった――俺は――
（――うッ――！）
――その瞬間、自分の心臓が停止している事に気づく。
――肺もだ。
心肺、共に、停止してる。
たった一撃で、俺は立ったまま――
……突然死したのだ……！
（……ッ……！）
――バツンッ――！
咄嗟の『回天』による、除細動が間に合い――
……ッ……
「――はあっ！　……はっ、はっ……」
後ろに倒れかけて一歩退がってしまいつつ、俺はオランダで死んだ時と同じ技で心臓の鼓動を取り戻させた。続けて、呼吸も自然に戻る。
あ、危なかった。
一瞬とはいえ、また殺されたぞ。
今のは……まさに一撃必殺の打撃。
野球の練習中などで胸に打球が当たって突然死してしまう子供がいるが、人間の心臓は特定の角度・範囲・威力で非穿通性の衝撃を与えられると――震動によって『心臓震盪』という致死的不整脈を起こし、急停止してしまう。
――『羅刹』は、それを意図的に起こす殴打技。
さらに余剰のエネルギーで横隔膜震盪も起こさせ、呼吸も止める。
シンプルに言えば、『敵の心肺を止める技』なのだ。
見た目は荒々しかったが、その実、かなり器用な――文字通りの、必殺技。
だが俺も、死ぬのは初めてじゃない。
必殺技を喰らって殺されようと、生き返ればどうということはない。格ゲーのキャラも、必殺技を当てられたぐらいで一々ゲームオーバーにはならないしな。
と、もはやゲームキャラなんぞと比較せざるを得ない自分に嫌気が差しつつも……
俺は自分が、今のでヒステリア・アゴニザンテを獲得している事を感じ取る。
閻。殺したのがアダになったな。遠山キンジは殺せば殺すほど強化されて甦る。だからこれ以上殺さない方がいいぞ。

俺が生き返った事に目を丸くした閻の方へ、俺は後退した1歩を前進し直して――

「――羅刹ッ――！」

ヒステリアモードの眼で捉えていた今の技を、見様見真似で放つ。無警告で。

――ズッッッッン――！

と、右の掌底を閻の胸骨下から心臓めがけて潜り込ませたが……

この、感触。

人間の肉体を叩いたものとは全く違う。

まるで鉱山で使われるマンモス・トラックの巨大なタイヤを叩いたかのような、硬さ、重さ。

鬼は筋繊維の密集度合いが人間の比じゃないんだ。乳房は柔らかかったのに。

多分ダメだろうなと思って打った通り、俺の羅刹は筋肉の鎧に守られた閻の心肺を停止させるには至らず――

「――ん、むッ……」

閻は胃から上がってきたらしい酒を吐かないよう、口を一文字に閉じて……1歩、2歩、後退した。

その光景に、わぁ！　閻姉様！　と、機内の鬼たち――爆笑している覇美以外――が、驚きの声を上げた。津羽鬼は立てた両手で口を覆って、悲鳴まで上げてるよ。

それだけ、本気の閻が押される姿は珍しいものなのだろう。

「何を驚いてるんだ。後退ぐらい、誰でもするだろ」

閻を睨み付けながら、慌てる鬼たちをバカにするように嘯いた俺だが――

今の俺の羅刹は、失敗だ。閻を心肺停止どころかゲロすら吐かせられなかったし。

だんっ、と踏みとどまった閻は……

「やるな」

「閻もね」

とりあえず、そんな短い会話を俺と交わす。

「……今の羅刹こそが、酒呑様を討った頼光殿の技の一つよ。遠山に伝わっておったか」

「いや、俺は教わってない。やっぱり俺は、その人の子孫じゃないんじゃないか？」

俺は1歩、閻は2歩後退したんだから、技を1つ持ち逃げする形で、もうこの辺で判定勝ちとかにしてもらいたいんだが……

そうはさせてくれなさそうだな。改めて仁王立ちした閻、ピンピンしてるし。応援する鬼たちもヤンヤヤンヤと盛り上がっちゃってるし。

それにこの技は人間相手には使えない、無用技だよ。武偵法の都合上。

どうせならもう1つの技も見せてもらってから、勝ちをせがもう。

「――次は殺すように羅刹を打つ事もできるよ。必要なのは威力の調整だけみたいだ」

これはブラフで、羅刹で閻を倒す事はできなさそうなのだが……脅しでそう言うと、

「我は死を怖れぬ。地獄にも鬼はいるそうなのでな」
脅しが脅しにならない。
「あっそう。じゃあゴメン、今のはハッタリだよ。女性を手に掛けたくはないし」
「我も本来、殺生は好まぬ。地獄の鬼の仕事を増やしてしまうのでな。だが、汝は別よ。鬼籍に送れば、向こうも喜ぼう」
あーあ。
とうとう、地獄＝異世界にスカウトされちゃったよ。
元から暗い顔を一層暗くした俺の前で、閻が――
「では……あの海での決着、この空でつけようぞ……」
拾ってきて、右手一本で脇構えに構えたな。金棒・金剛六角を。
さらに指を鉤爪形に広げた左手はワイドに構え、ツノをこっちに向け、口元ではキバを剥き出しにしている。
それは例の、人間の格闘技とは掛け離れた構え――
ツメによる引き裂き・キバによる噛みつき・ツノによる刺突を用いる事を前提とした、鬼の格闘戦の構えだ。
対する俺は、奥の手のデザートイーグルをショルダーホルスターから抜く。
停戦で眷属から返還されたこの自動拳銃は、拳銃用一般弾薬の中で最強の.50AE弾を使用する。平賀さんの手によりダブルアクション／シングルアクション併用銃に改造してあり、装弾数は7発だがそれをフルオート射撃もできる。奇しくも『鬼検事』の二つ名を持つ――父さんの形見の、チート銃だ。
だが、相手はそもそも存在がチートの鬼。ハンターが銃を持ってようやく象やヒグマと互角に戦えるのと同じで、『鬼に金棒』の閻には銃が卑怯という意識は湧かないよ。
――ダンッ！　床を凹ませる勢いで踏み、飛びかかってきた閻を――
ドドドドドドッッッ！　機内を震わす轟音と共に、.50AE弾の斉射で迎え撃つ。
閻はそれを金棒で防ぎ、あるいは躱したが、掴み取りはしない。
俺は跳弾がピンボールのように機内を跳ね返る中、体勢を崩した閻の首めがけ――
――ガスンッッッッッ！
アフリカに源流を持つとも言われる格闘技・カポエイラのヘリコプター蹴り――人体が最も大きな破壊力を生じさせられる技の一つ、片手逆立ち回転蹴りを見舞った。
力には力で対抗しようと、カウンターで叩き入れた一撃は――それでも――ダメだ。
体重差もあるが、何より筋力負けしている。
いくらキレイに入ってもネコの蹴りじゃトラを倒せないのと同じだ。人と鬼の体力には、それほどの格差がある。

大口径弾を弾倉1本分使って、絶好のチャンスを作ったが……フイにしちまったな。
対する閻は、ガギィッ！　大型工具のような音を上げて、俺の足を噛みにきた。
スレスレで躱したが、噛まれていれば今ごろ俺の脛は骨ごと喰いちぎられてたな。
続けて、ブンッ！　と、猛牛のように振るわれた頭部――今度は、ツノだ。狙いは同じ、俺の
足。ヒステリアモードの俺には素早さで劣る閻が、機動力を封じにきたか。
それも躱すが、俺は閻の手足の射程圏内で着地せざるを得ない。
「――フハハッ！　侍の肉、喰わせてみろッ！」
さらに追撃の、噛みつき――ッ！　ガギンッ！
獅子舞のような咬合の連撃、続けて、ツルハシのようなツノ、刃物のようなツメ……！
回避一辺倒になった俺の前で、一発もらえば致命傷は間違いない四連撃が空を切る。
俺の格闘術が対人戦闘の枠から出られていない事を悟った閻は、積極的に鬼の固有技を使って
きているのだ。大振りにならざるを得ない金棒は、まだ使ってこない。俺の動きを封じてから、
トドメに叩き込んでくるつもりか。
閻の作戦が読めても、俺は――
回避、後退、回避を繰り返さざるを得ない。
反撃のタイミングが、掴めない。
（――目ッ……！）
破れかぶれで眼球狙いの右二本貫手を放とうとしたが、ダメだ――この右腕は閻が俺の頸動
脈を狙ってきたツメを防ぐために、掛け受けに回さざるを得ない。
ガツッ！　と閻の腕を反射的に受けた、俺の右腕を――ガブウゥゥウウゥゥウッ！
――しまったッ……！
噛ま、れたッ……！
人が格闘技の技を瞬時に出せるのは、体が覚えている技記憶の再生だから。その記憶に、鬼に
対抗する前提は含まれていない。
それで、俺はつい――自分の腕で鬼の腕を受けるという、過ちを犯してしまったのだ。
「……ッ！」
「……？」
袖の中に着装していたオロチ改を噛んだ閻は『中に甲冑を着込んでいたか』と気づいたようだ
が……それでも構わず、みしっ、みしみしッ……！　ワニに匹敵する咬合力でそのまま腕を噛み
ちぎろうとしてくる。
窒化チタンを焼結させた炭化タングステン＝コバルト超硬合金にさえ――そのキバは、突き立
っている。閻の顎が生み出す咬合圧は、まさに重機。このままでは破砕されるのは時間の問題だ
ぞ。早く手を打たないと――

——だが、先に次の手を打ってきたのは、闇。

「……！」

がしいっ！　と、俺の左前腕を掴んできたのだ。

左腕のオロチに、闇のツメが食い込む。メキッ、メキメキッ……という音から分かるが、闇は握力でもコバルト合金を粉砕できるぞ。まずいッ……！

噛みつきと左手のツメで両腕をホールドされた俺に対し、闇は——

——右腕が、まるまるフリー。その手には、金剛六角が……クソッ——来るッ！

ドオオオオオオオオオオオンッ！

ティーガーIの88㎜砲のような爆音と共に振り払われた金棒に、俺は——

視界の上下すら分からなくなる程、思いっきりフッ飛ばされる。後方へ。

「——っ！」

ガカァンッ！　という音に続いて、気流に揉みくちゃにされている体感——バンッ、と這うような体勢でしがみついた足下は——暗緑色の鋼板。息が——急に、し辛くなる。

ハッと気づくと、俺のすぐ横では巨大なプロペラが轟音を立てて回っている。

俺は金棒で野球ボールみたいに打たれて、機体の胴の壁を破り、いま、右主翼上にいるのだ。

腕は、腕は……だ、大丈夫だ。オロチ改はズタズタだが、両腕とも繋がってる。

そう気づくまでに、数瞬の朦朧があって——

ぐらりっ、と、大船のような翼が傾斜した。俺を振り落とすためらしく、右へ。大きく。

（……くッ……！）

プロペラの生じさせる気流に加え、傾斜が——俺を、ズルッ、と滑降させる。

お盆の上のビー玉みたいに転がった俺は、しかし富嶽の主翼が巨大だったおかげで……なんとか靴のスパイクで体を止める事ができ、転落せずに済んだ。

鬼の操縦は乱暴で、旋回は失速に繋がりかねないほど極端に機体を傾けるものだ。翼は大きくたわみ、ギシッ……ギギッ……と、各所から軋み音を立てている。

しかもここは、雲の中。地上や星も見えないし。

三半規管がおかしくなり、平衡感覚が怪しくなっていく。

だが……

（空は——ジーサードのガリオン、カツェのツェッペリン号で慣れてる。むしろ、ここに闇を引きずり出すんだ……！）

そう思って翼にしがみついて粘っていると、

がしんっ、と、闇は裸足の爪を立てて出てきた。目論見通り……

俺が打ち出されて開いた機体の穴から、主翼へ。

「素直に言えば、驚いたぞ。あの羅刹でも死なず、この金剛六角でも死なぬとはな」

いや死にましたから！　今も死にそうですから！

と言いたいところだが、羅刹も金棒もまたやられたくはないので俺は苦笑いだけ返す。
突き立てた足の指で鋼板を掴むようにして、一歩一歩、翼の上を迫ってくる閻……
その姿を、機内からは鬼たちがハラハラした表情で見て応援している。覇美だけは酒を手にニヤニヤ眺めているけどな。
「だが、所詮は人よ。手応え、口ほどにもない。失望したぞ」
「そう思うかい。だとしたらゴメン。手を、抜いてた。女性相手だと、ちょっとね」
俺は乱気流に揉まれながら、傾斜した翼の上で立ち上がる。
「ほう……それは、それは」
閻は、ちょっと笑い……
「遠慮は無用ぞ。全力で来い」
ホームラン予告のように、金剛六角を突き出して見せてきた。
まあ、力比べじゃさすがに敵わなかったけど……
ここからは、知恵くらべ、技くらべといこうか。
その戦い方や言動からも分かる通り——閻は、自信過剰。そして実直、悪く言えばバカ正直なパーソナリティーをしているようだ。
なので、隙は見せやすいタイプだろう。
その辺を前提に、シンプルな作戦を立てた俺は……閻との間にもっと距離が欲しかったので、弾倉再装填済みのデザートイーグルを発砲しつつ、翼端側へと後退する。
弾丸を金棒や手で止めるし閻を、それで足止めして……
まっすぐ下がっているつもりでも気流に流されてナナメに移動してしまったが、よし。距離は十分だ。
と、俺は……ザッ、ザッ。
左膝を前に突き出し、さっき噛まれかけた右足を後ろに引く。
両腕は中段の右拳を大きく引き、それを視覚的に隠すように左の開手を前に出す。
最後に体を前に撓ませ、眼では閻を見据える——
この占い短距離走の構えのような体勢は、あのガリオンの翼の上でジーサードが見せた『流星』の構え。即ち、『桜花』の構えだ。
オロチ改は半壊しているが、桜花1発分ぐらいは持つだろう。
これが突進技の構えだ、という事までは閻も分かったようだが……その次の瞬間に俺が取った行動までは、先読みできていなかった。
俺は眉を寄せて、機首側ナナメ上を見たのだ。わざと、閻から目を逸らして。
だが、そっちには何もない。
ただ渦を巻いて流れる雲があるだけだ。
こんな、武藤かアリアでなければ引っかからなそうな視線誘導に……

「……？」

単純な閻は、簡単に引っかかってくれた。

俺につられて、顔をナナメ上の空へ向けている。

その隙を突いて――シャッ！　と右手のオロチ改から手甲を飛び出させた俺は――

ダンッ！　右翼を震動させるスタートダッシュを切って、桜花への速度を作り始める。

広い翼の上、この助走距離なら十分だ。超音速の一撃、言うなれば真桜花を打てる。

閻は騙された事に気づいてハッとこっちに向き直ったが、もう避けられない。

走り出した桜花は止まらない。一直線に、お前に突き刺さる。

ヒステリアモードが駆動させる骨格・筋肉連動による疾走は、もう俺自身にも止められないのだ。

避けるヒマもなく、反撃するヒマもないと気づいた閻は――

金棒を、棒術のように構えた。それしかできない。

だが、コンマゼロ数秒の世界で――俺は、気づく。

（バランスを……取った？）

閻の身体は今、その重心を中心・中央に据えている。

その構えは――

（――絶牢――!?）

聞くまでもない。

頼光が酒呑を討った際に使った門外不出の奥義、そのもう1つは……

遠山家にも伝わる絶対のカウンター技、『絶牢』だったのだ！

ダメだ。

このままでは、あのガリオンの翼の上と同じ――

まさに、ジーサード戦の再現になってしまう。

あの時は流星を打ってきたのがジーサード、絶牢でそれを返したのが俺だった。

だが、いま桜花を打とうとしている俺の立場はあの時とまるっきり逆。

絶牢で俺を殺すための撃力を、自分で作り出してしまったところだ。しかもそれをもう、キャンセルできないッ！　桜花は止められないんだ！　どうするッ――！

（――桜花ッ――）

突き出した腕の先、指まで延伸したオロチ改の装甲表面から、パァッ――

桜の花がその命を終える時に散らす、花びらのような円錐水蒸気が乱舞して――

――バアアアアアアアッ――！

衝突した俺のオロチと閻の金剛六角が激しい火花を散らし、2人の中間に太陽が生じたかのような閃光がスパークする。ガガガガッガリガリガリッ――と俺の桜花が金剛六角を削ぎ、ヘシ折りながら――左へと、押し流していく。

鉱炉から迸るような火の粉で黄金柱石色の瞳を輝かせて、閻が……ヒステリアモードが見せるスーパースローの世界で、舞いの動作のごとくスピンしていく。回転扉のように。

……やはり、絶牢……！

回転、90度――横向きになった閻は流麗な動作で全身を旋回させつつ、破壊された金剛六角を手放す。体は若干、宙に浮かせた。

回転、１２０度――分かった。返してくるのは、曲げて力を溜めた、右足――！　閻は空中で１８０度回って、跳び後ろ回し蹴りを俺に叩き込むつもりなのだ。

桜花の威力を丸々得た反撃のローリングソバットが、俺に迫る。

それは桜花の蹴りだ。俺には躱すことができない。絶対、当てられる。

全ての威力を、丸々、この身のどこかに……くらう。絶対に！

回転、１５０度。蹴りのモーションに入って伸びてくる閻の右足、その軌跡が見えた。狙いは、俺の頭部。上３分の１。当たればそこから上が脳ごと削ぎ飛ぶ。

閻は俺の頭蓋骨を削ぎ飛ばすつもりだ。盃のような形に。

「――ッ――！」

回転ッ、１８０度！

大きな閻の裸足が、俺の額に激突した瞬間――

（――『絶牢』ッ！）

俺は閻の絶牢を、絶牢で返す。

頭部で受けた勢いを、その場跳びバック宙からの――後方宙返り蹴りに移す――！

その間隙で閻は３００度以上を回転しており、ほぼ俺に正対している。

――閻。

この桜花の力は、元々俺の力だ。返してもらったぞ！

――ッツッパアアアアンッッッッッ――！

俺の蹴り上げが、格闘戦で俺を悩ませ続けた閻のツノを片方蹴り折った。若干の橘花を交えた、亜音速の威力で。

これは絶牢を絶牢で返す、二重カウンター技。名付けて『絶花』。桜花で始まり橘花で終わる、花を使い果たして敵を絶やす――俺の新技だ。

「――あッ――！」

女の声を上げて大きくのけぞった閻は、どうやら固い皮膚で覆われていたらしいツノの折れ目から鮮血を飛び散らせ――

インパクトの衝撃で、俺とは離れ離れになりつつ……初めて、ダウンした。

閻は激痛に顔を歪めて額を押さえたまま、巨大なプロペラの生じる気流に押し流されて富嶽の主翼を転がっていく。そしてフラップにバウンドして、

「闇姉様ぁーッ！」

機体の胴から身を乗り出した津羽鬼が叫ぶ中、落ちたッ。富嶽から。

俺も富嶽の翼から落ちかけるところまで転がったが、そこで踏みとどまり――

「――闇、掴まれッ！」

パァンッ！

闇が倒れた瞬間にクイックドロー・コンバットロードしていた拳銃の繊維弾を撃つ。

すかさず、俺が滞空弾子を掴む。強靱な化繊のワイヤーを伸ばしつつ、前進弾子が闇を追う。

間に合う。主翼の直後の虚空で目を見開いた闇も、それが命綱と理解し……掴んだ。

だが。

「――フンっ！」

闇は勢いよく、それを引っぱったのだ。綱引きのように。

死なば諸共、ということなのか。俺を道連れに死ぬつもりなのか。闇はッ――

その動きは全く予想していなかった俺が、靴のスパイクを翼に刺し損ねて……

（……ッ！）

一気に、転げ落ちる。

富嶽の、翼から。

「フハハッ……ハハハハハーッ！」

闇は高笑いして前進弾子を放し、一切の保持を失った俺ともども富嶽から離れていく。

後方に吹き流れる気流にグルグルと巻かれて、俺たちは洗濯機の中の服のように雲間を転落していく。

風の中、闇の中で――闇は、もう見えない。どこかへ吹き飛ばされていってしまった。

「――っ……！」

眼下は、東京だ。

飛行時間から考えて千葉や太平洋の上空辺りまで来ていてもおかしくなかったが、俺を振り落とすために富嶽がメチャクチャな旋回をしたせいで戻ってきていたのだろう。

自由落下する俺の速度は、文字通り加速度的に増加していく。

その体感速度は、時速２００km程で安定していき――

（アリアと一緒にＩＣＢＭから落ちた時も、このぐらいまで加速したもんだぜ……！）

スカイダイビングみたいな姿勢で東京……文京区あたりめがけて落ちていく俺は、風にジャマされながらもまたベレッタに弾を籠める。

そして――グーグルマップを拡大していくように、深夜の後楽園が下から迫り――

落ちるのも慣れてる俺は、腰ダメに構えた銃から、バスンッ！

買ってて良かった、平賀さんお手製の空嚢弾を発砲する。地上の何だかよく分からない薄暗い施設にそれが着弾し、ばんっ！　と長径１m、短径０・８mのエアバッグを広げた瞬間、その上

に身を丸めて、ぼすっ！　べちっ！
「――痛ってぇ……！」
これ、超高強度シリコン樹脂のエアバッグ……38tまで耐えられるとか言ってたけど、誇大広告だったな。けっこう地上に全身を強打したんですけど。後でクレームするぞ。
とはいえ、おかげでなんとか死なずに済んだ俺が、フラ……と、立ち上がると。
――キャーッ！
という、女性たちの甲高い声が四方八方から聞こえてくる。
「……っ……！」
見回せば、これはどういう事だ？
妙に湿度が高くて温暖なこの空間には、ハダカ、ハダカ、ハダカ……っ……
一糸まとわぬ女性たちによって織りなされた、肌色世界が広がってる。
生き延びたと思ったが、どうやら俺は死んで天国に――いや、ヒステリア地獄に堕ちたらしい。
とも思ったが、なんかおかしい。ＯＬの団体さんらしいお姉さんたちは悲鳴を上げて、蜘蛛の子を散らすように逃げていく。周囲にはライトアップされた大小のお風呂もある。
ここは……スパ・ラクーア……！
後楽園に併設されたスパ施設、一種のスーパー銭湯だ。
どうやら俺は、そこの露天風呂ゾーンに落ちたらしい。
たまたまとはいえ、なんという悪運。ていうか最近スーパー銭湯付いてるな、俺。
そう思ってクールに溜息をついた俺の脳天を、がこーん！
えらい太ったＯＬさんが風呂オケで強打して、ドシドシと走り去っていくのだった。
さすがの閻も、雲の上から落ちたんじゃ助かるまい。
空でその姿を見失ったとはいえ、俺よりやや南に落ちた墜落音は聞こえていたので……壁をよじ登って露天風呂を緊急脱出した俺は、東京ドームシティ・アトラクションズへと向かう。
素知らぬ顔で武偵免許を提示して閉園後の遊園地に入り……亡骸を見つけたら念仏でも唱えてやろうと思って、閻を探す。
すると、遊具があれこれあるゾーンの地面にちょっとしたクレーターが出来ており――その真ん中で、閻が腕組みして空を見上げていた。おそらく、富嶽の飛んで行った方を。
えーっと……
パラシュートとか、そういった物は見当たらないんだけど……普通に、着地できたのね。
じゃあ富嶽の翼から落ちた時も、助ける必要なかったんだな。
だがまあ、結果オーライだ。
富嶽に残ってたらどうせ鬼どもから袋叩きにされてただろうし。俺。

「――富嶽から落ちた方が負け。覇美のルールでは、そうなっていたよね。閻。2人とも落ちたから、引き分けって事でいいかい」

そう声を掛けた俺に、閻が振り向く。

だがツノを片方失ったその顔は、もう攻撃的なものではなくなっていた。

「たいした……益荒男よ。汝のような男子がおる限り、まだ日の本も安泰なりや」

声にも、俺に対する少しの敬意が感じられるようになっている。

世は力――力こそ全て、と言っていた閻は、俺と力比べで引き分けた事で、俺を自分と対等な存在として認めてくれたのかもしれないな。

「閻。さっきの技。あれは絶牢か？」

「その通り。絶牢こそ、頼光殿が酒呑様の御手をいなした技よ」

……じゃあ、やっぱりホントにご先祖様だったのかもな。その人。

羅刹の方は歴史のどこかで封印技にされたか、兄さんが持ってるかだ。

これは俺が爺ちゃんと父さんの話を盗み聞きした事だから、兄さんは知らないが――

父さんは自分が１００会得していた遠山家の秘技を、兄弟それぞれの性格に応じて……攻撃寄りな48の技を兄さんに、防御・交叉法寄りな52の技を俺に、分配して継承する形で教えているからな。

「ところで……落ちたのはわざとだろう、閻？　閻は俺が飛び降りて追ってくるか、閻を助けようとするとも読んでいた」

俺が想像を語ると、閻は黙っていた。だが、否定もしない。

「怒らないで聞いて欲しいんだが、絶牢を俺に返された時――閻は自分が負ける可能性を考慮した。そして万一そうなった場合は、富嶽に残った妹分たちが危ない」

「……」

「閻は俺とリングアウトの引き分けに持ち込む事で、仲間を助けた。と、俺は推理したんだけど。合ってるかな？」

俺がウインクすると、もうツノの折れた痕の血が止まっていた閻は、

「……まあ、好きに思え。思うは自由よ」

そこのカサブタを剥がしつつ、やっぱり俺の考えを否定はしない。

「鬼の目にも涙ってやつだね」

ポン、と閻の肩を叩くと――

意外と仲間思いな心を見抜かれたのが恥ずかしいのか、閻は俺から顔を逸らした。

そして、歩いてその場を去ろうとする。

入園口をヒョイと跨いで白山通りの歩道に出た閻の横を……俺も歩きながら、

「これからどうするんだ」

そう尋ねると、
「キノクニへ向かう。泳いでな。案ずるな。方角は分かる。鬼は同族のいる場所がそれとなく分かるものだ」
と、閻は答えた。
キノクニがどこかは分からないが……泳いでどこかの島か国まで行くとなると、追跡は諦めざるをえないな。まあ一応、その辺の手も既に打ってなくはないし。
ただ、社会規範が頭にない閻を野放しにするとまた強盗を働くかもしれないので――
俺は道すがら閻を引き連れてセブンイレブンに入り、オニギリと酒を買い与えておいた。
バイトのお兄さんも、深夜に2人でやってきた俺と閻が……女子プロレスラーか何かとその年下カレシ君だと思ってくれたらしく、酒を売ってくれたよ。
「――討ち合いをした相手に、なぜ与うのだ。案ずるな。我は腹が減れば自ら獲る」
と言いつつしっかりビニール袋を受け取った閻に、
「じゃあそれで腹を満たしておいてくれよ。それにもう試合は終わったんだから、今は敵味方関係なしだ。それとも、鬼の世界では男が女にプレゼントをするのに何か理由がいるのかな？」
スパでヒステリアモードの強化されていた俺は、本音を隠しつつ笑顔で応える。
「……」
「買収するつもりもないから、聞きたくなければ聞かなくてもいいけど――俺は、覇美が持っている殻金が欲しいんだ。このまま放置すれば、アリアは緋緋神になってしまう」
「我らは、それで可いと思っておる」
「……なるほど。じゃあ物別れだ」
「そうなる」
また1つ分かったな。
鬼たちは、アリアを緋緋神にさせたいんだ。なぜかは分からないけど。
来日し医科研病院まで押しかけたのは、もうなってるかもと思っての事。
となると――交渉は成り立たなさそうだ。また戦うしかないんだろうな。この閻とも。
そしておそらく、あの得体の知れない覇美とも。
「あまり遅くまで女性を連れ回しちゃいけないし、俺も用事があるから――今夜は、ここで。あ、最後に1つ聞いておきたいんだけど……閻と覇美は、どっちが強いんだ？」
俺は急に思い出したような素振りで、この木訥な閻から最も引き出しておきたい情報を尋ねる。
だが、東京ドームを背にカッコいい顔で返された閻の答えは……
あまり、望ましいものではなかった。
「愚問也や。世は、力――鬼の位階は力で決まる。我の上にあらせられる覇美様が我より強いは必定よ。仮に我が七鬼おって抗おうと、到底、覇美様に敵うものではない」

この闇の……7倍以上、強いのか。覇美は。
大きさで強さが測れない事は知っている俺だが、これには——絶望的な気分になるな。
渡る世間に鬼は無い、なんて言うけど、ありゃ本格的にウソだね。
俺の世間には鬼ばかりだ。それも、恐ろしく強いヤツばかりだよ。

5弾　乃木坂事件（ディスクロージャー）

深夜も0時を回り、2月13日が14日に変わった頃――
経費はアリアに請求するつもりの俺は割増料金のタクシーに乗り、武偵高に戻った。
（まずは、アリアと再合流しないとな）
外務省による盗聴対策に携帯での連絡は控え、ヒステリアモードの解けた俺は……
なんとなくで、アリアがいそうな場所へ向かう事にした。
結局は自力で出たアリアだが、病院を出さえしてしまえば追っ手に捕まるようなヘタは打たないだろう。
きっと、俺と合流しようとして先にそこへ着いているハズだ。
俺は一旦、武偵高で第3男子寮に戻り……自室で静かに、持てる限りの銃弾を補充する。
そして最後に、二段ベッドの下段で1人寝ていたリサを起こさないよう――
ベッドの傍らに跪いて、その美しい寝顔を一目見ておく。
そして、心の中で語りかけた。
……リサ。
日本に連れてきたばかりで済まないが、ひょっとするとこれでお別れかもしれないな。
死んでも甦るなんて言われてる俺だが、それは過大評価。脳をフッ飛ばされたり心臓を喰われたりすれば、当然もう生き返れない。
今度の相手は、そういう事をやってくる。鬼だ。それも団体さんで、鬼の大将の覇美はそれは強いんだそうだよ。相討ちにも持ち込めるかどうかかってとこだ。
しかもこれは、極東戦役後の戦い。停戦破りの戦いになる。師団の頼もしい仲間たちの力を借りる事は、できないだろう。
でも、退けないんだ。
俺はアリアの緋弾――それをシャーロックが撃ったのを、防げなかった。
アリアが緋緋神に変わってしまいかねないこの危機の原因は、あのイ・ウーでの俺の力不足による失策にある。
だから、責任を取りに行くよ。
俺はアリアの殻金を取り返し、緋緋神化を防ぐ。いずれは、緋弾自体も何とかする。
（そのために、行ってくるよ。今は白雪もいないから……この家のこと、頼んだぞ）
心でそう言い残して、俺は寝室を、そして、部屋を出ていく。
リサの枕元には、一応、タクシーの中で書いた遺書を置いてきた。
武偵高では殉学時に少しとはいえ保険金とか弔慰金が下りるので、万一の時にはそれをベレッタ社からの奨学金の返済に充ててくれ……とか、つまらん内容のやつだけどな。

静かな冬の夜、かつてチャリジャックに遭った埃っぽい自転車置き場のそばを歩く。
安い蛍光灯の灯りを横目に、苦笑いが漏れる。
こんな味気ない所が、全てのスタート地点だったんだな。なんというか、俺らしいよ。
あの朝に理子のセグウェイで追っかけられた道を、今夜は歩き……
俺は、第1女子寮の下にある温室へと入った。
灯りのついた、バラ園――
出会った頃のアリアが自分のミドルネームさん。
っ、やっぱりいたな。ピンクのツインテール
「……」
何も言わず、アリアの隣に立った俺に――……『ホームズ』を俺に明かしたあの場所に、はは
「あんたなら、ここに来てくれると思ったわ」
腕組みしたアリアが、バラを眺めたままで言った。
「まぁ、付き合いも長くなってきたからな。以心伝心ってやつかもだ」
ヒステリアモードも解けて普段のぶっきらぼうな口調に戻った俺が、色気のないお返事。
「ここはあたしが――あんたをパートナーにって、心に決めた場所だから」
そう言ったアリアは、まだ花を見たまま……

「だから、ここで別れようと思ったのよ」
ハッキリと、そう告げてきた。
「……別れる？」
意外な言葉に、俺が眉を寄せると……
アリアは、自分のトレードマークでもあるピンクのツインテール――その結び目にあるツノみたいな髪飾りを、ぱか、ぱか。外した。
花の女子高生でありながら、普段はそこに予備の弾という物騒なものを隠し持っていたアリアだが……今は、違うようだ。
内側にもう一つずつ、一回り小さいツノみたいな髪飾りが見える。マトリョーシカ人形みたいな感じで。
「これはあんたにしか話せない、大事なことよ。他の人には見せたくない」
「……？」
アリアが俺の両手を取り、その髪飾りを握らせるので……取れって意味かと思い、引っ張ってみた。
だが……取れないぞ？
「……っ……」
アリアの頭と、くっついている。いや、逆だ。アリアの頭から、生えているんだ。
あの鬼たちと同じような……ツノ、が……！
言葉を失って目を見開いてしまった俺の前で、アリアは溜息をつく。
「発作だけじゃなくて、これのせいで……大人たちが、揉めてるらしいのよ。あたしにはよく分からないけど、見た目以上に大変な事らしいのよね。このツノ。ふふっ、キンジもあたしのこと恐くなったでしょ？　気持ち悪くて、キライになったでしょ……？」
苦笑いを作って、俺を見上げてくるアリアだが――ちょっとだけ、目に涙を浮かべてる。
なぜアリアにこのちっちゃなツノが生えたのか、これがどういう意味を持つのか。
それは……俺にも分からない。ショックを受けたのは、確かだ。とはいえ――
アリアの言う大人たち、つまり外務省やイギリス大使館は、これのせいでアリアを隔離してたのか。
くっっだらねえな。ちょっとやそっとの超常現象にビビリやがって。
「いま俺が思ったのは……これ、寝る時、枕とかに引っかかってジャマじゃないのか？　って事だけだ」
時刻は夜だが昼行灯フェイスに戻って、俺はそう答える。
「はぁ？」
「この程度で驚いてたら、お前の相棒なんかやってられねーだろ。で……これ、寝苦しくないのか」

アリアが睡眠不足に陥ると俺に対する無意味な発砲確率が増す事もあり、俺はその点をしつこく聞く。すると、

「あ……あたし、たいてい枕を抱っこして、うつぶせで寝るから」

話が意外な方へ向かっているので、アリアはちょっと混乱顔で答えてきた。

そういやそうだったな。それは俺も何度か目撃している。

アリアは胸が無いから、うつぶせでも快眠できるのだ。

だが、かつて理子がそのメカニズムに気づいてアリアをイジったら、5階からブレーンバスターで東京湾に叩き落とされてた。

なので俺は、ここは「へーそうなのか」と知らなかったフリだ。

「まぁ……ともかくキンジ。これはあたしの体の問題だから。これがどういう事なのか、どうしてこうなったのか、どうすればいいのかは――まるっきり分からないけど、自分で何とかするから。あんたは……降りるならここで降りていいわ。文句は言わない」

と、髪飾りを戻したアリアは俺からバラ園へと涙目を戻す。

そして横向きのまま、何も言わないでいる。

……そのアリアらしからぬ態度に俺はイラッと来てしまい、

「お前なぁ。ちょっと心外だぜ。お前が俺なら、そう言われてケツまくるか？」

ちょっとケンカ腰で、そう言う。

だが、アリアは――潤んだ目でバラ園を見たまま、まだ黙ってる。

普段あんだけああしろこうしろ、俺に命令してくるクセに……

「……」

「……」

沈黙が、流れる。

なので俺はアリアの横に立って、一緒にバラ園を見つめながら……

アリアが本当の気持ちを言いやすいようにと、英語で語りかけた。

「――アリア、本音を言え」

映画からもらった、正しい発音のセリフに尻を叩かれて――

もう目から涙をこぼしそうだったアリアは、びくっ、と小さく震えた。

そして俺を横から見上げてきて、俺もアリアを見た時、

「――助けて……」

涙と共に、その言葉をこぼした。

「キンジ、あなたが必要なの……！」

わぁ、と、声を上げて泣いちゃいながら俺の胸に飛び込んできた、アリアは――

やっぱり、可愛いな。こういう、最後は素直なところ。

あのイ・ウーでアリアに『お前が必要なんだ』と告げた夏を思い出しつつ、俺は――

「よし。正式に依頼を受けた。というわけで、後で料金取るからなこの件。でも知り合いだから、割引価格にしてやるよ」

この冬、ヤクザとの抗争を手伝ってくれたアリアと同じような事を言っておいた。

こく、こく、と俺の胸でピンクのツインテールを揺らして頷いたアリアは……

「……でも、あんたは……今さら聞くのも恥ずかしいけど、どうしてこんなに……こんなことに巻き込んじゃってるのに、あたしに、よくしてくれるの……？」

いつの間にか赤面していた顔で、俺をハグしながら見上げてきた。

「……こんなに愛想が無くて、ワガママで、幼児体型のあたしに……」

自覚してんのかい。

「しょうがないだろ。俺はお前が――」

「……？」

「え、あ、いや……その……俺は4月、この女子寮の屋上で決めたんだ。今さら言うのも恥ずかしいけど、俺は……」

何か自分でも分からない事を言いかけてしまった俺は、ちょっとセリフを噛んでしまいつつ――それでも、本当の事を言っておく。

「正義の味方になんか、大それたものにはなれない。でも……お前の味方ぐらいになら、なれるかもしれない……って」

そう言われた、アリアは……

キレイな赤紫色の目をウルウル&キラキラさせて、俺を見上げてる。黙ったままで。

な……何か喋れよ。なんちゅうか、気恥ずかしい事この上ないぞ。

「そっ、それに……愛想が無くて、ワガママで、幼児体型で、ヘソ曲がりで乱暴で凶暴なお前のドレイが務まるやつなんかこの世にいないだろ。その……俺以外には」

沈黙に耐えかねた俺がそう続けると、アリアはセリフの前半～中盤に『あァ？』という殺人的な表情をしたものの、ラストでまた感動したような顔になった。

「ありがとう……ありがとう、キンジ……あたし、この件が何とかなったら……なんでも、お礼してあげるから……」

「あー……じゃあSDAランキングのアジア版に登録されろ。俺のランクが1つ下がってありがたいから」

『なんでもお礼』という言葉の甘く危険な響きに、一瞬、俺らしくない事を考えてしまいかけた俺は――アリアを自分からひっぺがし、

「ともあれ、アリア……安心しろよ。いや、安心できないかもしれないけど……お前には、俺がついてるから。ずっと、ついてるから」

そう言って背を向け、背中にも抱きついてきたアリアに苦笑いする。

だが、アリア。

お前ちょっと今、油断してるぞ。

「……さて。武偵が言うのも何だが、ノゾキは良くないぜ。ここまで知らん顔してやったんだから、この件について知ってる事を説明しろ。――玉藻」

男子寮の下からずっとヘタな尾行を続けており、今もヒヤシンスの植木鉢の陰に隠れている――自発的に転がる和鞠にそう告げた。

俺に見つかって、ぼふんっ……という白煙を上げて正体を現したのは――やはり、玉藻。

極東戦役では曲がりなりにも俺たち師団の顧問役を務めた、キツネ少女だ。

小学生ぐらいに見える玉藻は、ブラウンの毛に覆われたキツネ耳をピンと立て、梅柄のミニスカ和服、一本歯のゲタ、緋色の和傘を差している。

そして見逃せない事に、腰には朱鞘の――玉藻の体のサイズに合わせた、短い日本刀を佩いている。玉藻は司令官みたいな役回りで、自ら武装してくる事はなかったというのに。

「……っ……！」

よっぽど思い悩んでいたらしく、和鞠に覗かれていた事に気づいていなかったアリアが慌てて俺から離れる中……俺は一応、拳銃の安全装置を外しておく。

極東戦役が停戦した以上、今、玉藻が100％味方とは限らないからな。

それに玉藻の表情も、険しいものだ。今までにない、鋭さがあるぞ。

「――征くな、遠山の。こっちゃ来い。先日カツエとパトラから返された殻金をアリアに戻した時にも、訝しく思ったものじゃが……そこまで、緋緋神と結んでおったとはな」

そう切り出した玉藻は――

「その角は緋緋色金とアリアの心結びが完了しつつある証じゃ。その速さ、どうも殻金は――塞ぎきれぬ状態で戻せば戻すほど、抗うように緋緋神化を加速させるのやもしれぬ。これは儂も知らなんだ。とはいえ、またヒルダに殻金を剥がさすワケにもいかぬ。2度も3度も剥げば、壊れる殻もあろうぞ。1枚でも壊れれば、そこで一巻の終わりなのじゃ」

そのキツネ目で、悔しそうにアリアを見ている。

「アリアはもうダメじゃ」

一瞬、俺を呼び寄せるように見た玉藻は――

改めてアリアを見据え、チャキッ、と脇差しに手を掛ける。

「――遠山の。星伽巫女はおらぬが、儂とお主でアリアを討つぞ。緋緋神になる前にな」

「待て、玉藻……！」

俺はアリアを庇うように、半歩前に出る。

玉藻に見えるように、手を銃に掛けながら。

「待てぬ。事は急を要するでの。髪ならまだしも、ツノとあらば儂もうかうかできぬ」

「髪？　ツノ？　どういう事だ。もしかして、アリアも……鬼みたいになるのか」

「否。緋鬼共は、太古の緋緋神の子孫よ。緋緋色金による身体の変貌は後天的なものゆえ、普通は遺伝しないものじゃが――長命の種族であれば、色形だけは遺伝するらしいでの。ヤツらの赤

髪も、そのためよ」

もう、玉藻は――

間合いを計っている。

だが俺が守る限りアリアに仕掛けるつもりはないのか、動かない。

「髪――猴は孫に変わる時、髪がツノと同じような所で励起しておったろう。緋緋色金は法と心を結んだ女の頭の内側より、2方向へと不可知・不可視の力場を放つ。緋緋色金と心の合う場合、それはツノとなって現れる。気が合わない場合は、髪の励起のみで終わる。アリアの心は、緋緋色金の好みに合っておったのじゃろうよ」

その話は、一部……イ・ウーで、シャーロックが似たような事を言っていた。

緋弾を覚醒させられる――つまり心を結べる人格は、情熱的でプライドが高く、どこか、子供っぽい性格をしていなければならないと。

そしてアリアはまさに、ドンピシャでその通りの少女だ。

だが、それが何だ。俺はもう腹を括ってる。

――俺は、アリアの味方なんだ。

ヒステリアモードではないただの俺でも、それを貫く事ぐらいはできる。

仮に玉藻が俺ごとアリアを斬ろうとしていても、俺の答えは一つだ。

「――玉藻。もう1度言う。待ってくれ。この件は元々、俺のせいでもある。だから俺がなんとかするから。必ず、覇美から殻金を取り返して――アリアを、救うから」

自分で何かを言おうとしたアリアを制して、俺は玉藻にそう宣言する。

獣のように光る目で、心の奥底まで見透かすように俺の目を見た玉藻は……

「儂とて……遠山 侍を斬りとうはない。待とうぞ。じゃが、待てるのは遅くても春まで。太陽暦で言えば弥生の晦日。3月31日までじゃ――それまでは、緋緋神化も起きなかろ」

すっ……と、刀の柄から手を放してくれた。

「じゃが、それを回ろうものなら御破算。儂と星伽巫女を揃え、お主ともども討つ」

「遠山の。覇美は極東戦役にて、眷属。師団のお主がそれに仕掛ける行為は――あくまで『停戦』としておる今の御法度、師団全員に対する裏切り行為じゃ。儂は目をつぶるが、助太刀はできぬ。助太刀できぬは、師団の皆が同じ。良いな？」

「……ああ。最初からそのつもりだよ」

猶予は、もらえた形になったな。誠意を持って話せば通じる相手でよかった。

俺が頷くと、玉藻は……ふぅ、と溜息をついて……その表情から、緊張の色を消した。

「ほんに、遠山侍は昔より言う事を聞かぬものよの。停戦破りを眷属どもに抗言されたら、論戦に応じねばならぬは儂じゃぞ？　まったく」

「それは……済まない。玉藻にも迷惑かけちまうな」

「後で信心を寄越せ。良いな？　浄財だけでなく、畳ほどもある油揚げを奉納せよ」
じゃらっ、と、こんな時でも背負っていた賽銭箱を俺に向けて……つまりこっちに背を向けて、少しモジモジ言いよどんでから――
「んー……お主には同い年の星伽巫女もおるし、璃巫女もおるようじゃし、その上そんな幼い体つきのアリアと……そういう事になってはおらぬと思うが……」
などと言うので、自分の体つきについて自覚してるくせに額に青筋を浮かべたアリアをまた俺が制する。
「うー、変に意識させぬため、逆に言わぬ方がいい事やもしれぬが……マチガイが起きる事もあるでの。いや。その、な。念のためじゃ。アリアと、臥所を共にしてはならぬぞ」
そんな不可解なセリフを置き土産に、玉藻は「こゃーん！」と一声鳴き――
大きく跳躍し……空中で煙になって、消えていった。
「……？」
「……？」
俺もアリアも、玉藻の言葉が占いせいもあり何を禁止されたのかよく分からない。
何か、緒にやってはいけない事がある、みたいな発言だったが……まあ、言わなくてもいい事らしくもあった。過剰に気にするほどの事ではないだろう。
「――よく言葉だけで何とかできたわね、キンジ。戦う事になるかと思ったわ」
俺の背後で片方だけ銃を抜いていたアリアが、スカート内のホルスターにそれを戻す。
「でも、結局……2人だけでの出撃になるのね」
「最初は2人だったろ、俺たち。振り出しに戻っただけだ」
まさに俺たちの振り出しの地でもあった足下を指して、俺がそう言うと――
アリアは、クスッ、と笑った。
「それもそうね。じゃあ行きましょ。2人で、鬼退治」
「ああ。お供なしの2人きりで、だ。桃太郎みたいにはいかないもんだぜ」
「キンジ、その昔話は知ってるわ。桃太郎と、お供のイヌ、サル、キジでしょ？」
指を折りながら自信たっぷりで言ってくるアリアに、俺も苦笑いしてしまう。
「よく知ってるじゃねーか。桃色だからお前が桃太郎だとすると、今回は連れていけないが……イヌはリサ、サルは猴ってとこかな？　キジは分からん」
「キンジよ。名前にキとジが入ってるし！」
俺たちはそんな、これ以下は無いぐらいのくだらない会話をしながら温室から出ていく。
桃太郎とキジしかいない、不揃いな鬼退治ご一行の行き先は――どこかも分からない、キノクニ。だが、何はともあれその第一歩を踏み出したってワケだ。
少し向こうの第2グラウンドでは、あのチャリジャックで……パラグライダーを使ってアリアが俺をスリ抜けながらカッ攫った時に掠めた、桜の木が見える。

まだ2月だってのに、木には学食からの排気熱で桜が咲いている。
（狂い咲きの、夜桜か……）
アリアを救って、晴れて本当の桜の季節を迎える頃には――
俺の狂った人生も、少しはマトモな方向に修正されていて欲しいところだよ。

深夜1時、俺たちは……これも思い出の場所、武偵封じの街・秋葉原に来ていた。
こう見えてアリアは軟禁状態から逃亡中の身だからな。鬼から殻金を奪還しに行くのも、外務省に捜索されながらだとやりづらいハズだ。
その対策のため、俺とアリアが、相変わらず慣れない調子で……いわゆるメイドカフェ、アットホーム・カフェテリアの扉を開くと……
「萌え萌えキュン！　あ、萌え萌えキュン！」
貸し切り&営業時間を大幅延長でやっている店内は、どんちゃん騒ぎ。
店の中央ではここにいるアリアとは別の、もう1人のアリアがセーラー服姿でいて――困ったことに既に半裸のメイドさんと、テーブルの上に立って野球拳なんかをやってるぞ。
周囲では酔っ払ったメイドさんたちと、あと、私服のゴスロリ調ドレスを着たヒルダが大盛り上がり。
「ホホホッ！　もう靴下も無くなったわねメイド！」
ハニーワインを傾けてる、夜行性のヒルダは……メイドカフェをエンジョイしてるなぁ。
ポリポリ食べてるツマミは、何だアレ。ボタン電池じゃねーか。どんな胃腸してんだよ電気女。
ていうか俺も詳しくはないが、メイドカフェってのはこういういかがわしいキャバレーみたいな店じゃないだろ本来。
頭痛を押さえる俺、ポカーンとしてるアリアの前に……
「おかえりなさいませだ、遠山。アリアも無事ここまで来られたようだな」
自前のアットホーム・カフェテリアの制服を着たジャンヌが、『じゃんぬ』と書かれたハート形の名札まで付けて登場した。
雪の結晶形のお盆を小脇に抱え、憧れのウェイトレスごっこを楽しんでいるらしい。
「あー、とりあえずあのアホ理子を引きずり下ろ……」
メイドからスカートを脱がそうとしてるテーブル上の偽アリアを俺が指さすと、
「おー！　キーくんキタキター！　くっふふーっ！」
ぴょーん！　と、テーブルから偽アリアこと理子がダイブしてきて、くるりんぱ。
体操選手みたいに両手をY字に上げつつ、俺と本物のアリアの前に降り立った。
びししっ、と両手で敬礼してきたアリア理子は、
「このたびキーくんのご依頼を受けました、峰理子りんでーす！　アリア、なんか鬼とかハンテ

イングしにいくんでしょー？　その間は理子が病院で身代わりやったげるよ！」
「り、理子……？」
ようやく理子が自分ソックリに化けてる事に気づいたらしいアリアに、理子は、くしし
う。
「逆にそっちは、『アリアに化けた理子が鬼を追って動き回ってる』事にするからさぁ。外務省
にそう思わせる情報操作に、24時間だけちょうだい。その間は派手に動き回っちゃダメだよ
ー？　その後は理子を病院に置いとけば、アリアは自由に動き回れるからね」
ここは、情報怪盗の本領発揮――といったムードで、理子はアリアの声で喋ってる。
この、身代わりの任務……藍幇からの勧誘を避けるために活動を休止していた理子には適任だ
ろう。そう思って、俺が依頼してあったのだが――いけそうだな。これだけアリアそっくりに化
けていれば、プロの目も欺けるハズだ。
さらに理子にはヒルダがついている。イザという時も、あの竜悴公姫が味方してくれるなら安
心だろう。
「なるほどね。で、報酬――どうせキンジはあたし払いにしたんでしょ？　だけど今回はあたし
も事情が事情だから、言い値で払うわ」
カンの鋭いアリアは、実際その通りのサイフ役を引き受けようとするが……
「報酬はもらわない。これはスカイツリーで助けられた借りを返すだけだよ」
アリア理子は、ぐい。アリアそっくりの仕草で腕組みし、そう言い放つ。
「あれは恩ドロボーしたって言ってたでしょ。欲しいものを言いなさい。賃金はきちんと払って
おかないと後味が悪いわ」
「ホームズ家の女から受けた恩なんか、むしろ恥。そういういらない物は、盗んでも後で持ち主
に還すのがリュパン家の習わしだ」
理子はこう見えてプライドが高いので、言い出すときかない。
が……アリアも言い出すときかないタイプだという事は分かってるらしく、
「でもー、ここの場代はアリアが払ってよね？　これは報酬じゃなくて、経費だから♪」
と、このメイドカフェを1晩貸し切りにした代金の請求書を伝票用クリップボードごとアリア
に突きつけた。実質的には、報酬をもらうような形で。
1の後ろにゼロが6つほど並んでる請求書に俺は青ざめるが、
「……ったく。遠慮無く飲んだものね」
アリアは片眉を小さく上げただけで、それに自分の黒いアメックス・センチュリオン・カード
――ゴールドカードの上を行くプラチナカードの更に上位版となる黒いクレジットカードをパチ
ンと挟んで理子に返した。
「でも、分かったわ。その貸しの返還、今回は謹んで受けるから。これでもう、あんたとあたし
は正真正銘の貸し借りナシ。ホームズとリュパンとして、スタートラインに戻った。そう胸に
刻んでおくからね」

手を腰に当てて言ったアリアに、理子はまた両手敬礼をしつつ、
「うっうー！　刻む胸が見当たらないんですけどー？」
などと言うや否や、コンマ1秒でキレたアリアに、がっし！　ぼか！　ぼこぼこ！
飛びかかられ、馬乗りになられて、フルボッコにされてる。
「ちょまっ、アリアっ！　メイクが取れちゃうってば！　アリアんや！」
アリアがアリアを襲う珍しい光景から……俺は背を向け、いつまで経っても犬猿の仲の2人にジャンヌと微苦笑を交わす。まあ、あれはあれで気の合う2人って事なのかもしれないな。ケンカするほど仲がいいって言うし。
その後、アリアと理子は厨房に引っ込んで――完全に似せるためにパンツ交換がどうのとかいう聞きたくない話をしてたので、俺は、
「で、ジャンヌ。映像は見れたか」
別の話題に逃避する事で、脳が勝手な想像をする事をインターセプトする。
俺は、富嶽で――
平賀さんから買った『レフボタン』、通称・盗撮ボタンをずっと稼動させていた。
さらに闇と戦う中で取れた素振りで制服からちぎり、機内に置き去りにしてきたのだ。
ボタン型カメラは動画を衛星通信でネット上のストレージにアップしていたハズだが、その分析を情報科のジャンヌに電話で依頼しておいたところ――
「ああ、きちんとダウンロード出来たぞ。お前のノゾキ趣味もたまには役に立つものだな。おかげで、興味深い事が判明した」
少々の誤解を含んだ言い方で、それでもジャンヌは頼もしく答えてくれた。
「お前のカメラは誰かが拾ったらしいが、まだ生きている。今は懐か何かに入れられていて、真っ暗だがな」
ヒラヒラのウェイトレス衣裳、オーバーニーソックスの美脚を見せつけるように歩いたジャンヌが――Archosのネットブックを通学鞄から出してきて開く。
テーブルに置かれたミニPC上では、俺の視点とほぼ同じ映像が……閻の胸に顔を押しつけちゃった辺りから再生される。なんでそこからやるんだよ。
「ここ。この鬼だ。私はこいつを知っている。写真と伝聞のみでだがな」
動画を一時停止したジャンヌがキレイな指で示したのは、甕に入って頭の上半分だけを出していた……メガネの女鬼だ。
「私が見た写真でもこの甕に入っていたから、全身像は分からないのだが……名は、壺。中近世の日本では刀鍛冶や鉄砲鍛冶をやっていた、イ・ウーの初期メンバーの1人だぞ」
「イ・ウーの、初期メンバー……？」
「終戦直後、2代目艦長・ギルベルト＝シュタッハの時代から在籍していた兵器技師だ。壺は兵

器工学の――文字通り、鬼才でな。イ・ウーに遺されていた大戦中の未完成兵器の設計図を元に、勝手に兵器を開発していたそうだ。彼女が造ったシンデンという戦闘機は当時の副艦長の愛機となり、それも写真が残っている」

震電――

旧日本軍がB－29迎撃の切り札として開発していた先尾翼型局地戦闘機、震電の事か。

ってことは、多分あの甕入り鬼が富嶽を造ったんだな。ハタ迷惑なヤツめ。

だがそれが分かった所で、鬼退治に大した進展はない――

という少し醒めた顔を俺がすると、ジャンヌは表情をやや険しくして説明を続ける。

「壺は近年ココと入れ替わりになるまで、イ・ウーに長居していた。それで、記録は多く残ってな……彼女は天才にありがちなタイプで、階級や身分というものをまるっきり無視する性格だったらしい。描く時は驚嘆すべき設計図を次々と描くが、それ以外の時は相手が艦長だろうと王族だろうと呼びかけに応じず、何年でも甕の中で寝ていたそうだ。天才の壺を自在に起こし、言う事を聞かせられた人物は――ただ1人だけ」

「1人……？　誰だ」

「――シャーロック・ホームズだ」

……ここで、その名前が出てきたか。

天才は、天才を知る――どこか、共感したのかもな。壺と、シャーロックとは。

だが、シャーロック……それはもう、消えた男の名だ。

今はあの鬼の大将・覇美の言う事を聞いて起きてるんだろう。多分、だけどな。

「映像は引き続き監視し、さらに何か分かれば連絡する。遠山、武運を祈るぞ」

少し考え込んでいた俺に、ジャンヌはそう告げて――ペーパーカンパニーの法人名義で新規契約した携帯を2台、俺とアリア用に渡してくれるのだった。

その後、アリアがトイレに行った隙に――

「おい理子」

俺はアリアに化けたままの理子を、手招きする。

「くふっ。キーくん、ようやくアリアとアリコを見分けられるようになったねぇ」

アリコ……アリア＋リコ＝アリコか。

「まあ、何度も騙されたからな。それはそうと、さっきのお前の理屈。今回のでアリアとお前の間では貸し借りナシになるかもしれないが、あれだと俺はお前に借りができるぞ」

「をっ？　うーん、そうだねぇ。キーくんからの恩は、ドロボーする価値があったから」

「なら今の内に、報酬の件を整理しとくぞ。幾らだ。言っとくが俺は借金持ちだからな」

後からふっかけられる前に値切り交渉をしとこうと、俺が目つきを鋭くしたところ――

「じゃ、キーくんは帰ってこれたら理子と付き合って」

理子はアリアの顔で、しかし声は理子に戻してそんな条件を出してきた。
金品を要求されなかった俺は心の中でサムズアップしつつ、
「ああ、分かった」
と、OKする。すると理子は、
「え。」
一瞬、割と素の理子の表情で固まった。
それから……額に汗を浮かべて苦笑いし、
「えーっと、キーくん意味分かってるかな？
合うんだよ？　初めて、正式に」
某自民党の政調会長や某戦場カメラマンみたいに、ゆっくり、噛んで含めるように確認してくる。
「ああ。意味は分かってる。その上で、約束する。男に二言は無い」
どうせコミケとやらの売り子に付き合うとかそういうのだろ？
100万払えとか言われるのに比べりゃ、そんなのお安い御用だぜ。
俺がそれを請け負うと、理子は両眼をキラキラさせて――
「う、ぁ……ぁ、えっと、理子、がんばるよ！　明日も頑張って、わざと捕まるからね！　アリアの身代わりに！　えい・えい・がおー！」
両こぶしを握りしめて、ずずいっ！　と、身を乗り出してきた。顔も一気に赤くしたな。アリアの急速赤面術までマスターしてたとは、やるな理子。
「しっかりやれよ？　――楽しみにしてろ。俺は必ず帰ってくるから」
リップサービスでそう言うと、俺はトイレから出てくるアリアを迎えに席を立つ。
――俺とアリアがやろうとしている事は、停戦破りの鬼退治。
そいつに理子やジャンヌ、今は師団のヒルダを直接加勢させる事は御法度かもしれないが……
こういう掩護程度なら、もしバレても玉藻は眷属に抗弁できるだろう。今日日あのお堅い自衛隊ですら、集団的自衛権は認める流れなんだしな。

草木も眠る、丑三つ時――
俺とアリアは、人けもすっかり失せた秋葉原・中央通り沿いを歩く。
「これでジャマな追っ手は防げそうだけど。さて、どうしようかしらね」
白い息を吐きながら、静けさの中でアリアがそう語りかけてくる。
「今も思ったし、バスカービル時代にも思い知った事だが――仲間は大切だよ。やっぱり、まずは誰かしらに頼らないとな」
「誰が味方してくれるってのよ」
「極東戦役の関係者はダメだし、学校の連中にも迷惑は掛けたくない。ので、とりあえず身内だ。明日、一緒に俺の実家に行くぞ」

「えっ」
「なんだよ」
「えっえっ。キンジの……ご、ご実家？」
「なんでそんなにテンパった顔する。お前の実家みたいに遠くないから安心しろ。巣鴨だ。理子の情報操作には丸1日かかるみたいだから、それまでしばらくは俺の家に潜伏するぞ。つってもう今日はもう遅いから、明日な。まあ日付的には今日だが……って、ややこしいな。つまり今日14日の正午、巣鴨駅南口で再集合だ。お前も身辺整理があるだろうし、俺たち2人が雁首並べると目立つかもしれないから――今夜は、別々に姿をくらまそう」
「はっ、はい」
アリアは、実に珍しく敬語に類する言葉を俺に残し――
それからすぐに拾えたタクシーで、中央通りを去っていくのだった。
後からもらったメールによれば、今夜アリアは虎ノ門にある連城弁護上のマンションに身を寄せ――母親、神崎かなえさんの裁判の話をしたりして過ごすとの事だ。なるほど、それなら安全だろう。彼女は元武偵の武装弁護士。セーラや妖刀・魔剣じゃないが、金を払ってる間は頼れる相手だからな。

2月14日は、雲ひとつ無い快晴だった。
（あんまり、家族を他人に見られたくはないんだが……まあ、アリアにならいいか）
カプセルホテルで夜を明かした俺が、正午、巣鴨駅南口に着くと――いた。
手持ちぶさたらしく、ツインテールを自分でわさわさ触ってるアリアが。
お嬢様丸出しなスッキリした長袖のワンピースを着ており、一見子供っぽいが高そうなポシェットを提げて……なんか、正装してる感じだな。スカートも普段より長めだし。
「たかだか俺ん家に来るのに、えらくちゃんとした服を着てきたな」
そう声を掛けると、ハッ、と振り返ったアリアは――
「遅い！　前に30分も待たせたら風穴って言ったでしょ！」
がう！　犬歯を剥いて、いきなり物騒なご挨拶。
今日は日差しもあるし、イギリス出身で寒さに強いらしいアリアはコートは着てないが……30分も待ってたのか？　お前。
「それにちゃんとした服ぐらい持ってるわよ。戦妹に貸してた服をデリバリーさせたの。なによその目は。目つき悪いわね。似合わないって言いたいの？」
「目つきは生まれつきだ。いや、カワイイよ。そういうお嬢様っぽいカッコも似合ってる。そも、お前は本当にお嬢様だしな」
宥めるためにそう言うと、アリアは赤くなって――
「なによ。制服のあたしと、私服のあたしと、どっちのあたしがいいの。あんたは」

面倒くさい事を訊いてくる。ので、
「どっちでもいいさ。お前はお前だろ」
俺はお得意の生返事。
「それよりアリアお前、ちゃんと寝たのか？　目の下にちょっとクマがあるぞ」
「あ……べっ別に、これはその、ママの裁判の話で夜更かしてただけよっ。何か作ってたとか、期待に胸が膨らんで寝つけなかったとか、そういうのじゃないからねっ！」
そりゃそうだ。アリアの胸が膨らんだりしたら、パッド屋が困るだろ？
と思っても口に出さないあたり、俺の対アリア危機管理能力も熟練の域に達してきたね。
「ねえ、こないだヤクザの屋敷で――キンジの実家に行くって約束してたわよね。あんた、それを守った。偉いわキンジ。誉めてあげる」
アリアは背伸びして、笑顔で俺をヨシヨシと撫でてくれたが……
そういや、そんな約束してたな。鏡高組の本家で。
だがそれに何でそんなにアリアが喜ぶような意味があるんだ？　分からん。

アリアを連れて、商店街、寂れたタバコ屋、材木屋――昭和の面影を残す住宅街を歩き、『遠山鐵』――俺の爺ちゃんの住む、日本家屋の前に着く。
その門をくぐり、俺はサザエさん家みたいなスライド扉を開こうとするが……アリアは門の辺りでモジモジして、ツインテールを自らモミモミしてる。門の中に、入ってこない。
「どうした？　ここなんだが」
「えっ、あのっ」
らしくないヘタレ顔をしたアリアは、なぜか俺の家に入る事をためらっているようだ。
「何やってんだよ。うちの爺ちゃんはアメリカに危険人物としてマークされてるらしいが、そこそこ安全な人間だから。心配すんなよ」
「そっ、そうじゃなくて、うぴゃあ！」
俺がアリアのちっこい手を掴んで門の中に引っ張り込むと、アリアはふたえのお目々を見開いて超テンパってる。
なんなのコイツ。落ちてるももまんでも拾い食いして、どっかおかしくなったのか？
すると、俺の声が聞こえたか――ガラッ。
白髪で角刈りの爺ちゃんが、着流しに半纏という純和装で扉を中から開けてくれた。
「おお。帰ったか、キンジ」
「あー、ただいま」
などと短い挨拶をする爺ちゃんと俺の隣で――
――アリアが、スッ。
薄桃色のワンピースのスカートを摘まんでちょっと広げ、右足のつま先を左足の後ろで小さく

突いた。珍しく大人っぽい表情をし、目を閉じ、頭も垂れている。
俺の爺ちゃんに深い敬意を示すような、その仕草は――説明不要で分かる。イギリスの淑女が初対面の相手に儀礼を尽くし、正式な挨拶をする動作なのだろう。
「初めまして。お会いできて光栄です。神崎・ホームズ・アリアです」
愛らしいアニメ声で、そう名乗ったアリアだが……
アリアが人に『ホームズ』を名乗るのは極めて珍しい事だ。というか初めて見た。
「おー、これはまたお人形さんみたいにカワイイ娘さんじゃの。ほれ、寒いじゃろ。早く上がりなさい」
爺ちゃんも、アリアを優しく上げてくれるが――ポシェットを、チラッと見たな。俺も気がついてはいたが、中に弾倉なんかが入ってるのを見抜いたらしい。さすが、元軍人は抜け目ないよ。
その後、茶の間に上げてもらったアリアは――
いつもは俺に「いつものエスプレッソ、30秒以内！」とか命令するくせに、婆ちゃんがお茶を淹れてくれるのを手伝う有様。いい子ちゃんぶってる。一体……どうしたんだよ？　巣鴨にはアリアをおとなしくさせる ア払結界でも張られてんのか？
で、爺ちゃん婆ちゃんと、コタツで文字通り茶飲み話タイムになり――
「私は東京武偵高校でキン……遠山君と同じクラスに通っているクラスメートなんです。キン……遠山君にはいつも良くしてもらっています」
自己紹介や相槌メインの会話をそつなくこなすアリアは、俺のことを『遠山君』などと呼ぶ始末だ。蕁麻疹が出そうだぜ。
で……
爺ちゃん婆ちゃんの好感度を無駄に上げたアリアだが、それから2人が席を外すと――ず、ずず、とコタツから出てきた。何やら、額に汗をどっと滲ませつつ。
「どうした？　部屋、暑かったか？」
「……くッ……あ……」
問いかけに呻き声しか返してこないので様子を見てると、アリアはニーハイソックスのアンヨをプルプルさせて……正座から体育座りにモードチェンジしてる。
「具合でも悪いのか。さっきから奇行が目立つんだが」
「……し、しびれただけ……よ……」
辛そうにそう返してきたアリアに、俺はなるほどと手を打つ。
白人は足の骨格構造がアジア人とちょっと違うから、しゃがみ姿勢や正座が苦手なのだ。
クォーターのアリアはだいたい日本人に見えるが、そこはイギリス人だったらしい。
長時間正座してたから、足が痺れたんだ。
途中で足を崩して、正座なんかやめりゃよかったものを。なんでそうしなかった。

「武偵が機動力を失うとはな。不覚だぞアリア」
ここは遠山家、すなわち完全なる俺のホーム。男子寮もホームだがあそこではアリアにやられっぱなしの俺としては、自陣でアリアに普段の鬱憤を晴らす千載一遇のチャンスだ。
とばかりに、俺は、ぬぅ……と立ち上がり、アリアを自分の影で覆う。どうだ恐かろう。
「な、なに。なにする気」
たらり、と汗をかいて怯える目で俺を見上げるアリアだが――
案の定、イヤな予感がしても動けないらしい。勝利確定。
「血行を取り戻すために、マッサージしてやる」
わしっ、と、身を屈めた俺がアリアのふくらはぎを鷲づかみにすると、
「いっ〜〜〜〜〜〜っ〜〜〜〜〜〜！」
アリアは人の家で大声は上げないつもりなのか、それとも上げられないのか、痺れた足のみならず全身をプルプルさせて悶絶してる。両目をギューっと閉じて、虚空を引っかくような動作をしてるが、そこにも力は入っていない。
反対のふくらはぎも、ソックスの上から、わしっ！
「〜〜〜〜ウッ〜〜〜〜〜っ！」
すばらしい！　すばらしいよムスカ君！　俺は今、アリアに勝てている！
「やめっ、やめっ、やめてキンジっ……！　し、死んじゃう……よォ！」
「正座で足が痺れて死んだやつはいない。不注意で動けなくなった武偵がどうなるかを、体で覚えておけ。プッ」
あまりにアリアが必死なんで、笑っちゃったよ。いつもこの残虐超人に虐げられているだけに、この征服感は無上の快感。やめてと言われてもやめられませんな。
俺につま先や足首を揉まれたりデコピンされたりするだけで、アリアはビクンビクンと反応し、超音波的な小声をピーピー出して悶えまくる。畳を這いずって俺から逃げようとしているが、ははは。どこへ行こうというのかねー。この狭い八畳間の中で。
「とりゃ」
調子に乗った俺が、アリアの右つま先を再び掴もうとした時――わしゃ！
「……治ったわ。マッサージありがとう、遠山君。お礼にバリツの小技を見せてあげる」
おっ、俺のっ、指が……！
ソックス越しのアリアの足指で、器用に絡め取られている……！
足の指で手の指に関節技を極める、だと……!?　どこまで多彩なんだよバリツの技！
「ちょっ……！」
青ざめた俺の右手を、ぱしっ！　反対側からアリアの左アンヨも押さえにきた。
左右の足の裏および指で俺の右手を完全にホールドしたアリアの、万力みたいな圧力が……ゴキッ！　ボキッ！　メキョッ！

「ちょ！　アリア！　痛ッ、いたたたたッ！　死ぬっ……！」
「手の指が折れて死んだやつはいないわ。ふんっ！　はっ！」
ぎゃあ！　本来ならそれぞれ1方向にしか曲がらない俺の5指が、それぞれありえない方向に多種多様な曲がり方をしちゃってるよ！
さっきちょっと大人しくしてるから油断してた！　やっぱりアリアはアリアだ！

……俺の家という事で発砲や投げ技を喰らわなかっただけ、よしとしよう。なお、指は遠山家に伝わるやたら痛みを伴う整復術で一本一本治した。
まだヘンな方を向いてるのもあるけど、まあ俺だからほっときゃなんとかなるだろう。
で、その閲覧注意的な手でフスマを開け――
「とりあえず、あと半日はハデに動けないからな。お前も適当にゴロゴロしてろよ」
掛け軸や襖絵を珍しそうに見てるアリアにそう言い残し、俺は自室の六畳間に向かう。
（今回の戦いは、本当に死ぬかもしれないからな……）
と、俺は私物でゴチャゴチャの押し入れを開け――
前にジーサードが欲しがってたペナントや木彫りの熊、かなめが欲しがってた将棋盤や銀のエンゼル3枚なんかを、それぞれに分配する形で段ボール箱に入れていく。
「何やってんの？　キンジ」
爺ちゃん婆ちゃんがいないと呼び捨てに戻るアリアが、縁側からやってきて聞いてきた。
「弟妹への形見分けだ。俺の弟と妹はアホだからな、もし俺が死んだらここのガラクタの取り合いでケンカしかねん。それを予防する、巣鴨の平和維持活動だよ」
まあ生きて帰ってこれたら、あげないけどね。
「ふーん……うわっ、キタナっ。あんた、クローゼットの中ちゃんと整頓しなさいよ」
「っせーな。それにこれはクローゼットじゃない。押し入れっていうんだ」
「しょうがないから、掃除を手伝ってあげるわ」
出た。遠山家内でのアリアのいい子ちゃん化。いつも白雪やかなめに任せっきりで、自室すら戦妹の間宮にさせているという『掃除』をなさると仰ったよ。ウインクしつつ。
だが実際、押し入れの中は俺が小学生時代から集積したガラクタで混沌としている。
せっかくヒマなんだし、手伝ってもらうとするか。
「ああ、ありがとう」
と、アリアに手伝いを頼み……あれこれ整頓すること、小半時間。
やっぱりサボりに入ったのか、しばらくアリアが静かにしてるなーと思ってたら……
「ふーん。キンジあんた、こんなのが好きなわけ？　へえー……そうなんだ……」
何やら妙な事を呟いてるので、そっちに振り返ると――
（……っ……！　……っ！）

アリアが床に重ね置き、眉間に皺を寄せてパラ見してる御本は……！
じ、爺ちゃんがここにも隠してたらしい自家ヒステリアモード化術『春水車』のパーツ、すなわち、水着とかそれ系のグラビア写真集！　じゃねーか！
「ち、ちち、ちがうッ！　それは俺のじゃなくて、爺ちゃんの――」
という俺の異議はシカトされ、ぎゅ、とアリアは写真集の束をビニール紐で縛り上げる。
奇しくも最上段には、和服のお姉さんが荒縄で縛られてる謎の写真集が。
「あんたねぇ、人のせいにするなんて最低よ？」
毛虫を見るような目で俺を見るアリアに、「いやホントに違うんだって……！」などと言っていると――
「……？」
廊下で、爺ちゃんと婆ちゃんの足音がした。どこかへ出かけるっぽい感じだ。
俺と2人で家に残される気配を察したアリアがめっちゃテンパったので、写真集の件はうやむやになったが……俺は廊下に出て、
「爺ちゃん、どこ行くんだ？」
婆ちゃんに革ジャンを着せてもらっている爺ちゃんに尋ねる。
「金一の家じゃ。あのバカタレ、久々に電話を寄越したと思えば、なにやら重大な報告をするなどと言いよるんでな」
「……兄さん、いま日本にいるのか。死んだ事になってたけど、生きてたから……それを報告するって事じゃないか？」
「死んだり生き返ったりするのは遠山家の男の日常茶飯事じゃ。他に何かあるんじゃろ」
やめてよそういうスナック感覚で生き死にするの。俺が言うのも何だけどさ。
アリアも妙に慌ててたが、俺だってアリアと家に2人で残されたらDVの餌食になる。
なので俺たちは爺ちゃん&婆ちゃんと一緒に、兄さんの家がある乃木坂へ行く事にした。
なんで動いてるのか分からんぐらいボロい爺ちゃんの初代セリカをガタピシ言わせて、護国寺・江戸川橋を経由し……都道413号線沿い、乃木会館の近くにある兄さんの自宅マンションに着く。
ここは、兄さんが殉職した事になる前から住んでいた家だ。
爺ちゃんと婆ちゃんは乃木神社でお参りしてから来ると言うので、俺はアリアと2人で先に行くことにする。
（兄さんとは、話したい事もあれこれあるしな。神出鬼没の男だから、会えるチャンスは捉えておかないと……次いつ話せるか、分からないし）
この辺はけっこう地価も高くて、兄さんのマンションもレトロでオシャレなんだが……1階にあった旅行代理店は、潰れたんだな。代わりに、今は閉まってるが『金・プラチナ売ります買い

ます』の幟を立てたピラミッド印の金売買店が入ってる。現金は、消費から投資へ――これも時代の流れかな。

何やら香辛料のきいた料理をしてるらしい香りを廊下に漂わせる、１階・１０１号室のインターホンを鳴らすと……シャンシャンシャンシャン……

室内から、小さいシンバルを鳴らしてるような音が聞こえてきたぞ？　何だ？

――ガチャッ！　開いたドアから俺たちを出迎えたのは、

「キ・ン・イ・チーっ！」

おたまを持ち、エプロン姿で、満面の笑みで両腕を広げた――

「……パ、パトラっ……!?」

イ・ウーの構成員や眷属の代表戦士として俺たちと散々戦った、エジプト美女だった。

足下には小さな砂金人形たちが、音楽隊みたいにミニシンバルを鳴らして歓迎ムード。

ナニコレ。

幸せいっぱいの表情で俺を抱き留めようとしたパトラは、ピタ、と止まり……

「なんぢゃ、トオヤマキンジか。雰囲気が似ておるから間違えたぞ。紛らわしい。直せ」

怒った顔になり、薬指にプラチナの指輪をした左手のおたまで、ぽこ。俺の頭を叩いた。

意外な人物に出くわしてアリアともども混乱状態の俺が、

「きょ、兄弟は直せないだろ」

などと言うと、

「生まれ直せッ！」

うわ。機嫌悪っ。

パトラはおかっぱ頭の黒髪を揺らし、フンっ、と回れ右してしまう。

そしてタイトなミニスカートで、高い腰をフリフリ室内に戻っていく。

「な、なんで金一お兄さんの家にあんたがいるのよ、パトラ」

それを追う形で、アリアと俺も兄さんの部屋に入っていくが――

「同棲しておる」

「……ッ……！」

告げられた衝撃の事実に、俺は入るなり腰を抜かしてしまう。

アリアも、ぽふんっ！　と真っ赤になって脳天から湯気を噴出させた。

「ぢゃが、ちょうど良い。アリア、キンジ、食器を並べるのを手伝ってたもれ？」

今度は目を細めた笑顔で手を合わせ、小首を傾げ、おねだりのポーズで振り返った……ブリッコ仕草のパトラは、基本、フレンドリーだ。

まだ半分ポカーンとしたままの俺とアリアに、戸棚から普段は使わないらしい高い皿や銀のスプーンを渡してくる。６人分。

「……メシを作ってくれてたのか。でも、こんな畏まった食器なんか使わなくていいぞ？　なん

か知ってるみたいだが、今から来るのは俺の爺ちゃんと婆ちゃんなんだから」
「お年寄りは敬うようにせよ。人生の大先輩ぢゃぞ」
自分も年寄りっぽい喋り方のパトラは、昨日今日ここに来た感じじゃない。
どうも、少し前から兄さんとここで同居してたみたいだ。
これは……イ・ウーで出会って、紆余曲折あれど……戦役が停戦したのをきっかけに、一緒に暮らし始めたって事か。
カツェが言ってたが、パトラは前から兄さんが好きだったらしいし。
キッチンで鼻歌を歌いつつオーブンを覗きこんでるパトラをコッソリ指し、
「……きっと下のゴールド売買店は、パトラのお店ね。ていうかキンジ。あんた、これ、知らなかったの？　ビックリなんだけど」
皿をテーブルに並べながら、アリアがヒソヒソ聞いてくる。
「いや、全く知らなかったワケじゃないんだが……ここまで、こうなってるとは……」
「あのパトラがこんなに丸くなっちゃうなんて。恋をすると人は変わるってやつかしらね。あんたのお兄さんもやるじゃない」
一応アリアも女子らしく、そんな話題を笑顔で興奮気味に振ってくる。
兄弟の事とはいえそれが気恥ずかしかった俺は、
「よく分からん」
とだけ答えて、スプーン並べに戻るのだった。

夕食の準備がほぼ終わると、アリアとパトラは庭へ続くベランダに出て、元・敵同士で会話していた。裁判の話なんかかもしれないな。
エプロンを外したパトラは、ちょうどその高さにある手すりに胸を乗っけるという迷惑行為をしてるが――アリアはそれをマネしようとして、乗せる物がないので体が滑り落ち、がすんっと手すりに顎をぶつけてる。その勢いで、半階ほど下にある庭にポシェットから中身をあれこれ散らばらせちゃったよ。人間、見栄を張っちゃいけないね。
そうこうしていると――
ドアが開けられて、兄さんが帰ってきた。
「兄さん」
振り返った俺の前で、防弾コートとジャケットをコートハンガーに掛けた兄さんは……
「キンジ、お前も来たのか。久しぶりだな」
相変わらずのマイペースな調子で、再交付されたらしい武偵手帳をベストから机に置く。
その左手薬指にパトラとおそろいの指輪をしているのを見つけたので、
「兄さん、指輪は銃を撃つ時ジャマになるだろ。最近またカナになって外し忘れたのか」
俺はまずそんな日常トークを振ってみたつもりが――

瞬時に、バツンッ‼　という顔面に爆ぜるような感覚が襲い来た。
「――カナの名をッ！」
しまった……！　口を滑らしたッ……！
「俺に！　聞こえる！　範囲で！　口走るなッ！」
俺は怒り狂った兄さんに馬乗りになられて、ガスガスと殴られる。
しばらく会ってなかったから忘れてた！　兄さんはヒステリアモード化するためカナになるはなるが、実は超恥ずかしいらしく、俺がカナの話をするとキレるんだったッ……！
真っ赤になって俺に拳を打ち下ろし続ける兄さんは、まさに赤鬼。閻の3倍、アリアの10倍は恐いし痛ぇ！　兄さん、カナに戻って！　できれば一生カナでいてくれよ！
そんな俺の命を救ってくれたのは、
「おかえりぢゃキンイチーっ！」
はしっ！　と兄さんの横から抱きついて立たせた、パトラだ。
俺が這ってテーブルの下に逃げる中、
「妾はカナが好きぢゃけどのう。またなってたもれ」
パトラは兄さんに密着して、懐いてるネコみたいに頬をスリスリしてる。
どうやら……男嫌いのケがあったパトラは、どうやらカナというワンクッションを置く事で兄さんという男性とも抵抗なく接する事ができたらしいな。
だが兄さんはそんなパトラに目もくれず、
「キンジ貴様ァッ！　バチカンに喋っただろうッ！」
ブリュッセルでカイザーたちから逃げる際に俺がぶちまけた、『カナは男だ』の件への怒りにリボルバー式拳銃（コルトSAA）を抜いているっ。ひいッ……！
「先週、修道女どもから問い合わせの手紙が来たんだぞッ！　むしろ、俺を気遣うような文面の……ッ！　キンジッ！」
当たり前のように俺を撃ってくる兄さんから、俺はアリアで鍛えた回避スキルで逃げる。
――で、そんなてんやわんやの後……
爺ちゃんと婆ちゃんが、部屋に到着した。
シリンダーの弾を撃ち尽くした兄さんが振り返ると、硝煙のニオイを何とも思わずズンズン進んできた爺ちゃんが……がしっ、と兄さんのベストの胸ぐらを掴んで――
――ガツンッ！　と、いきなり顔面に鉄拳を叩き込んだ。
「この、バカ孫がッ！　去年の今ごろ、海難で死んだと聞いて……心配して損したわい！　お前のような不孝者は、ホントに死んでりゃ良かったんじゃ！」
ベストから手を放し、腕組みして兄さんに背を向けた爺ちゃんに……
「……爺ちゃん。済まない」
兄さんは鼻からの出血を手の甲で拭い、そう謝った。

「じ、爺ちゃん、そんな言い方ないだろ」
久々に再会できたにもかかわらずヒドイ事を言う爺ちゃんの前に、俺が回り込むと……爺ちゃんは……泣いていた。
皺の増えた顔を、もっとシワシワにしながら。嬉し泣きで。
その様子には、アリアもパトラも婆ちゃんも気づいて……苦笑いしてる。
「……」
そうだよな。死んだと思った孫が生きてて、嬉しくないワケないもんな。
泣き顔を俺に見せるまいと、さらにソッポを向いた爺ちゃんは……
「で、重大な報告とは何じゃ。ワシャー今日は中央競馬すら見ずに来たんじゃぞっ」
カミナリ落としのムードをそのままに、尋ねた。
すると、
「……こ、婚約した。国際結婚する」
――――！
「えっ!?」
俺が飛び上がって驚くと、
「えっ、あんた気づいてなかったの!?」
アリアがそんな事を俺に言ってきて、
「な、なんじゃと!?」
「おやま、気づいてなかったのですか？」
振り返った爺ちゃんと婆ちゃんも、同じような遣り取りをしてる。
おかっぱ頭の黒髪を手ぐしで整え、モジモジと兄さんの隣に寄り添った笑顔のパトラを見て……また爺ちゃんは、ぶわっ、と嬉し涙を目に溜め、
「金一。お前は……生きとった上に、こんな美人の嫁までいきなり連れてきおって……！　破けとるジャンパーで来ちまったんじゃぞっ、今日、ワシャー！」
笑顔で、また兄さんにそんなカミナリを落とすのだった。

クリーミーな豆のスープ、ハーブオイルをかけた魚の蒸し焼き、マカロニ入り炒飯――
パトラのエジプト料理は皆に好評で、俺も初めて食べるものばかりなので新鮮だった。
爺ちゃんはエジプトの棗酒が気に入ったらしく、上機嫌でひたすら飲んでたよ。
いきなり1人増えたうちの家族と、アリアも楽しそうに食卓を囲んでくれてて……俺は、それがなんだか嬉しかった。
食後、運転代行サービスを呼んだ爺ちゃんと婆ちゃんが帰り……
アリアはパトラと皿洗いをしてるようだったので――俺は、兄さんを「少し話そう」とベランダへ引っ張り出す。

話したい事、この辺で詳らかにしたい事は、山積みだからな。
俺と兄さんはお互いジャケットを羽織って、ベランダで久しぶりに兄弟水入らずとなる。
「……婚約おめでとう。いい奥さんになってくれそうだな」
「ありがとう。まあ、あれとはイ・ウーにいた頃から付いたり離れたりしていた」
ちょっと気恥ずかしそうに、兄さんは俳優顔負けの顔を緩める。
去年の夏も、台場で微妙に痴話ゲンカしてたもんな。兄さんとパトラ。
「ピラミディオン台場、太陽の船――あの時のこと、兄さんは覚えてるか？」
カナを掠める話題なので怖々聞くと、兄さんは冷静に頷いてくれた。
「あそこで兄さんが言ってた、『緋弾のアリア』――その言葉の意味が、ようやく俺にも分かってきたよ。まあ、かなりの部分はジーサードが教えてくれたんだけどな」
「……俺も、ほぼシャーロックの『緋色の研究』から学んだだけさ。緋弾のアリアとは、緋緋神に心を乗っ取られる事なく、緋緋色金――緋弾の力を自在に操れるアリアの事だ」
兄さんは――
もう俺を1人の武偵として認めてくれた横顔で、それを教えてくれる。
「『緋弾のアリア』は超々能力者。通常の超能力を遥かに凌ぐ、世界を変える力を持つ者。何者をも打ち倒すことができ、その身は不老不死となり、時間や空間を超越し、死者すら甦らせるだろう。それを不完全ながら成し遂げていたのが、シャーロック・ホームズだ。あの男は緋緋色金に心を乗っ取られる事なく、緋弾から不老不死の力を得ていたからな」
という兄さんの話に、俺はヒステリアモードの自分が考えた説を付け加える。
「その別パターンが、香港の孫だろ。如意棒や觔斗雲は緋緋色金の力の1つだけど、孫は心を半分乗っ取られてた。他者の干渉で緋緋神になってしまう点も、兄さんが言うような超越者としては不完全だった」
兄さんは孫の事も知ってはいるらしく、一つ頷き――
「神がかった存在が現れようとする時には、必ず、それを操ろうとする者が現れるものだ。藍幇が使っていたパトラの鍵は、緋緋色金の適合者の心を強制的に緋緋神に乗っ取らせる道具。心を元に戻す機能は不完全だがな」
「白雪の色金殺女も、緋緋色金を制御する道具の1つなんだろう？」
「そうだ。あれは緋緋色金を全機能停止に追い込む、制御棒のような刀。台場でパトラがアリアに撃った呪弾にも、色金殺女由来の金属が鍍金されていた。あの時アリアは呪いで仮死状態にさせられただけではなく、色金の機能をも止められていたのだ」
「でも……その機能は戻った。あの時アンベリール号で目を覚ました後のアリアが使った技は、緋緋神の技の1つだろ？　パトラが船に建てたピラミッドの上部を消し飛ばして、過去に送り込む……そんな事、普通の超能力者に出来るとは思えない。あの時のアリアの様子も、鏡高組本家の屋上で――えっと、俺は猴の中の緋緋神がパトラの鍵で起こされた『寝起き』の姿を見た事が

あるんだが、それと酷似してたし」
「そうだ。あの時は――お前がアリアに触れた事で、緋緋神が激しく勢いを得た。そして色金殺女の力のみならず、殻金の力をも一時的に克服したのだ」
「俺が……？」
そこで、俺は言葉に詰まる。
かなり解明できてきた『緋弾のアリア』の謎だが、その辺はまだ俺には不可解な点だ。
「王子のキスで姫が目を覚ます事に、何か説明が必要か？」
フッ、と、カッコイイ顔で兄さんが言うので――
「ふざけないでくれよ。実は、その……武偵憲章6条に悖る、恥ずかしい話なんだが……教えてほしい。その辺はヒステリアモードで考えても、どうしても分からない点なんだ。なんで俺が、アリアの緋緋色金の話に巻き込まれてるんだ」
「……若いな」
兄さんは小さく笑って、頼んだのに答えてくれない。
俺とアリアの関係は、なぜか緋緋色金の動向を左右しているらしいんだが……関係者はみんな、その辺の事になると言葉を濁す。シャーロックも『君たちの今後の関係のために詳細は伏せる』だったし、玉藻も何やらそれっぽい内容を、しかし明言は渋った。
「……白雪はどうしている」
結局そこは教えてくれなかった兄さんが、唐突にそんな事を聞いてきたので――
「ん？　ああ、星伽に里帰りしてるよ」
俺がそう答えると、なぜか兄さんは少し眉を寄せる。
そして誰もいないベランダで、それでも少し声を潜めた。
「さっきの質問に、半分だけ答えてやろう。俺たちが緋緋色金に巻き込まれていく定めにあるのは、星伽巫女が絡んでいるからだ。星伽は太古から緋緋色金を研究・制御している。お前も知っているかもしれないが、古代中国に渡って猴に外科手術を施し係を造ったのも、星伽巫女の1人。教科書に載っている卑弥呼も、高レベルで色金の力を使っていた者だ」
「星伽が……」
「3年ほど前、複数の星伽巫女に同じ『託』――未来の出来事に対する、予感が下りた。『母親の危機を救うため、何者か、大いなる災いをもたらしかねない緋緋色金の適合者が日本にやってくる』と。託は巫女たちの度重なる占で高精度な予測となり、東京武偵高がいずれその適合者の居場所になるという事も判明した」
「……！」
「星伽はアリアの来日を予見していたのだ。多くは言わないが、星伽神社は宮内庁と深い繋がりがある。そこを起点に行政機関を使い、自然な入学に見える形で武偵高に監視役の星伽巫女が派遣された。それが、白雪だ。星伽の長女である白雪は、本来危険な役目には就かない習わしなの

だが――妹たちの身を案じたか、自ら志願したそうだ」

星伽の護り巫女、『かごのとり』だった白雪が……

他の星伽巫女とは違って東京に出てきていたのは、そういう役目があったからでもあるのか。

「アリアが適合者という疑惑はすぐ持ったものの、確認までしばらくかかったようだがな。どうあれ、星伽神社と鎮守の関係にある遠山家の人間――お前が白雪と再会した時点で、いずれアリアとも無関係ではいられない運命にあったのだろう」

運命――

兄さんは割と運命論者なのだが、そう言われてしまうと俺もそんな気がしてくる。

「『緋弾のアリア』について――俺が知っている事、言える事は、そのぐらいだ」

「ありがとう……十分だ。助かるよ」

「それとキンジ。俺の方から言っておかねばならない事がある。俺はこれから、緩やかに引退する。遠山の義上、その筆頭は――今から、お前だ」

「引退……？」

「俺たち遠山一族のHSSは、性的興奮をトリガーとした、人格変化を伴う全神経の強化。そしてこれは持論だが、恋とは性と切っても切れぬものだ」

恋……性……

俺のニガテ系の話を始めた兄さんだが、引退と言われてしまうと聞かざるをえない。

「いわゆる恋愛結婚では、夫婦は恋愛のその先へ向かう。最初は蜜のように甘い恋だが、その感情は次にレモネードのように甘苦く、いずれ水のように必要不可欠な愛へと変わる。愛は穏やかなもので、ヒステリアモードのトリガーとは別のものだ」

レモネード……真顔でこれを言える兄さんも、大したもんだな。

「結婚は、HSS引退への一里塚なのだ。男として、別の女に性的興奮する事は憚られる。俺は自在に性的興奮する方法を編み出してはいるが、それもグレーゾーンだろう」

「カ……あれは、いいんじゃないかな。それは兄さんとパトラが決める事だけど……」

「それだけではないのだ。男が性的興奮する力は、男性として人生経験を積むと共に弱くなっていく。加齢もまた、性的興奮を阻害する要素だろう。つまり歳を取れば取るほど、俺たちは弱くなっていくのだ」

兄さんはカッコいい顔で言ってるけど、内容はアレだな。性的興奮、性的興奮って。

だが……それは、理屈でも、感覚的にも、分からなくはない話だ。俺ですら小さい頃は映画のキスシーンにひっくり返って慌てていたが、今は冷静に早送りできている。

きっと俺たちは、結婚したあたりをピークに衰えていく戦士なのだ。

兄さんの言う、性的興奮からの『緩やかな引退』――

それは好むと好まざるとを問わず、いずれ俺にも訪れるのだろう。

「分かった。でも兄さん、諦める事ないぞ。爺ちゃんや父さんみたいなやり方はどうかと思うけ

ど、ジーサードなんか音楽とか美術品でヒステリアモードになれてたんだし」
苦笑いして言った俺に、兄さんも小さく笑い返し――
そして何も言わず、部屋へ戻っていった。
ベランダに残された俺が、兄さんの話を静かに反芻していると……
カサッ……と、枯れ葉の音がした。
高さ1m弱の、このベランダの下から。
「……？」
さっきは話に夢中だったので俺も兄さんも気づかなかったが、ネコでもいたのかな。
そう思って、ベランダから身を乗り出して覗き込むと――

――！

ピンクブロンドのツインテールが――見えた。
「……ア、アリア……!?」
俺の声にビクッと反応したその人影は、ベランダの下から駆け出していく。
暗闇の中、庭を逃げるその背を見て……俺の血が凍る。
アリアだ。
アリアに、聞かれた。
今の、話を。
（……！）
アリアはさっき、このベランダからポシェットの中身を庭へぶちまけていた。皿洗いを終えて、それを拾いにきていたんだ。
しかも逃げたという事は……マズい……！
今、アリアに、バレてしまったんだ！
……ヒステリアモードの、ことが！

取るものも取りあえず、俺はベランダからマンションの庭へ飛び降り――アリアを探す。
どうしよう。
どうしたらいいんだ。
アリアは、知ってしまった。俺がヒステリアモード、つまり性的興奮をトリガーにした特異体質で今まで戦ってきたことを。
そして何度も、アリアで、それを実現してしまっていた事を……！
頭の中は混乱するばかりで、全身に気持ちの悪い汗が滲む。
世界が、歪んでいるようにすら見える。吐きそうだ。
「……っ……！」

少し前に降ったらしい雪が、日陰になっていたこの中庭には若干残っていて――
アリアが逃げた先は、足跡からすぐに分かった。
兄さんのマンションの隣にある、乃木神社……
……その境内の中。水盤舎。
参拝者が手や口を洗う水を溜めてある、石造りの大きな水盤の裏。
そこにしゃがんで、隠れていたのだ。アリアは。
（アリア……！）
息を切らして追いついてきた俺を、水盤の裏から顔を上に少しだけ出して――
見て、いる。アリアが。
その目が、訴えている。
『……恥ずかしいよ……』と。
普段あれだけ颯爽として、勇ましかったアリアの顔は……普段の赤面よりもっともっと赤面しきり、困惑しきっていた。
ああ、どうしよう。
どう声をかけたらいいのか。
それすら分からない俺は、
「……そんなとこで、何やってるんだ」
真っ白になってしまった頭で、素朴な疑問を問いかけるぐらいしかできない。
「……思い出してたのよ。跳び箱の中のこと」
俺が……
アリアでヒステリアモードに初めてなった、あの時のことか。
理子の自走ＵＺＩに追いかけ回され、それをアリアが助けてくれた時――俺は不埒にも、抱き留めてくれたアリアの胸でヒステリアモードになってしまった頭で、素朴な疑問を問いかけるぐらいしかできない。
直後に俺がやった、ＵＺＩへの銃口撃ち。しかもフルオートで、7連撃。
その超人技を見たアリアは、俺の体に潜む『何らかの力』を見込んで……ずっと探していた、自分のパートナーに選んだのだ。
それがまさか、自分に性的興奮した事で発動した力だとは――今の今まで、思わずに。
「……」
「……」
しばらく2人して、黙ってしまった後……
俺は水盤から柄杓を取り、冷水で手を洗い、口を小さくすすいだ。
こんな事で、身が清められるとも思わないけどな。
「……」
ようやくアリアも立ち上がってきて、俺と同様に手水を使う。さすが貴族だけあって、神社で

のマナーもきちんと心得てるみたいだ。
水盤を挟んで、がっくり項垂れる俺は……
「……行くか」
「……う、うん」
どうしてもお互いの視線を交わすことはで
そうして、この上なくドギマギしながら…
2人で、夜中の神社を歩く。
だが、気が気じゃないよ。俺は。
「……それにしてもあんた、ヘンタイね。こ
うわぁ……
完全にバレてる。
聞かれたからには覚悟してたけど、現実を
だがもう、開き直ろう。それしかないんだ
「……体型は関係無い」
「え、じゃあ、なんでよ」
「それはその、お、お前だからだよ」
「……！」
2人で並んで歩いてはいるんだが、もはや
お互い、顔はやや下に向けたまま……お互
「お前は可愛いんだよ」
「……っ……」
「あ、いや、これはその、一般論で言えばで
そんなごまかしを、つい言ってしまってか
俺は、思い直す。
いや、違う。本当に思っている事を言おう
「俺も、そう思ってる。最初に出会った、あ
寒いハズなのに、寒くない。
恥ずかしすぎると、人間は熱さを感じるん
るし。
灯りが少ない神社の中、星明かりが俺たち
とても、静かだ。
「……寒いだろ？」
「……ううん」
「帰るか？」
「もうちょっと歩きましょ。あんたのお兄さ

なんでもきちんと心得てるみたいだ。
水盤を挟んで、がっくり項垂れる俺は……
「……行くか」
「……う、うん」
どうしてもお互いの視線を交わすことはできないまでも、なんとか、言葉を交わす。
そうして、この上なくドギマギしながら……
2人で、夜中の神社を歩く。
だが、気が気じゃないよ。俺は。
「……それにしてもあんた、ヘンタイね。こんな幼児体型のあたしに……」
うわぁ……
完全にバレてる。
聞かれたからには覚悟してたけど、現実を突きつけられると改めて青ざめちまうな。
だがもう、開き直ろう。それしかないんだし。
「……体型は関係無い」
「え、じゃあ、なんでよ」
「それはその、お、お前だからだよ」
「……！」
2人で並んで歩いてはいるんだが、もはやどこへ歩いているのやらだ。
お互い、顔はやや下に向けたまま……お互いの顔を見れない。恥ずかしすぎて。
「お前は可愛いんだよ」
「……っ……」
「あ、いや、これはその、一般論で言えばでだな。アリアも電熱器みたいに全身から熱を発してそんなごまかしを、つい言ってしまってから——
俺は、思い直す。
いや、違う。本当に思っている事を言おう
「俺も、そう思ってる。最初に出会った、あの日から」
寒いハズなのに、寒くない。
恥ずかしすぎると、人間は熱さを感じるんるし。
灯りが少ない神社の中、星明かりが俺たちの足下を照らしている。
とても、静かだ。
「……寒いだろ？」
「……ううん」
「帰るか？」
「もうちょっと歩きましょ。あんたのお兄さんにも、パトラと2人の時間をあげたいし」

などと、アリアは気の利いた事を言う。
その気づかい、１０００分の１でもいいからその弟にも分けてやってくれませんかね。
いや、これは……アリアなりに、俺に話す時間をくれているのかもしれない。
この件は、２人っきりじゃないと話せないしな。
現実逃避しようとしてか、俺とアリアが帰ったと思ったかもしれない兄さんとパトラがいま何をしてるのか……一瞬考えてしまい、そこも今の妙なテンションで妙な想像をしてしまいそうになる。逃避先は無いぞ、俺よ。
もう腹は括ったんだ。
ここでアリアに絶縁されても仕方ない。性的興奮してきたのは事実なんだし。
「アリア」
「……」
俺は足を止めて、そのまま、歩出たアリアが振り返る。
割と冷静に喋ってはいたアリアだが、目は口ほどに物を言うというヤツで――本心は、まだドキドキの極限状態にあるようだ。小さく握って自らの胸に置かれた右手は、それを必死に抑えつけようとしているかのようにも見える。
「どこから聞いてた」
「お兄さんが引退するって話からよ。落とした物を拾いに行ったら、あそこで……決して、盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど……」
ヒステリアモードの件は、丸々聞かれてたって事か。
「夏休み、最後の日に――探偵科の屋上でも、俺はお前にヒステリアモードの事を白状しようと思ったんだ。あの時はレキに中断させられて、それからズルズル先送りにしてきた。聞かれてからなんで、カッコつかないけど……謝罪を、やり直させてくれ。ごめん」
誠心誠意、深く頭を下げた俺に……アリアは、
「……気づかなかったわ。ずっと。あたしのカンって、そういう事には効かないのかも」
撃たないよ、と示すように手を後ろに回してる。
「……気持ち悪いと思っただろ？」
「ちょっとビックリしただけよ」
顔を上げた俺を、アリアは――
受け入れてくれるような、顔をしていた。
「あたし男子のそういうのとか、よく分からないけど。イヤな感情じゃないんでしょ？」
それどころか、どこかアリアはアリアでまんざらじゃないような表情にも見える。
嬉しいって事は、ないと思うんだが……
自分の顔がちょっと緩んでいる事に気づいたか、アリアはピンクの眉をツリ上げ、
「でっ、でも！　利用するためにそういう事させたりはしないからねっ。アクシデントでそうな

った場合だけ、軽く撃つだけで許してあげるわ」
「……『撃つ』に軽いも重いもないと思うんだが……」
「それにこれから、あんたがあっちのあんたになったら、その、やましい事を考えたって事が分かるのよね。不適切な場合は、容赦なく撃つわ」
どっちみち撃つんかい。
「撃たないでくれよ。俺も……悩んでるんだからさ」
情けない顔で俺が言うと、
「ご、ごめん。そうね。あんたもなりたくてその体質になったワケじゃないみたいだし」
重大な出来事に直面しているためか、アリアも割とマジメで従順な態度を取ってくれた。
「で、これから――パートナーとしての関係、お前はどうしたい。こんな体質を抱えてる俺という武偵が抱えるリスクは、少なくない」
「その通りよキンジ。あんたは頭も悪いし、戦い方は常識外れだし、昼行灯だし、稀代の女ったらしだし、トドメにこれでしょ？　本当にサイテーの武偵だわ」
「そ、そこまで言わなくてもいいだろ」
「――そんなキンジのパートナーが務まる人間なんて、この世にいないでしょ。その……あたし以外には。だから……感謝しなさい。これからもコキ使ってあげるから」
武偵高を2人きりで出発した時、俺が言った事へのお返し気味に……
アリアは、そう言ってくれた。
「あんたは、あたしのワトソンなの。あのワトソンがいるからややこしいけど……あたしたちは、21世紀のホームズとワトソン。あたしはそう決めたし、決めた事は一生曲げない。はい、だからほら、そんなシケた顔をしない！」
俺の鼻をグリグリ摘まんで命令してきた、ご主人様面のアリアは――
体はちっちゃいが、度量は大きい女だったんだな。
「……ついでに、1つだけ聞かせてくれないか？」
「なに」
「お前は……あっちの俺と、こっちの俺、どっちの俺がいいんだ」
「どっちでもいいわよ。キンジはキンジでしょ」
さっき巣鴨で俺が言ったセリフも返してきた。
ほんとに、言われた事は必ずお返ししてくる子だよな。アリアは。
「じゃあ指切りしましょ。改めてパートナー契約よ。キンジは、アリアがどうなろうと、アリアのパートナー。アリアは、キンジがどうなろうと、キンジのパートナー。ね？」
と、小指を出してきたアリアから――
俺は安心したのと嬉しかったので少し涙ぐんでしまったのを隠そうと、視線を逸らす。
「そんな。子供じゃあるまいし。絡指みたいで縁起悪いだろ」

と言いつつ、ちょっと鼻をすすってしまい……嬉し泣きはバレてしまったようなので、
「でもまあ、子供に付き合ってやるか。俺は大人だからな」
と、アリアの小指に自分の小指を絡めた。
「俺はお前がいないヨーロッパでも、仲間たちと助け合った。でも、俺の背中を100%任せられるのは――アリア。お前だけだ」
「あたしもよ。あんたがいない間は不安だったわ。あたしの背中を100%任せられるのは――キンジ。あんただけ」
そう言って、数秒にも、永遠にも思える指切りが終わり――
アリアはその手を、ポシェットに突っ込んだ。
「じゃ、パートナーシップの証に贈り物をあげる」
そして指切りを解いて宙に浮いていた俺の手に、ぽん。
女の子らしいラッピングに包まれた、お菓子らしき物を渡してきた。

「今日、バレンタインデーだから。チョコもももまんよ。別に徹夜して作ったワケじゃないわよ。それで睡眠不足だったワケじゃないんだからね」

などと聞いてもいない事を自白するアリアは……

きっと、留学生だから知らないんだな。これが武偵高じゃ校則違反だって事を。

「……お前が作ったのか？」

「なによそのイヤそうな顔は」

「あ、いや。イヤじゃないって。嬉しいよ。ありがとう」

「うんうん。素直なキンジはいいキンジ」

アリアはニコニコ顔で、俺を見上げてくるが……

まさか、アリアからもらえるとは。意外だったな。

しかしこれを食べるのは命懸けだぞ。アリア、料理ヘタだし――

「食べて」

「……ッ……！」

「なんでそこでピンチ顔するの。食べないんだったらあたしが食べるわよ？」

――パートナーの命を危険に晒すわけにもいかないので、俺は……爆発物解除作業的な手つきで、内容物を慎重に取り出す。

（これが、チョコももまん……！）

チョコを練り込んだ生地と思われる、ダークブラウンの、よくよく見ればももまん的な形状をしてないとも言えなくない物質――

震える手でそれを口に運ぶと……外はぐっちょり、中はゴリゴリする歯触りで……中に入ってる餡にも、チョコが含有されている事が判明する。

原材料は板チョコだな。だってほら、調理過程で混入したと思われる銀紙の味もする。

――マズイ！

「おいしい？」

「まず……まずまずの味と言える」

本音を言いかけてアドリブでフォローしたが、それは不十分だったらしく――

がしっ。アリアは笑顔のまま、俺の下顎を掴んできた。

「おいしい？　ちなみにあたし、ビリヤードの玉握り潰せるの」

「おいしい！　今それが急に理解できた！」

「泣きそうな顔してるのはなんで」

「今までこんな美味い物を口にした事がなかった、自分の過去が悲しくて……だ……！」

「えへへー」

俺の決死の回答がお気に召したのか、ぱっ、とアリアは下顎を破壊しないでくれて――デレデレした顔になった。

そして『アルミ箔こんなに食べて大丈夫かな』とか思いつつチョコももまんを完食した俺に、
「よかったわ。ほんとは校則違反だから、受け取ってくれないかとも思ったけど。キンジ、受け取ってくれたね」
……知ってたのか。武偵高でバレンタインが禁止されてる事。
「違反……来月には俺も違反するから、1か月待ってろ」
口元を手で拭いつつ俺がそう言うと、アリアは、パァッ――お星様みたいに顔を明るくさせた。チクショウ、可愛いな。何もかもを許せちまう。
「……じゃあ、そろそろ戻るか」
兄さんの家には胃腸薬があるハズ、と思った俺がさりげなくアリアを促すと――
「うん。何も言わず出てきちゃったもんね。ねえ、そういえばキンジあんた、昨日は英語喋ってたわね。ひどい南部訛りの米語だったけど」
アリアはそんな話を振ってきつつ、境内を歩き始めた。
「あ、ああ。ヨーロッパで学んできた」
ヒステリアモードのチート技を使ったものの、俺はそこは正直に答えつつ、緒に歩く。
「じゃあイギリスにも来れるわね。あんたの実家にも行った事だし、今度はロンドンにも来てもらわないと」
「ホームズ家に、俺が行くって事か？」
「……だって。指輪もらっちゃったし、誕生日に」
なぜ？　今そんな話を？
「まあ……ヨーロッパは少し慣れたし、いいぞ。行くよ」
「よし決まり。ねえ、あたし……キンジの家の皆さんに好印象だったかな」
「だったと思うぞ。ネコかぶってたし。でも逆にお前から見て、うちの印象悪かったろ」
「ううん。とってもリラックスできたわ」
できねーよ俺は。アリアも俺が兄さんにボコられたり爺ちゃんが兄さんをボコったりを見て、よく遠山家をお気に召したもんだな。奇特な。
「アリアは自分の家でリラックスできないのか」
「……うちは、居心地悪いわ。話してなかったけど、あたしには――メヌエットっていう妹がいるの。彼女は純血のイギリス人で、あたしはそうじゃない」
妹がいる事は、昔ワトソンとアリアが話してるのを盗聴した時に知ってたが……
腹違いなんだな。
「血統の事もあるし、メヌエットには曾お爺さま譲りの推理力がある。女王陛下の諮詢を仰せつかった事もあるし、天才少女よ……性格はねじくれてるけど、かわいいし」
そう語るアリアは妹が好きなような、でも羨んでもいるような、複雑な表情をしている。
「だから先に言っておくけど、ホームズ家の正式な跡継ぎはメヌエットになると思うわ。それで

もあたしの貴族権は剥奪されないけど、一族からは、生『いないもの』扱いされる事になるの。
ごめんね、こういう事……隠してて」
「いいさ、隠し事なら俺もしてたワケだし。そんなの気にするな。俺も気にしないから」
俺は正直、アリアのホームズ家での立場がどうあろうと何とも思わない。だから平然とそう答
えると、
「……ありがとうキンジ。でも、これは直接見てみないと分からない事だと思う。だから、イギ
リスに来て。そこで、キンジに分かってもらいたいの。あたしのこと、全部……」
少し不安げに言ったアリアは、それでも——
今まで言えなかった事を言えたからか、スッキリした顔になった。
そして、たたっ。
俺より先に数歩進んで、立ち止まる。
「今日は嬉しかった1日。キンジのご家族にお会いできて、嬉しかった。キンジが秘密を明かし
てくれて、嬉しかった。指切りしてくれて、嬉しかった。チョコを食べてくれて、嬉しかった。
今日は……あたしの今までの人生で、一番嬉しい1日でした」
背中越しにそう語り、お伽話のようにセリフを結んだアリアは——
立ち止まった俺に背を向けたまま、しばらく空を見つめている。
まるで俺に、何かをする……その時間を、与えるかのように。
だが、俺は——
「……」
こういう時、アリアに何をしてやればいいのか分からなかった。
「……」
静寂が、俺たちを包み——
ころんっ、と、冬空を流れ星が1つ落ちる。
それを合図にしたかのように、アリアは腕時計を見て——
「帰ろ」
と、誰もいない道を再び歩き始めようとした。
アリア。
俺は——
この体質のせいで、ずっと女子を避けてきたから……正しくは……どうすればいいか、分から
ない。
でも。
でも、後悔する気がする。
今、走らないと。
今、お前に、こうしてやらないと……！
その気持ちを抑えられなくなって、俺はアリアを後ろから追いかけて——

――抱き寄せた。
「アリア」
「待って。あたしから言わせて」
28㎝もある身長差のせいで、アリアは後ろから包み込まれるように抱かれたまま……
「今まで暴力とか振るってたけど、それは裏返しなの。信じて」
……うつむいて、そう言ってから……
「あたし、あんたの事が」
俺の腕の中でこっちに向き直り、
「――好き――」
……違う。
……違、うッ……！
「……だぞ、遠山」
アリアじゃない。これは。
いつの間にか光を失い、人形のようになっていたアリアの目に――
見覚えのある、あの気配が満ちていく。
「――ははははっ！　コイツは意外だったな！　戦で目覚めると思っていたが、恋で目覚めたか！」
今の今まで、アリアだったのに。
お前は――
「――緋緋神ッ……！」
孫にも宿っていた、あの魂が――今、アリアに乗り移っている。
アリアの顔つきが、俺の腕の中から抜け出たその仕草が、別人のものになっている。
……乗っ取られたんだ。アリアが、心を、緋緋神に！
なぜだ！　どうして……！
玉藻の話じゃ、もっと猶予がありそうだったのに。
しゃらしゃら、と首を振ってツインテールを揺らすアリア――いや、緋緋神は――再び肉体を得て、心地よさそうに空を見上げた。
「お久しぶりだな、遠山。いや、前も何度か入れそうだったんだが、この心臓を壊さないように入るのは難しかったんでな。アリアが何度か発作を起こしたり、本音を口走るのを見ただろ？　あれは恋心をくすぶらすチャンスを逃さず試行錯誤してた、あたしの努力の現れさ」
ニヤァ……と形作られたのは、純粋な――純粋に邪悪な、笑顔。
やめろ……やめろ！　アリアはそんな笑い方はしない……！
「いいなあぁ。いい。恋はいい。昂ぶる恋心が、あたしを喚び覚ます。特に、愛する者を失いか

けた時……アンベリール号でお前が死んだとアリアが思い込んだ時も良かったが、愛する者に愛を告げる、その刹那の昂ぶりはサイコーだった！　誉めてやるよ、遠山！」

怒りに震える俺の前で、緋緋神は――バンッ！

地面を蹴って跳躍し、パンッ！　と、何も無い空中を蹴って、さらに上へと飛び上がる。

そして――しゃがむような姿勢で、石造りの大きな鳥居の上に降り立っている。

新月の黒い月を背にした、アリアの姿をした緋緋神は……

「ははははーっ。この女なら、あたしの完全な現し身になれるぞ。ピッタリだ。おい遠山、ひれ伏して祝え。今のあたしは全部、ぜーんぶ使えるぞ！　如意棒だろうが暦鏡だろうが、なんでも、いくらでもな！」

動きやすくするためか、ビリビリと自分でスカートを裂いた緋緋神の声は――アリアのアニメ声だが、その喋り方は孫が俺から盗んだ俺のものと同じ。気が狂いそうだ。

色金とは、魔力の核燃料。

今の緋緋神の宣言は、あらゆる超々能力が無尽蔵に使えるという意味なのだろう。

「ああ。それとお前はバカだからちゃんと説明しといてやろう。アリアは、お前のことが好きなんだよ。お前に、恋してる」

そんな形では……

聞きたくなかったぜ。

だが、それは緋緋神が言ったことだ。アリアの言葉じゃない。

「緋緋色金は一にして全。全にして一。されど、これこそ理想の一……！」

歌うように言った、緋緋神の周囲で――

鳥居の左右に枝を広げていた木々が、ざわめき始める。

ビシッ！　ピシッ！　と、触れられてもいない枝葉が弾けている。

ふわぁ……と、引き裂かれたアリアのスカートが、たゆたう。

まるで、無重力空間にいるかのように。

鳥居を中心に、足下の玉砂利がカチカチと鳴る。砂は浮き始めた。大地の剥離と微震が始まっている。緋緋神の身に充ちる闘気によって、星々さえも震えているように見える。

「始めるぞ。戦争だ。恋と戦争――そのもう片方、戦争だ。いまの世の中はつまらない。つまらないってのは、悪。戦争はその悪を破壊する、正義の神事。正義の味方、遠山よ。ついてこい。起こすぞ、ここから世界に広がる大戦を――！　あたしは戦争を起こすのは大得意なんだ。外交的には、日本対世界でいこうぜ。まずはあたしが弱っちい人間どもをびしびし殺しまくれば、中国の三国志、日本の戦国時代、暗黒時代のヨーロッパみたいに――今度は世界中から、超人を引っ張り出せるさ。きら星のような超人たちを、あたしと、お前と、戦わせまくろう！　きっと燃えるぞ！　楽しいぞ！　このつまらん時代に、戦で風穴開けるぞォ！　ははははーっ！」

緋色のオーラを放ちながらアリアの犬歯を剥いて笑う、緋緋神は――

ピンクのツインテールを、左右に大きく広げていく。
翼の、ように。
その姿はまさに、人ならざる者。
孫の時にも思ったが、恐ろしくもどこか、見とれてしまうような美しさ……
神の名に負う、神々しさがある。
対する俺は――
――ドクンッ――
体の中心・中央に、静かに、そして強く流れる血流を感じ取る。
それが、俺を変えていく。
もう1人の、俺へと。
「――女の子にいろんな顔があるのは、普通のことだけどね」
そう切り出して、ヒステリアモードの俺が――緋緋神の顔を見上げる。
「ちょっとピンと来ないな。戦争なんて大それた話は。それと――一つ誤解があるようだ。俺は正義の味方じゃない」
「ほう、じゃ何の味方なんだ？」
今回は……珍しくハッキリしてるな。
俺の、立場は。
「アリアの味方だ」
なれている。俺は、ヒステリアモードに。これは――
アリアという存在を――緋緋神に奪われた事による、ヒステリア・ベルセ。そして更にアリアの人格が失われて覚醒したヒステリア・レガルメンテ――王者のヒステリアモード。それが掛け合わさっている。強いぞ。この血流は。
そっちが神なら、こっちは王。
神・対・王――相手にとって不足なしだろう。緋緋神。
「俺のアリアを、返せ」
そして――今夜も俺は、立ち向かう。

あとがき

はいどうも！　髪を切ったんですが家族にすら気づかれませんでした！　赤松です。

この17巻でキンジも少し触れていましたが――この物語に出てくるキンジの一族・遠山家には『絶牢』『秋水』『呼蕩』『潜林』など、様々な技が伝承されています。

でも金一とキンジで使う技が完全には同一でなかったり、キンジは父から秋水を教えてもらってなかったりと、一族の各世代・個々人の持ち技は少々ちぐはぐです。

これは何故かといいますと、まず遠山家には親から子へ伝承していい技に１００という上限数があるためなのです。例えばキンジは結構な技の発明家・収集家ですが、習得技が１００を超えたら――それを次世代に伝える際、超過分を封印・破棄する義務があります。更にキンジの父は１００の技を、金一とキンジにほぼ半分ずつ割り振って教えています。

技の伝承に対する、このいわば非積極的な遠山の習わしは……ヒステリアモードという特異体質を持つ自分たちが強くなりすぎて、歯止めが利かなくなるのを防ぐため。彼らは各人・各世代に差違や多様性を持たせて、万一誰かが悪に染まった時には――未知の技によって、その誰かを自分たちで討伐できるようにしてあるのです。

キンジも辟易してましたが、正義の味方を貫く一族には――そういった、血で血を洗う覚悟も伝わっているようです。自分で書いて言うのも何ですが、いやはや、怖ろしい。

さて、話は変わって――

このたび『緋弾のアリア』は、シリーズ累計５００万部を数えるに至りました！

コミック化やアニメ化は元より、『緋弾のアリアＡＡ』『緋弾のアリアちゃん』といった外伝も出させていただき、台湾・タイ・韓国・中国とアジア各地で翻訳版が出版されて、フィギュアを始めグッズも数え切れないほど作っていただき、ご好評いただいております『超ヒロイン戦記』にも参戦、果ては遊技機にまでなり……

この物語を書き始めた頃には本当に想像もできなかったような所まで、アリアの世界は広がっています。

そしてなんと、まだまだ広がるのです！

そう、前巻のオビで頭出しされた『新プロジェクト』によって……！

それもこれも編集部および関係者の皆さま、そして何より読者の皆さまのおかげです。

心からの感謝と共に、この巻を結びたいと思います。本当に、ありがとうございます。

では次は――キンジと閻が生じさせた閃光のように、太陽のまばゆい頃に。

２０１４年４月吉日　赤松中学

祝 アリア14巻 発売!!

■今回は久しぶりに
アリアをたくさん描けた
気がします!

久しぶりに描くキャラもいて
楽しかったです!

それではまた次巻で
お会いいたしましょう!